

大菩薩峠

白骨の巻

中里介山



この際、両国橋の橋向うに、穏かならぬ一道の雲行きが湧き上った——といえ、スワヤと市中警衛の酒井左衛門の手も、新徴組のくずれも、新たに募られた歩兵隊も、筒先を揃そろえて、その火元を洗いに来るにきまつているが、事實は、半鐘も鳴らず、抜身の槍も走らず、ただ橋手前にあつた広小路の人氣が、暫く橋向うまで移動をしたのにとどまるのは、時節柄、お膝元の市民にとつての幸いです。というのはこのほど、両国の回向院えこういんに信州善光寺如来によらいのお開帳があるということ。そのお開帳と前後して、回向院の広場をかりて広大な小屋がけがはじまつたこと。その小屋がけの宣伝ビラが、早くも市中の辻々、湯屋、床屋の

類たぐいに配られて、行く人の足を留めているということ。

その宣伝ビラもまた、小屋がけの規模の大なると同じく、ズバ抜けて大きなものへ、あおうどうふう亜欧堂風の西洋彩色絵で、縦横無尽に異様の人間と動物とを描き、中央へ大きく、

「切支丹きりしたん大奇術一座」

この宣伝ビラは、宣伝ビラそのものがたしかに人気を集めるの価値がありました。

幕府の威力衰えたりといえども、西洋の風潮、多少人に熟したりといえども、「切支丹」の文字は字面じづらそのものだけで、まだたしかに有司を嫌悪けんおせしめるの価値がある。

果せる哉かな。この宣伝ビラの「切支丹」の文字だけに、翌日から張紙がされて、その上に改めて、「西洋」の二字が記されました。

この興行の勧進元が役所へ呼び出された時に、どんな食えな
い奴かと思えば、意外にもそれは女で、お上のお叱りに対して、
一も二もなく恐れ入り、早速、人を雇うて満都の宣伝ビラを訂
正にかからせたのは素直なもので、決してことさらに反抗的に
宣伝して、人気を煽あおろうというほどな陋劣ろうれつな根性に出でたので
はなく、誰かにそそのかされて、何の気なしにやったことが諒
解が届いたから、役人たちも、単に張紙をさせるだけで、後は
問いませんでした。

この勧進元の女こそ、女軽業おんなかるわざの親方のお角かくであります。とも
かく、今度の興行には、有力なる金主か黒幕が附いたに違いな
い。従来の広小路の軽業小屋では狭きを感じて、新たに回向院
境内へすばらしい小屋を立てたのでもわかります。

「御冗談でしょう、看板でオドカそうなんて、そんなケチな真似

をすするお角さんとは、憚りながらお角さんのカクが違いますよ、蓋をあけたら正味を見ていただきましょう、正銘手の切れる西洋もどりのいるまんですよ。大道具大仕掛の手間だけでも、お目留められてごらん下さい、小手先のあしらいとは、ちつと仕組みが違うんですからね」

こういつてお角が気焔を吐いているところを見れば、おのずからその自信のほどもうかがわれようというものです。

事実、このたびの興行は、以前のようなケレン気を脱したところがある。宇治山田の米友を黒く塗って、印度人に仕立てて当りを取ったペテンとは違って、何か、しつかりした抛りどころがなければ、こうは大げさになれないものです。

ここに慶応のはじめ、大小日本の手品を表芸おもてげいにして、イギリスからオーストリーを打って廻り、明治二年に日本へ帰って来

た芸人の一行がある。白い紙を蝶に作って、生命を吹き込んだ柳川一蝶齋を座長として、これに加うるに、大神楽だいかぐらの増鏡磯吉、綱渡りの勝代、曲芸の玉本梅玉あたりを一座として、日本の朝野ちようやがまだ眠っている時分に、世界の大舞台へ押出した遊芸人の一行があります。その一行の中から、何か目論もくろむところがあつて、英国の興行中に、急に便船によつて日本へ帰つて来たものがある。それが、御家人崩れの福村あたりから、この社会へ何か渡りをつけたようです。

遊芸——なるが故に国境が無かつた。吉田松陰は、これがために生命を投げ出し、福沢諭吉も、新島襄にいしまじようも、奴隸同様の苦しみを嘗なめ、沢や、榎本えのもとは、間諜同様に潜入して、辛からくもかの地の文明の一端をかじつて帰つた時分に、柳川一蝶齋の一行は、悠々として倫敦ロンドン三界さんがいから欧羅巴ヨーロッパの目抜きを横行して、維納ウイナの月

をながめて帰ることができませんでした。しかし、粗漏そろうなる文明史の記者は、こんなことを少しも年表に加えていないようです。

いわんや、この一行が大倫敦の真中で、日本大小手品を真向まっこうに振りかざしたこと、その鮮やかな小手先の芸当に、驚異の目を睜みはつたロンドンの市民のうちに、十九世紀の偉人ジョン・ラスキンがあつたことを誰が知っている。

更にまた、この十九世紀の予言者であり、文明史上の偉人であり、絶世の批評家であるラスキンが、この小技曲芸をとらえて、日本の文明を評論した無邪気なる誤謬ごびゅうと浅見とに、憤りを発する者が幾人いくたりある。

青丹あおによし、奈良の都に遊んだこともなく、聖徳太子を知らず、法然ほうねんと親鸞しんらんとを知らず、はたまた雪舟も、周文も、兆殿司ちようでんすをも知らなかつた十九世紀の英吉利生れの偉人は、僅かに柳川一蝶

齋の手品と、増鏡磯吉の大神楽と、同じく勝代の綱渡りと、玉本梅玉の曲芸とを取つて、以て日本の文明に評論を試みている。

けれども、これは偉人の罪ではない、時代の罪である。世には陋劣ろうれつなる小人と、商売根性というものがあつて、盛名あるもの出づるごとに、ことさらにそれを卑いやしきものに引当てて貶黜へんちつを試みようとする。ヴィクトル・ユーゴーが初めてエルナニを上演した時に、一派のものは、わざとおで、こ芝居を狩り催して、それにエルナニをカリカチアさせて欣よろこんだ。

ラスキンのあやまちは無邪気なるあやまちである。後者のあやまちはそれではない。小人の食物は嫉妬であつて、その仕事はケチをつけることである。ここに巨人でもなければ、英雄でもない女軽業の親方お角さんがあります。その周囲には従来のも興行師と、それに属する寄生虫の一種、それをこわもてに飲ん

だりね、だつたりして歩く無頼漢の群れがある。この連中にとつては、回向院境内の仮小屋の棟の高さがことのほかに目ざわりであります——そういう者の存在を知つて知り抜いている女軽業の親方お角さんは、その真白な年増盛りの諸肌としまざかをぬいで、
「今度の仕事は、わたしも一世一代というわけなんですからね、その思い出にひとつ、しつかり、やつて下さいな。なあに、今までだつてこれが嫌いというわけじゃなかったんですが、河童かっぱのお角さんてのがあつたでしょう、同じ名前ですから、気がさしてね。恥かしいっていう柄じゃありません、真似をしたように思われるのが業腹べいばらでね。こう見えてもわたしや、真似と坊主は大嫌いさ。今までだつてごらんさい、そう申しちゃんなんですけれども、人の先に立てばといつて、後を追うような真似は決して致しませんからね。よその人気の尻馬しりうまに乗つて人真似をし

て、柳の下の鱒どじょうを覗ねらうような真似は、お角さんには金輪際こんりんざいできないのですよ。ですから、今度だつて、外はずれりやあ元も子もな
いし、当つたところで嫉ねたみがあるから、身体をどうされるかわ
かつたものじゃなし、どのみち骨になるつもりで乗りかかつた仕
事ですから、その思い出に素敵に大きな骸骨あたまの骨を一つ彫つて
いただきたいと、こう思いついただけなんですすよ……何ですつ
て、骸骨だけじゃ色が入らないから淋さびしいでしょうつて？ な
るほど、それもそうですね。それじゃ、骸骨のまわりに燃えた
つような大輪ぼたんの牡丹でも彫つていただきましょうか。なにぶん
よろしく頼みます」

こういつてお角が背中を向けたのは、そのころ名代の刺青師ほりものし、
浅草からくさの唐草文太かぶんたといういい男です。お角の刺青ほりものが彫り進むと共
に、回向院境内の小屋がけも進んで行くうちに、以前の広小路

の女軽業の小屋の一部は、新しい一座の楽屋にあてられました。

そこには、従来の一座と別廓をつくつて、おおいちざ大一座のしんがお新面が、雑

然たる衣裳道具の中に、ちまなこ血眼になつて初日の準備を急いでいる。

このいわゆる「切支丹」訂正「西洋」大奇術の一座の頭梁株とうりょうかぶ

とも総支配人とも覚しいのは、頭のはげた五十恰好かつこうの日本人で、

白く肥つた好々爺こうこうやですが、ドコかに食えないところがあつて、

誰か見たことのあるような人相です。知っている者は知つてい

るが、知らない者は知らない。この男は、たしか春日長次郎と

いつて、先年、柳川一蝶齋の一行の参謀として西洋へ押渡つた

はずの男であります。この男の指図で、準備と稽古に忙殺され

ている連中のなかには、不思議と紅毛人は見えないで、どれを

見ても見慣れた黒髪銅色の人種、多くはこれ生え抜きの日本人

であります。そのなかに注意して見ると、少し毛色の変つた

のが二三枚、働いている。

無口で働いている——春日長次郎はその二三枚を呼ぶたびに、何か早口で、わからないことをいってしまふと、彼等は直ちにうなず頷いて、手早く持場持場の仕事につきます。

さりとて、これは断じて欧羅巴種ヨーロッパではない。その皮膚は蒙古種族よりはズット黒いけれども、当時の日本人が夢想しているような裏も表もわからない黒ん坊とは違つて、よく見なければ、西洋人でさえもモンゴリアンと見るほどに色彩が不鮮明ですけれども、たしかに蒙古種に属する印度人か、そうでなければ印度とそれに近い他人種との混血児あいのこに相違ない。ただ彼等は、しきりにその混血児であることを隠して、日本人らしく思われようとする素振そぶりがある。

そのほかには、どうしても眼の色を隠すことのできない子供

が五六名、赤い土耳其古帽トルコぼうをかぶつて、隅っこにかたまつて、ハ—
モニカを吹いているところへ、例の春日長次郎——広袖の縫取
りのある襦袢じゅばんとも支那服ともつかないものを着て、大口のよう
なズボンを穿はいている——がやつて来て、これも何か早口で指
図をすると、子供らは心得て、蜘蛛くもの子のように四散し、高い
桁梁けたはりから吊された幕を引卸ひきおろしにかかります。

衝突ついたてを一つ置いて小道具。

裏へ廻つて見ると大道具。

ここではまた、例の亜欧堂風の大看板を、泥絵具で塗り立て
ている幾人かの看板師。

この看板をつぎからつぎと見て行つた長次郎は、横文字の綴
りの誤りを二三指摘して一巡した後、また楽屋へ戻ると、もう
稽古場たゆうれんへ太夫連が集まつて、品調べにかかっている。太夫連は、

やはりどれも日本人、少なくとも東洋人以外の面ぶれは見えな
いのに、別に補助として参加する従来の女軽業の重なる連中が、
見物がてら押しかけているものですから、やはり日本人だけの
大一座としか見えません。

と、その一方に、ゆらりと姿を現わした一人の女、これこそ正
銘偽りのない欧羅巴夫人で、これだけは姿を隠そうとも、ごま
かそうともしない。十七世紀頃の派手な洋装で、丈の高い、愛
嬌のある碧い眼と紅をぼかした頬。

片手にギターを持つて、まず長次郎と見合い、にっこりと会釈
をする。長次郎はその傍へ行つて、これも早口で話をしている
と、一方から日本娘の美しいのが一人、三味線を持って出て来
る。以前、張幕の下でハーモニカを吹いていた少年連がゾロゾ
ロとやって来ると、西洋婦人は手にしていたギターを取り上げ

て、調子を合せにかかろうとする。長次郎は、そこを去つて、また裏口の方へ向い、

「太夫元は来ないかな」

二

この興行が、いよいよ初日しよにちの蓋ふたをあけた日、人気は予想の如く、早朝から木戸口へ突っかける人は潮うしおの如く、まもなく大入り満員となつて、なお押寄せて来る客を謝絶ことわるために、座方が総出で声を嗶からしてあやまつている光景は、物すごいばかりです。これは勧進元のお角として、当然すぎるほどの結果で、寧むしろこうなければならぬはずにはなつてゐるが、やはりこの夥おびただしい人気を見ると、商売気とは違つた昂奮を感じながら、場の

内外のすべてに気を配っている。

春日長次郎が、あらかじめ一座の成り立ちの口上を述べて、やがて予定の番組にとりかかる。この口上言いの風俗からして、観る人の眼を新しくしたと見えて、その一言一句までが静粛に聞かれていることも、例のないほどで、口上があつてから、やがて、改めて観客は舞台の装飾から小屋の天井のあたりを、物珍しく見直したものです。

この小屋がけは従来の方式とは違つて、今日普通に見るサーカスの小屋がけ、日本でいえば相撲の場所とほぼ同じように、円心に舞台を置いて、さじき 敷が輪開して後方うしろに高くなる。二千人を収容して余りあるうと思われるほどの広さに、高く天幕テントの間から青空の一部が洩れているのを仰いでながめると、人をして従来の劇場とは違つた自由と快活の気風を起させる。

さて、また演技の番組に就いては、厳密に言えば、その前芸は、奇術とか、魔法とかいうよりも、一種の西洋式の軽業といった方が当っている。その間へ、ちよいちよい手品が入るという組合せであります。——けれども、その演芸のことは一々ここへ書き立てない方がよかろうと思う。その時分の人を天上界の夢の国へ持つて行くほどに、恍然魅了こうぜんみりょうした異国情調を細かく描写してみたところで、その時分の人の驚異は、必ずしも今日の人の驚異ではない。ただしかしその時の見物は、さし換かわる番組と、登場者の風俗と、それに伴奏するさまざまの楽器の音と、使用の装飾の道具類とが、見るもの、聞くもの、異常の刺激でないということはなく、その眩惑げんわくのために、半畳はんじょうのための半畳を抑え、弥次のための弥次を沈黙させただけの効果と、堪能たんのうとは、たしかに存在したものであります。見物は、たしかに今ま

で見ないものをみせられたことに、沈黙の満足を表現しているといつてよろしい。

ことに、その準備と訓練がよく行届いていたせいか、番組の進行、道具方や介添かいぞえまでが、キビキビした働きぶり、スカリスカリスと歯切れがよく進んで行く興行ぶりは、従来、演芸の吉例(?)としての、初日の不揃いとか、幕間まくあいの長いとかいうような見物心理の圧制から解放されて、気の短い、頭の正直な見物を嬉しがらせたことは非常なものです。

演技で酔わされた人が、ホッと我に返ると、

「時間と、幕間は、西洋式に限りますな」

その西洋式の讚美者は、この興行主のお角が諸肌もろはだを脱いで、江戸前の刺青師ほりものしに、骸骨の刺青を彫らせていることを知るものがない。

前芸の棒飛び、縄飛び、輪投げ、輪廻しといったのは、鍛練した技術で、眩惑の手品ではない。第一番目から手品が一枚加わって——それから四番、五番と立てつづけに、大道具、大仕掛で、華麗と、眩惑と、濃厚と、変幻の異国芸の花々しさを、息をもつかせず展開しておいて、六番目に、

「ジプシー・ダンス」

この幕間に、ちよつと手間がかかりました。

「何しろ驚いたものですな、今度はジプシー・ダンス。ええと、つまり西洋の手踊りといったようなものだそうで」

お茶を飲み、煙草を吸って休養を試みているところへ、春日長次郎がまた改めて口上言いに出ました。

これより先、開場の前までは、場内を隈なくめぐつて気を配っていたお角、開場と共に、楽屋と表方の間に隠れて、始終の気

の入れ方を見ている。

「梅ちゃん、この次は西洋の踊りですから、向うへ行つて、よく見てごらん」

附いていたお梅に、参考としてのジプシー・ダンスを見学さすべく、お附の役目を解いて暫時のお暇を与えると、娘分のお梅は有難く、喜んでお受けをして、

「それでは行つて参ります」

外行のような挨拶をして、そつと見物席の後ろへ廻ろうとすると、お角が、またそれを呼び留めて、

「かまわないから御簾みすのみすのね、あいているようなところへ入つて、ゆつくりごらん」

「有難うございます」

お梅は再びお辞儀をして行つてしまいます。

まもなく、見物席の背後から隠れるようにして、正面東側、そこに御簾をかけた一列の棧敷の後ろへ来て、お梅は怖々こわじわとその一端を覗のぞいて見ました。

ここに、御簾の棧敷というのは、小屋がけとしては異例の設備であります。けばけばしくはないが、ともかく、この一列は御簾を下げてあつて、ある一組の連中もここから忍んで見られるし、個人個人もまたここから多数の目を避けて、演芸だけを見得ることのような組織になっていました。

こういうことは、誰かしかるべき黒幕があつて、相当の身分あるものの、市井しせいを憚はばかる見物のために、特に用意をしたものと見なければなりません。木戸口からは、どうもここへ案内されたものを見たことがないから、多分この表の水茶屋から案内された特別の客だけが、前約あつて、ここへ送られて来るはずに

なつてゐるものと見えます。すべての観覧席は、爪も立たぬほどの大入りとなつて、入場謝絶に苦しんでいる際に、ここだけは充分の余裕を残して、いついかなる人をも迎え得るようになってあります。すでに、御簾みすの蔭からうかがうこの席の見物の中には、頭巾ずきんを取らない武士さむらいもあれば、御殿女中かと思られる女の一人もあります。

お梅は親方から許されて、怖々こわじわこの棧敷の一端を覗いて見ると、幸いに、そこは八人詰ほどの仕切られた席が残らずあいていましたから、そつと入つて、片隅に身を寄せ、手すりに軽くひじ肱を置いて、改めて落付いた見物気分を起しました。

この時は、もう楽屋も総出で、広小路の女軽業から手隙に來た連中も、争つて、次に行われるジプシー・ダンスを見学しようとして最寄最寄もよりもよりへ出て行つたあと、お角は秘蔵の娘分のお梅

まで出してやったものですから、この盛んな、この広い、この気忙しい中で、しばらく気を抜いたようなひとりと、ぼつちになる、思わずホッと吐息をついて、のぼせた頬を、ちよつと両手でおさえてみて、それから楽屋の窓の所へ、思わず凭よりかかりました。

窓といつても、本来が仮小屋ですから、特にそれがために切つたのではなく、幕を下ろせば壁となり、幕を絞れば窓となるだけの組織ですが、ちょうど、その幕が絞つてありましたから、お角は、その傍へ寄つて柱に凭りかかつて、外の空気に触れると、ここは高いところですから、眼の下に新しい世界が、新たに展開した心持がしました。

新しい世界といつても、場内の変幻出没のような夢の国の世界が現われたのではなく、尋常一様の両国回向院境内の世界で

すけれども、人気と、眩惑と、根こんづかれの空氣にのぼせ、たお角にとつては、その尋常一様がまた新世界のように感ぜらるべき道理でもあるが、ことにその眼の下に現われたのは、回向院の墓地でありました。乱離たる石塔と、卒塔婆そとばと、香と、花との寂滅じやくめつせかい世界が、急に眼の下に現われたものですから、お角は目をすましました。

お角が人いきれの中から面おもてを窓の下に曝さらすと、そこは回向院の墓地であります。卵塔らんとうと、卒塔婆の乱離たる光景が、お角の眼と頭とを暫しながら、思いもかけない別の世界に持つて行き
ました。

お角は、その荒涼たる人生の最後の安息所を、我を忘れて見下ろしていた間は何事ありませんでした。

そのうちに、墓地の一方の木戸をあけて、静かに内部へ足を

運んで来る二人づれのお墓参りのあつたことを気づいたまでも無事でありました。

一方、魔術の世界の華麗と、眩惑に浸っている群衆と、また一方、こうしてしめやかに人生の最後の安息所へのお参りに足を運ぶ人とが、背中合わせになつてゐる。それをお角は、やはり無心にながめて、頬のほてりを冷している。お墓参りの二人の者もそれを知らず、まだ新しい木標もくひょうの前に近づくと、二人のうち、案内に立つたお屋敷風の小娘が、

「ここでございます」

で、手にかかえていた阿枷桶あかおけをさしおくと、それに導かれて来た、塗笠おもてに面を隠した人柄のある一人のさむらい。

手に携えていた香華かうげを、木標の前の竹筒にさして、無言に立つていると、娘は阿枷の水を汲んで、墓木ぼぼくと花そそとに注いでゐる。

塗笠のさむらいは、木標の前に立つて、軽く頭こゝろべを下げ、感慨深く立っている。

「殿様、どうぞ、お水をお上げくださいませ」

娘は杓柄ひしやくを武士の手に渡すと、それを受取った武士は、墓に水を注いで、

「この文字は誰が書きました」

「御老女様からのお頼みで、大僧正様が書いて下さいました。御老女様は、そのうちお石塔を立てて、そのお石塔の後ろへ、朝夕あしたゆうべの鐘の声、という歌を刻んで上げたいとおっしゃいました」

高いところで、見るともなしに見ているお角の耳へは、無論この二人の問答は入りませんが、満地の墓碣ぼけつの間にただ二人だけが、低徊ていかいして去りやらぬ姿は、手に取るように見えるのであります。そこで、お角は早くも、これはしかるべき大身のさむらい、

い、が、微行しのびで、ここへ参詣に来たものだなと感づきました。表には憚るところがあつて、この娘だけが一切の事情を知つていて、お殿様の案内をして、こつそりと参詣に来たものだなという感じは、お角のような打てば響くところのある女性には、見て取ることが早いと見えます。

その大身のさむらいと思われる人品のあるのは、最初から笠に面を隠していますから、その何者であるやは確かにはわかりませんが、羅紗らしやの筒袖羽織に野袴はを穿はいて、蟬鞘せうざやの大小を差し、年は三十前後と思われるほどの若さを持つているのが、爽やかな声で言います、

「それから、あの奇怪な風采ふうさいをした少年、少年といおうか、或いは若者といおうか、正直にして怒り易い、槍に妙を得た、あれのおおさななじみ幼馴染といつた男は、どうしていますか。あの男を、そなたは

御存じか……君は絶えずあの男に逢いたがつていたのだが……」

「ああ、米友さんのことでございますか……」

と娘が答えた時に、大魔術の小屋で大太鼓と金鼓きんこの音がけたたましく、鳴り出しましたから、墓地の中の二人も、これに驚かされ、問答の半ばでふたりいい合わせたように、この高い天幕の小屋を見上げますと、そこで計らずも、窓から見下ろしていたお角と面かおを見合わせました。

「おや？」

と驚いたのはお角です。こっちは窓に人がいると気づいただけですけれども、お角はこの墓地の中から、笠おもての面を振上げたその中の人を見て、驚いてしまいました。その人は、もとの甲府勤番支配、駒井能登守に相違ないと思つたからです。

それとは知らない二人づれの墓参りは、やがて墓の前を辞し

て徐ろおもむに以前入つて来た木戸口を出て、魔術の小屋へ吸い寄せられる人足ひとあしに交り、相撲茶屋を横に見るところへ来ると、

「モシ、それへおいでになりますのは？」

と呼びとめたもののあるのは、どうも自分たちを指したものらしい。二人は、ちよつと二の足を踏みますと、早くも、そこへ駈け寄つて来た女の人、

「駒井甚三郎様」

立ちどまつた以前のさむらいはハツとしました。追いついて来たのは大魔術の勧進元のお角。

「おお、そなたは……」

駒井は、その女を見ると、あわただしいそぶりであります。

「まあ、駒井の殿様……いつこつちへお越しになりましたんですか、あんまりじゃございませんか、わたくしどものところへ

なんぞ、お沙汰さたも下さらないで、ほんとうにお恨みに存じますよ」

お角はこの人を見ると、まず怨みうらの言葉を浴びせかけるほどに、熱しているものと思われます。

「今、ここへ着いたばかりじゃ」

「お宿は柳橋でございますか」

「ついこの先……」

申しわけのようにする駒井の返事を、お角は焦じれたそうに、「なんに致しましても、ここを素通りはなりません、おいやでもござりませうが、ぜひお立寄りを願わなければ」

といつて、お角は、連れのお屋敷風のキリリとした娘の姿を、心ありげな眼つきでながめますと、その娘もはつとしました。が、何にもいわず軽い会釈をして、やや手持無沙汰でいると、駒井

は迷惑がつて、

「どのみち、宿をきめてから」

こういいますと、お角は、もとより逃のがさないつもりですから、

「まあ、左様におつしやらず、わたくしどもの一世一代を御見物下さいませ、ずいぶん、骨も折れましたが、まんざらごらんになつて腹の立つようなものばかりでもございません」

「ははあ、この興行は、お前がやっていたのか」

「左様でございます、御案内を致します。お嬢様、どうぞあなた様も、御迷惑でも殿様のおつきあいをなさいませ」

「お松どの、せつかくのことだから見せてもらおうか」

「はい……」

御屋敷風の娘は、老女の家のお松であること申すまでもありません。お松はこの返事に躊躇ちゆうちよしましたのは、墓参ぼさんの帰りに……

という気がトガめたのかも知れません。

しかしながら、駒井甚三郎は、どのみち退引のつびきならぬ相手につ

かまつたものと観念をしたのでしよう、お角の案内に随つて、

遠慮をするお松を引具ひきぐして、ついにこの小屋へ足を向け、

「相変らずエライことをやり出したな。なに、切支丹の魔術……

それは面白い。この看板は誰がかいたのじゃ、日本人に描かしたのか、彼地あつちから持つて来たのか。向うの下絵によつて写した

と。なるほど、横文字入りで変つた図柄じゃ、とにかく、これ

だけのことをやり出したお前もエライが、向うへ渡つてこれを

持つて来た奴もエライな。ナニ、春日長次郎……柳川一蝶齋の

一座で先立ちして来た男だと。知らん、すべて拙者はまだ日本

のものも、西洋のものも、手品というは評判だけに聞いて、本

物を見るのは今日がはじめてじゃ。日本のものを向うへ持つて

行けば相当に面白かろう、むこうのをそのままこつちに見せることは一層珍しい。誰が周旋してくれたのじゃ。ほかの興行と違つて、見る人に新知識を与え得るものでなくてはならぬ」

駒井甚三郎はこういいながら、相撲茶屋から御簾みすの棧敷さじきへ案内されました。

三

駒井甚三郎とお松が案内された席は、ついたつた今、お梅がそつと入り込んだ御簾の棧敷の一間であります。

それと見てお梅は、遠慮して席を避けようとするのを、お角が、

「いいから御免を蒙こうむつて、そうしておいで」

そこで、この一間には主客都合四人が納まった時分に、ようやく春日長次郎のジプシー・ダンスの口上が始まりましたから、駒井甚三郎は、ちようどこれを見るために、わざわざこの席へ来たような具合になりました。

春日長次郎は、五十恰好の禿はげた素頭すあたまの血色のよい面かおをして、例の和服とも、支那服ともつかない縫取りのある広袖はんてんの半纏はんてんに、大口のようなズボンを穿はいて、舞台に現われ、

「さて、東西のお客様方、初日早々かくばかり盛んな御鼻ごひいきをいただきまして、一同の者、何とお礼を申し上げよう術すべもなく、有難涙むせに咽むせびおります次第でございます。ただいままで、だんだんとごらんにそなえました技芸、ことごとくお気に叶いまして、楽屋一同の感謝にございませうが、ことにこのたびごらんに入れまするは、ジプシー・ダンス……これはお聞き及びでもご

ございましたが、太古より今日に至るまで、ア亜細亞アとヨーロッパ欧羅巴の間を旅から旅へとうつり歩く一種族でございまして、かつ曾て一定の国というものを持ちませぬ、また一定の家というものを持ちませぬ、青空の存するところが彼等の故郷にございまして、水草の生えるところはすなわち我が家、と申す有様でございまして……何故に、このジプシー族に限って、国と家とを持たず、太古より今日まで、漂浪を続けているかと申しまするに……彼等はその昔切支丹宗きりしたんしゅうの救い主を殺した罪の報いによつて、その国を失い、ついに生涯枕をする土地を与えられなかつたのださうでございまして……」

説明半ばで、駒井甚三郎が、これは少し変だと思ひました。この説明人は、ジプシー族とユダヤ族との伝説を混同しているなど思ひました。しかし、多数の見物は一向そんなことを念頭

には置かず、極めておとなしく説明を聞いていると、咳払い一つした春日長次郎は、続けて、

「しかしながら、切支丹の罪によつて国を逐おわれ、枕するところを奪われたジプシー種族に、二つの恵まれたものがございませぬ、その一つは音楽でございまして、他の一つは美人なのでございませぬ。このジプシー種族には、古来、非常な美人が生まれまして、ヨーロッパ欧羅巴の貴族をして恍惚こうこつたらしめたこともございませぬ。

また、天性、音楽が巧みでございまして、あちら彼地の大音楽家も、ジプシーから教えられたものがあるそうでございませぬ……とはいへ、ジプシーは、救世主を殺した罪の種族でございませぬから、これを触れることは許されても、これに触れることは許されませぬ。たとい、ジプシーの女、花のように美しくございませぬとも、それに触れた者は、手を触れたものも、触れられた女も、共に

不祥の運命に終ると申し伝えられてあります。でございますか
ら、ジプシーの美人の美しさは、花のように美しく、また花の
ように盛りが短いとされておりますのでございます。皆様方
はこのジプシーの女のために、その一生を誤った欧羅巴の貴族
と僧侶のお話を御存じでございませうか……これよりごらんに入
れまするジプシー・ダンスは、日本で申しますると、ふいご、祭
におどる踊りでございます、花恥かしい乙女おとめが、鈴の輪を持ち
まして、足ぶり面白く踊ります。また日本の三味線、琵琶に似
たところのギターとマンドリン、それに合わせて歌いまするそ
のあでやかな人と音色ねいろ……長口上は恐れあり、早速ながら演芸
にとりかからせまする」

春日長次郎はかなりの能弁で、一通り由来を述べ終つて卓の
上なる鈴りんを振ると、後ろの幕が二つに裂けて、そこから賑やか

な音楽が湧き起りました。

幕があくと、天幕張りの漂浪生活の前に、二三のジプシー族の若者が鍛冶屋かじやをしている。盛んに鉄砧かなしきを叩いているところへ、同じ種族の一人の子供が糸の切れたギターを持って来て、向槌むしゅうづちを打っている男に直してくれと頼む。男が槌をさしおいて、それを直してやって調子を試むると、それに合わせて他の一人が歌い出す。と、子供が踊る。

そこへ禿頭はげの老爺おやしが来て、そう怠けてはいけなないと叱る。若者は仕事にかかる。子供はギターを鳴らして歌うと、叱った老爺が踊り出す。それを鍛冶屋が調子を合わせて槌を打ちながら歌う。ゾロゾロと子供が出て来てみな踊る。山の神連（ジプシーの女房たち）が出て来て、ガミガミいう。多分、この御苦勞無しの親爺おやしめが、今ごろ何を踊りさわいでいるのだと罵ののしるものら

しい。親爺は恐縮して逃げながら踊る。子供たちはギターを合
わせる。ついには山の神連まで、浮かれて踊る。すべて踊って
歌つて大はしゃぎになっているところへ、遽にわかに注進らしいの
が来る。そこで口早に人々に告げると、皆々狼狽ろうばいして逃げ隠れ
ようとする。

そこへ、花やかな騎士が、従者をつれてやつて来ると、ジプ
シー族は異様な眼をしてそれを眺める。花やかな騎士は、人の
名を呼んで誰かをたずねるらしい。ジプシー族はみな首を振つ
て知らないという。騎士と従者は失望して行つてしまふ。

ジプシー族は、それを見送つて、何かしきりに言い罵つてい
たが、若い者のうちには、腕を扼やくして、そのあとを睨にらまえ、追っ
かけようとする素振そぶりを示す者がある。老巧者がそれをさささえる。
子供は頓着なしにギターを掻き鳴らす。けれども以前のよう

浮き立たない。

そこへ賑やかな鳴り物が入って、蝶の飛び立つように入って来た一人の少女があつた。

黒い髪、ぱっちりした瞳、きんいろ黄金色の飾りをしたコルセット、肩から胸まで真白な肌があら露われ、恰好のよい腰の下に雑色のスカートがぱつと拡がると、その下から美しい脛がはぎ見える——この少女は息せききつてこの場へ駆け込んで、

「皆さん、ただいま」

多分、そういったような、晴々しい呼び声で、一同がよみがえ甦つたように、その少女を取囲んで、

「おお、マルガレット、無事か」

といったような歓声が起る。少女は、息をはずませて何か口早に物語をすると、老若男女が皆、背伸びをしてそれを聞こうとす

る。少女の物語は、何か多少の恐怖から解放されて来たもののような表情であります。その物語を聞いてしまうと、老若男女が、また歓声を揚げる。そのうちにも以前の若者らは強がりの身ぶりをして、騎士らの立去ったあとを睨まえて、腕をさすつて見せる。そのうちに子供たちがギターを鳴らしはじめると、一同が浮かれ出す。右の少女が、

「では皆さん、踊りましょう」

といったような声で、タンバリンを振り鳴らして自分が真中で、めざましい踊りをはじめると、老若男女がそれを囲んで、総踊りに踊って踊りぬくと幕。

駒井甚三郎は、その一幕を見終ると、帰ると言い出しました。

もう一場、あとの本芸をぜひ——というのを振切つて、お松を連れて、この小屋を辞して、お角に後日の面会を約して己が

宿所へと立帰りました。

四

ジブシー・ダンスが終つて、駒井甚三郎とお松は辞して帰つたあとで、大詰おおづめの奔馬ほんばの魔術という大道具の一場があつて、その日の打出しとなりましたが、これを最後まで見ていた見物のうち、二人の壮士がありました。

もう黄昏時たそがれじきです。この二人の壮士は、小屋を尻目にかけて悠々と闊歩して、例の相生町の老女の屋敷へ入り込みます。

といつても、この二人の壮士は南条と五十嵐ではないが、二人ともに疎鬢まぼらびんで直刀丸鞘を帯びているところ、たしかに薩摩人らしい。この黄昏時、老女の屋敷へ二人とも、大手を振つて乗

込んだが、玄関に立つて大声で怒鳴ると、その声を聞きつけて走り出でた二人の壮士。

それと暫く問答をかわしていたが、訪ねて来たのは上へあがらず、面かおを出した邸内の壮士二人が下り立って、都合四人づれで市中へ出ました。

付け加えてこの日は、黄昏時になると、ようやく風が強く吹き出し、四人づれが両国橋を渡りきって矢の倉方面に出た時分には、バラバラと砂塵が面に舞いかかるほどの強さとなります。

「強い風じゃ、火をつけたらよく燃えるだろう」

「でも、江戸を焼き払うほどの火にはなるまい」

「それは地の利を計らなければ……先年、大楽源太郎と、地の利ではない、火の利を見て歩いたが、彼奴きやつ、人の聞く前をも憚はばからず、今夜はここから火を放つけてやろうと、大声で噪さわがれたの

には弱つた」

「あれは、そ、そ、つかしい男だが、感心に詩吟が旨かつた」

「どうだ、ひとつ放つてみようか」

「しかし、つまらん、江戸城の本丸まで届く火でなければ、放つても放け甲斐がごわせぬ、徒らに町人泣かせの火は、放けても放け甲斐がないのみならず、有害無益の火じゃ」

「有害無益の火——世に無害有益の放火つけびというものもあるまいが」

「では、通りがかりの道草に、いたずらをしてみようか」

「地の利と、風の方向を考え、且つ、なるべくは貧民の住居に遠く、富豪の軒を並べたところをえらんで……」

「面白かろう」

さて物騒千万ないたずらごと。この四人の壮士が傍若無人ぼうじやくぶじんに試みた火つけの相談は、冗談ではなくて本当でありました。

それからまもなく、風が強くなるに乗じて、この連中の行手にあたって、日本橋の呉服町のある町家の軒から火の手があがつて大騒ぎとなりましたが、それは発見されることが早くて、まもなく揉み消したかと思うと、山下町あたりのある旗本屋敷が、またしても、それ火事よと騒ぎ立てて、これはほとんど大事となり、一軒を丸焼けにしておさまりました。

次に、やや時間を置いて芝口のある商家、これも大事に至らず消し止めましたが、それから程経て、神明の前の火の見櫓が焼け出したのは皮肉千万であります。

筋を引いて見れば、ちようどこの四人の壮士の過ぐるところ、四力所で火が起つたわけです。これはまた途方もない、いたずらで、いやしくも武夫もののふの姿をした者共の為すべからざる、いたずらであるに拘らず、このいたずらは、誰にも発見されず、その

残したい、たずらの脱け殻だけが人騒がせをして、当の本人たちは悠々として芝の三田の四国町まで来ると、そこに薩摩、大隅、日向三国主、兼ねて琉球国を領する鹿児島城主、七拾七万八百石の島津家の門内へ乗込もうとする。音に聞く島津の家の門番は、この途方もない、たずらを、どう処分するかと見れば、案外にも易々^{やすやす}と表門を素通りさせて、彼等をこの屋敷の中に吸い込んでしまいました。

しかし薩摩の士の風俗をしているからとて、必ず薩摩のさむらいだと限ったわけはありますまい。この薩州屋敷では、このごろ、ずいぶん人見知りをしないで人を入れる。

まず玄関には非常に大きな帳簿が備えてあります。その巻頭には誰の筆とも知らず、達筆に尊王攘夷^{そののうじょうい}の主意が認め^{したた}られてあつて、その主意に賛成の者は来るを拒まず、ということになつ

ている。諸国の尊王攘夷の志士は、肩を聳そびやかし、踵きびすをついで、集まり来つて、この帳簿へ記名誓約をする。紹介者あつて来るものもあれば、自身直接に来るものもある。薩州邸ではそのいずれでも拒むということをしなない。

五百人内外の人は、いつでも転がつているが、これらの食客連の日中の仕事は、武芸をやること、馬に乗ること、感心に読書学問をやっている者。為すことも氣儘きまま勝手かたて、出入りも自由。けれどもその自由放任が、ある時は、無制限になつて、ここから夜な夜な市中へ向けてきりとり強盗に出かけたものまでが黙認される。

火放ひはけ強盗はおろかなこと、この屋敷から或る時は甲州へ向けて一手の人数が繰出される。或る時は下総、或る時は野州あたりへ繰出して、そこで大仕掛いっきな一揆の陰謀が持ち上る。

その主謀者の方針は、江戸の市中はなんといつても相応に警戒が届いている。ことにこのごろ、募集した歩兵隊——一名茶袋ちやぶくろは烏合うごうの寄せ集めで、市民をいやがらせながらも、ともかくも新式の武器を持って、新式の調練を受けているから、それを相手には仕事がしにくい。近国へ手を廻して騒がせておけば、自然お膝元の歩兵隊が繰出す。その空虚に乗じて江戸の城下へ火をつけ、富豪の金穀を奪うて、大事を挙げる時の準備にしようという方針らしい。

斯か様な方針を立てている主謀者は何者か。どうかすると西郷吉之助の名前が出ることもあるが、西郷はここにいないで、益満ますみつ休之助と伊牟田いむだなにかしと小島なにかしと、このあたりが主謀者ということである。

益満は長沼流の撃剣家で、山岡鉄太郎などとも懇意であり、

この益満の後ろに西郷がいて糸を引いているという説もあるが、益満それ自身もただ糸を引かれている人形ではあるまい。

さいぜん、大手を振って門内に通過した四人の壮士、この席へ来ても無遠慮に一座の中へ、むんずと坐り込み、まず見て来たところの西洋の大魔術の披露、普通弁と薩摩弁でしかたばなしまでしての土産話みやげばなしは無難であつたが、無難でないのはそれに続く自慢話であります。

この四人の壮士どもは、今しも、大得意になつて、本所の相生町から三田の四国町までの間の彼等の道草、その途方もない、いたずら話を憚はばかる色なく並べ立てたことです。四カ所に放火して、ある所は大事に至らしめ、ある所は小事で終らしめたが、ともかくも人心を騒がして来たことを手柄顔に説明すると、それを興ありげに聞いていたものと、不足顔に聞いていた者とあつ

て、

「ナーンだ、くだらぬ人騒がせ、つまらぬいたずら、そうして下つ端したばをおどかしてみたところが何だ。トテモやるなら、あの將軍の本丸まで届くほどの火を出せ。本丸から火を出して、グラついた江戸城の礎いしずえを立て直すほどの火を出してみる。小盗賊のやるようないたずらはよせ」

と言つたものがあると、四人のなかの一人が抜からず、「いずれそれをやって見せるが、今はその手習いじゃ」

そこで、この一座の對話が、江戸城の本丸へ火を放つける、その實際の手段方法にまで進んで行つたのは怖るべきことです。この怖るべき相談が事実となつて現われたのも、それから幾らも経たない後のことでもあります。それから彼等の巢窟たるこの四国町の薩摩屋敷が焼打ちになつて、江戸を追われたことも、い

くらもたたない後のことでもあります。

五

それはそれとして、再び前に戻つて、ここにまだ疑問として残されているのが、両国の女軽業の親方お角の、このたびの、旗揚げの金主となり、黒幕となつた者の誰であるかということ、これはその道の者の専らせむらの評判となり、またお角の知つてゐる限りの人では、これを問題にせぬ者はなかつたが、誰もその根拠しかを確と突留めたものがありません。

神尾主膳や、福村一派の現在は到底、逆さかさにふるつても融通がつかうはずはなし、以前、柳橋に逗留とまりゆうしていた時代の駒井甚三郎のところへは、お角はしげしげ出入りして、あの当座、多

少の融通ゆうづうもつかい黙会はあつたかも知れないが、今の他人行儀を見れば、このたびの興行に駒井の力は加わつていなかつたことは、がんりきの百蔵といえども疑う余地はないところであります。

高利の金を借りた場合には、くろうとすじ 玄人筋は当人の手にその金が入るより先に、その噂を受取るに違いないが、さつぱりそのことがない。

だから、くろうと 玄人は興行の腕よりも、お角の金策の腕に舌を捲いている。

初日の評判を後にして、その日いっぱいの上り高のしめくくりをしたお角は、払い渡すべきものは即座に払い渡し、大入袋の割振りまできびきびとやつつけて、残つた金を両替にすると、それをうやうや 恭しく紙に包んで男衆を呼びました。

「庄さん、ちよつとそこまで一緒に御苦労しておくれ」

やはり風の吹いた同じ日の晩。

一人の男衆を連れたいお角は、両国橋の宿を立ち出でました。その行先が疑問、それを突き留めさえすれば、金策の問題もおのずから氷積するに違いありません。通俗に考えれば、これは、てつきり、柳橋の遊船宿に駒井甚三郎を訪ねて出かけたものに相違ない——お角ほどの女が、その時分に息をはずませて柳橋を渡り渡りした時は、が、ん、り、き、の百蔵をひとかたならず嫉かせたものです。

ところが、今はこの通俗な予想も、まるつきり違って、お角が訪ねて行く足どりもおちついたもので、足を踏み入れたところは通人の通う柳橋ではなく、諸国のお客様の定宿じょうやどの多い馬喰町の通りであります。

そこで、一二といわれる大城屋良助の前へ来ると、お角は丁

寧に宿の者に申し入れました、

「有野村のお大尽だいじんさま様に、両国橋から参りましたとお伝え下さいまし」

「はい、かしこ畏まりました」

ほどなく、お角は男衆の手から包みを取って、案内につれて通る。男衆は店頭みせさきに腰をかけて待っている。

お角の通された一間、そこには丸頭巾をかぶったお金持らしい老人が一人、眼鏡をかけてしきりに本を読んでいる。そこへお角が通されて、

「お大尽様、お邪魔に上りました」

「おお、お角どの、まあずっとこれへお入りなさい」

といって老人は本を伏せ、眼鏡を外はずして、座をすすめると、お角はしおらしく、

「御免下さいまし」

座へ通つて再び老人に頭を下げ、

「おかげさまで、すっかり当つてしまいました。これで、わたしの胸も、すっかり透いてしまいました。就きましては早速、心ばかりのお初穂はつほを差上げまするつもりで……」

といつて風呂敷を解きかけたその中は、確かにお金の包みであります。

いわゆるお大尽の前へ、お金の包みを積み上げますと、お大尽は、莞爾にっこりと笑い、

「いやもう、それはお固いことだ、娘もああしてお世話になっているし、そう急ぐというつもりもないのだが、せつかくだから……」

ここで初めてお角の金主元が知れた次第です。つまりお角は、

このお大尽から金を引き出している。しからばこのお大尽なるものは何者。

王朝時代からの旧家といわれた甲州有野村の長者藤原家、その当主の伊太夫。それがすなわちこのお大尽で、ただいま、お角の家に厄介になつてゐるお銀様のまことの父がこの人であります。

さればこそ、測り知られぬ山と、田と、畑と、祖先以来の金銀と、比類のない馬の数を持つてゐるこの富豪をつかまえたことが、興行界の玄人筋くろうとすじの機敏な目先にも見抜き切れなかつたことになる。

大尽は、金の包みを前に置いたままで、

「どうだね、お角さん、あれはどうしても帰るとはいいませんか」

「そればつかりはいけません、いくら申し上げましても……」

「そうだろう、どうも仕方がない。よし帰るといつてもらったところで、また難儀じゃ。いつそのこと、どこまでもお前さんに面倒を見てもらいたいと、わしは思っているのだが」

「どう致しまして、わたくしなんぞは御面倒を見ていただければ
と、お力になれるわけのものではございません」

「いや、あの通りの我儘者わがままものだから、お前さんのような、しつか、
り、した者が付いていくれると、わしも安心じゃ」

「痛み入ったお言葉でございます、そのお言葉だけを勿体なく
頂戴して、一生の宝に致したいと存じます」

「そういうわけだから、ドコかしかるべき地面家作のようなも
のがあったら、ひとつお世話をしていただきたい、あれの暮し
て行けるだけのことはしておいて帰りたいと思えますからね」

「そうしてお上げ申した方がお嬢様のお為めならば、ずいぶん御周旋を致しましょう」

「無論、その方があれのためになる、それでは万事よろしく頼みますぞ」

「かしこ畏まりました、早速、そのつもりで明日からでも、かつこう恰好なところを探しにかかりましょう。それと、お大尽様、くどいようでございますが、あなた様にもぜひひとつ、今度の興行を見ていただきとうございます」

「いいや、わしがようなやまがもの山家者、それにこう頭が古くなつては、根っから新しいものを見て楽しもうと思ひませぬ」

「それでも、せつかくでございますから」

「まあ、勘弁して下さい、これが、わしの性分なのだから」

「ほんとうに残念でございます」

肝腎かんじんの金主元が、事業の出来栄えを見てくれないのをお角は残念がると、伊太夫は、

「そういうわけだから、悪く取つて下さるな。それから、この金は、せつかくのこと故、わしが一旦は受納を致したことにして、改めてお前さんの方へお廻しをしたいのじゃ、この後の分とにも、それを、今お頼みした娘の方のかけりに廻してもらいたいのじゃ。娘へ手渡しをしても受取るまい、受取ったところでうまく処分ができ兼ねるだろうから、そこはお前さんが預かつておいて、都合よくやつてもらいたいのじゃ。なお、国許くにもとから月々なり、或いは相当の時分に為替かわせを組んでよこすか、または人を遣つかわす故、何かについて不足があらば申し越してもらいたい……証文？ 左様なものは要らぬ。わしはこれで、いったん人を信用すると、最後までしたい方の人間でね、肌合いは違う

けれども、お前さんなら大丈夫だと、まあ見込んでお頼みをしているわけなのだ。それに第一、娘というものが、この上もない生きた証文ではないか」

お角はこの時、さすが大家の主人だけあると思いました。

六

そのお角の留守中、裏両国のしもたやへ、

「今晚は、御免下さいまし」

「どなたでございます」

「親方は、おいででございますか」

「どなたでございます」

「金助でございます……」

「金助さんですか」

娘分のお梅が駆け出すと同時に、格子戸をカラカラとあけて、
「え、金助でございませうが、親方はお宅でございませうな」
「まあ、お入りなさいまし、母さんは今留守ですけれど」

「エ、お留守ですつて？」

「いいえ、留守でもかまいません、もし金助さんが見えたら、待たせておいて下さいといわれていましたから」

「左様でゲスカ、左様ならば御免を蒙こうむると致しまして」

そこへ腰をかけて、草鞋わらじを解きはじめたのは、金助というおつちよ、こちよ、いで、今、旅の戻りと見える気取ったいで、たちです。

「草鞋ばきなんですか、ずいぶんお忙がしそうですね」

「どう致しやして、忙がしいのなんの……これも誰ゆえ、みんな

な忠義のためでございます」

くだらない軽口をいつて草鞋脚絆きやはんを取っていると、お梅は早くも水を汲んで来て、

「金助さん、お洗足すすぎ」

「これはこれは、痛み入谷いりやの金盥かなだらひでございますな」

「さあ、お上りなさいまし、母さんはじきに帰つて来るといいおいて出ましたから」

「左様でゲスか……いやどうも、これでわつしも性分しやうぶんでしてね、頼まれるといやといえないのみならず、身銭みぜにを切つてまで突留めるところは突留めないと、寝覚めの悪い性分しやうぶんでゲスから、随分、骨を折りましたな。それでも骨折り甲斐も、まんざらなかつたという次第でもございませぬから、取る物も取りあえずにこうして伺つたわけなんですよ」

「御苦労さまでしたね」

「早速御注進と出かけて見れば、頼うだお方はお留守……少々業が煮えないでもございませぬが、お梅ちゃんからこうしてお茶を頂いたり、お菓子をいただいたり、御苦労さまなんていわれてみると、悪い気持もしませぬのさ」

「ほんとうに、お気の毒でしたね。でも母さんが、もう帰つて来ますから、なんならお風呂にでもおいでなすつたら、いかがです」

「そのこと、そのこと、よいところへお気がつかれました、旅の疲れは風呂に限つたものでゲス。では、ひとつ、御免を蒙つて……」

「金助さん、お召替えをなさいましな」

「お召替え？ それには及びませんよ」

「まあ、そうおつしやらずに」

「どうも恐縮でゲス。おやおや、昔むかしもようなぞぞめ模様謎染しんがたゆかたの新形浴衣とおいでなすつたね。こんなのを肌につけると、金助身に余つて身体からだが溶とけつちまいます。すべて銭湯に五常の道あり、男湯孤こならず、女湯必ず隣りにあり、男女風呂を同じうせず、夫婦別ありといつてね……」

このおつちよこちよいが齒の浮くような空口からぐちをはたいて、しきりにそわそわしているのは、この家としては近ごろ異例の待遇で、本来ここの住居すまいは、お角のためには隠れたる休養所で、懇意な人でも滅多には寄せつけないのに、このおつちよこちよいに限つて、少々もてなされ過ぎてゐる。

浴衣ゆかたを着せられて、七ツ道具を持たせられ、有頂天うちようてんで、金助は風呂へ出かけようとする、

「梅ちゃん、梅ちゃん」

この時、二階で人の声。

「はい」

お梅が返事をして二階を見上げると、金助も変な面かおをして、出かけた二の足を踏む。

「ちよつと来て下さい」

二階でお梅を呼ぶのはお銀様の声です。

「金助さん、お嬢様が、ぜひお前さんに会いたいんですとき、お湯へおいでなさる前に」

「え、お嬢様が、わつしに御用とおつしやるんですか」

二階から下りて来たお梅は、風呂へ行こうとして下駄を突っかけている金助の袖をとらえました。

そこで金助は怖々こわこわと引返して、二階を見上げ、

「よろしうございます、お嬢様だつて、なにもあつしを取つて食おうとおつしやるわけでもござんすまい」

七ツ道具を下へ置いて、浴衣へ羽織を引つかけたままで、恐る恐る二階へのぼりはじめました。

「御免下さいまし、お嬢様」

「金助さん」

「はい、金助でございます」

「どうぞ、ここへお上りください、お前さんにぜひお聞き申したいことがあります」

「御免を蒙こうむりまして」

「御遠慮なく」

金助は、全く怖る怖る二階の間へ通り、キッチンとかして跪かまつて、恐れ入つた形をしていると、いつもの通りお高祖頭巾こそずきんをすつぽり

とかぶったお銀様は、行燈あんどんの光に面おもてをそむけて、

「もう、少しこちらへお寄り下さい」

「ええ、ここで結構でございます」

勧める蒲団ふとんも敷かず金助は恐れ入っている。

「金助さん、お前は、お角さんから頼まれたことがあるでしょう」

「ええ、あるにはありますがね……」

「あれは、わたしからお角さんに頼んだことなんですから、それを隠さずに、わたしに話して下さい」

「左様でございますか。いや、薄々うすうすその儀は承つて出かけましたんですが、一応はこの親方の方へ申し上げまして、親方の口から改めてあなた様のお耳へ入れるのが順かと、こう思いましたものですから」

「いいえ、それには及びませぬ、かまいませんから隠さずに話して下さい。お前さんが帰ったら、これを差上げようと思つていました、ほんの少しばかりですけれど」

といつてお銀様は手文庫の中から、事実金助の前には少しばかりではない金包を取り出して、奉書の紙に載せて無雑作むざうさに金助の前に置いたものです。それを見ると、金助が、いたく狼狽ろうばいをして、眼の色が忙しく動き出し、

「そんなことをしていただいちや申しわけがございません、旅費のところもお角さんの手から、たつぷりといただいてあるんでございますから、その上こんなことをしていただいちや恐れ入ります。しかし、お嬢様、金助も頼まれますと、無暗に肌を脱ぎたがる男でございましたね、自慢じゃございませんが、事と次第によつては、目から鼻へ抜ける性質たちなんでございますよ。」

今度のことなんぞも、お角さんから頼まれますと、早速、当りをつけたのが、まあ、聞いていただきやしよう、とても、そりやその道で多年苦勞をした目明めあかしの親分跣足はだしですね、全く予想外のところへ目をつけて、そこから手繰たぐりを入れたところなんぞは、我ながら大出来、ここの親方にも充分買っていたたくつもりで、寄り道もせずにごうして駈け込んで来たような次第なんでございます……エエ、その頼まれました御本人ゆくえの行方、それをそのまま探していたんでは、なかなか埒らちの明かない事情がありますから、まずこういう具合めくらほうしに……エエと、この街道を琵琶を弾ひいて流して歩いたお喋しゃべりの盲法師を見かけたお方はごさいませんか、こういつて尋ねて歩いたのが、つまり成功の元なんです。将を射るには馬を射るといふ筆法が当たつたんで。つまりそれでとうとう甲州街道の上野原というところで、めざす相

手を射留めたという次第でございます……」

金助は、膝を金包に近いところまで乗り出して、得意になつてべらべらとやり出しました。

金助のべらべらやり出した潮時しおどぎを、お銀様も利用することを忘れませんでした。

「そうして、甲州の上野原のどこで、その盲法師を見つけました」

「それがその……」

金助は、いよいよ得意になつて、顔を一つ撫で廻し、

「府中の六所明神様でひっかかりを得ましたものですから、それからそれと糸をたぐつて、とうとう甲州の上野原で突留めました。上野原は報福寺、一名を月見寺と申しましてな、お宗旨しゅうしは曹洞、かなりの大きなお寺でございます……そこに、一件の

お喋りの盲法師が逗留していることを突留めましたものですか
ら、もうこつちのものだと小躍りこおどをして、早速お寺を尋ねまし
てな、例の盲法師にも会いまして、それとなく探りを入れてみ
ましたところが……」

ここまで調子に乗って来た金助が、急に遠慮をはじめたもの
ですから、お銀様が、

「知っています、その盲法師は、わたしもよく知っています。な
んといいました」

「いやどうも、よく喋る坊さんで、まず自分の身の上の安房あわの
国、清澄山からはじめて、一代記を立てつづけに喋り出された
ものですから、さすがの金助も面食めんくらいの、立てつづけに喋りま
くられてしまいました。が、結局、要領のところは得たような
得ないような……つまり、尋ねるお方は、つい二三日前に、こ

の寺をお立ちになつてしまいました」

「二三日前まで、そのお寺にいたのですか。そのお寺にいた人が、どこへ、誰に連れられて行きましたか」

「それがそれ……」

金助の言葉が、さいぜんの得意にひきかえて、かんじん肝腎のところへ来てしぶ渋るので、お銀様もかん癪にこたえたと見え、

「金助さん、お前は、その坊さんを尋ねに行ったのではないの
でしょう」

「いかさま……そこで結局その要領が申し上げにくいことになつてしまつたんで……エエと、二三日前まで、そのお寺に御逗留になつていたことは確かで、そこをお立ちになつたことも確かか
なんでしょうが、どうも、そのどこへ、誰に連れられて行
きましたか、つまりその行方が……」

いよいよよしどろもどろなのは、この男のことだから、ワザと焦らすつもりかも知れない。お銀様は気色けしきばんで、

「そこまで尋ね当てて、どうして、その先がわからないのです、役に立たない……」

「いいえ、どう致しまして」

お銀様から威嚇いかくされて、金助はワザとらしい恐縮を見せ、

「それから先を、どう鎌をかけても、坊さんは、ハッキリと言つてくれませんか、あきらめて門前の爺さんをつかまえて、口うらを引いてみましたところが、その返事で、またまたこんがらがってしまいました。と申しますのは、その前後に、お寺を出て旅立ちをしたものが二人ありますんだそうで、一人はハツコツへ、一人はコブシへ参りましたとやら。さて、その二人のうちいづれが、あなた様の尋ねるお方だか、それから先が、ど

うしても茫漠ぼうぼくとして当りがつきませんでした。とにか、これだけのことをお知らせ申しておいて、また出直しを致そうか
とこう考えて、大急ぎで飛んで参ったんでございます」

「一人はハッコツへ、一人はコブシへ？」

「はい、そのコブシというのは、つまり甲斐と武蔵と信濃の三国にまたがる甲武信こぶしヶ岳たけの方面かと存じますが、一方のハッコツが、どうしても見当がつきませんでございませう。万用絵図を調べてもハッコツというところはありませんそうで……」

お銀様も、それに耳を傾けて胸をおさえました。事実、コブシは甲武信こぶしに通ずるが、ハッコツは何の意味かわからない。さてコブシの方面へ分け入ったという人と、ハッコツへ向け出立したという者と、いずれがいずれかわからない。

ともかく、金助をしていうだけのことはいわせてしまったか

ら、お銀様は空辞退そらじたいをする金助に金包を持たせ、最後に、あらかじめ、こんなことを尋ねたということをお角にはだまつているように口どめをして、許してやりました。

金助は、下へおりるとホツと息をつき、何の意味か舌を出して、こそこそと金包を胴巻しまへ蔵い込み、そのまま逃ぐるが如く銭湯へ駆け込んで行ったそのあとへ、お角が帰つて来ました。

お角の帰つたのが遅かったのです。廻り道をしなければ、こんなこともなかったでしょうが、一足遅く戻つて見ると、金助は風呂へ飛び出したあとでしたけれど、すべての気配けはいでそれと知り、お梅から聞いて軽くうなず頷き、

「それでも、つかいようによつては相当に役に立つ」

という、いささかながら誇りの色さえも見えました。そのうち、金助は風呂から戻つて来て、齒の浮くような軽口と追従ついでしようにを並べ

ましたけれど、二階へ呼び上げられたということは、話しもしなければ語りもしません。

そこで金助は、お銀様に物語った一条を、お角にも漏れなく物語つて、ともかくも相当に成功したことを煽おたてられ、やがて大機嫌で、この家を辞して行きました。

本来ならば、それをとりあえず、お角がお銀様に報告すべき筋合いなのを、どうしたものかお角はヒドクおちついて、待ち兼ねている人を持つている態度とは見えません。ようやく二階へ伺候しこうして話を切り出したには切り出したが、金助がお銀様にあらかじめ白状してしまつた要領には触れずに、巧妙ない廻しをして味を持たせたつもりで下へおりて来ました。

これはお角としては、甚だしい手ぬかりで、すっかり裏を搔かかれていることを気がつかないで、すべてを手の内へまるめて

おく気取りでいるのが、笑止しょうしといわねばなりません。

この一件にしてからが、お角としては最初から、金助のようなおつちよこちよいを使わずに、七兵衛なり或いはがんりきの百蔵なりに頼むべきはずのところを、なにしろ、あの二人あたりは役に立つ代りに、役に立ち過ぎる憂いがある。おつちよこちよいながら、金助ならば使つてさのみ毒になるまいと、たかをくくつたのがお角の誤りでした。おつちよこちよいは到底おつちよこちよい以上のことをしでかさず、味のあるところを、前以てべらべらと喋しゃべつてしまつたのですから、お角に残されたところは骨と皮ばかりです。それを骨とも皮とも知らずに、たんまりと貯えているつもりのお角の気取り方は、近来にない失策です。

しかし、その失策は、翌日の夕方まで現わることなくお

りました。その翌日になるとお角は、前の日のように、娘分のお梅をひきつれて、向両国の興行場へ出かけ、お銀様には一人で留守居をさせておきました。

こうして昨日と同じように、甘んじて一人で留守をうけごうたお銀様は、お角母子が出て行つてしまうと、急に手紙を書きはじめ、それが終ると、そわそわとして身の廻りをこしらえにかかったのを見ると、着ていた今までの女衣裳を脱ぎ捨てて、戸棚から取り出した行李こうりの蓋ふたをあけて、着替えをして見ると、それは黒紋附の男物ずくめであります。その上に袴まで穿いて、なお戸棚の奥から取り出した細身の大小一腰、最後に寝るから起きるまでかぶり通しのお高祖頭巾こそずきんを、やはり男のかぶる山岡頭巾というものにかぶり直して、眼ばかりを現わしました。

で、立ち姿を見ると、それと知ったものでなければ立派なさ、

むらゝい、の微行姿しのびすがたです。今にはじまった着こなしとは誰にも思われ
れない。お銀様はこの仮装には慣れていらっしゃるらしい。

男の姿になりすましたお銀様は、あとを取片づけ、脇差をた
ばさんで刀を提げ、ずつ、ずつ、と下へおりて行きました。

まもなく、この家をいくらも離れないところで、辻駕籠つじかごを呼
ぶ同じ人の姿を見かけます。

七

西洋大魔術が初日の蓋をあけた日の晩、本所相生町から芝の
四国町へかけて、浪士が火をつけて歩いた晩——また親方のお
角が大城屋にお大尽を訪ねた晩。

小石川の切支丹屋敷きりしたんやしきに近い御家人崩れの福村の家では、福兄ふくにい

とお絹とが、さしむかつての痴話^{ちわ}。

脇息^{きょうそく}の上へ両臂^{りょうひじ}を置いて、腮^{あご}をささえた福村は、

「なんにしても、あの女の腕は驚嘆に値する、無から有をひねり出す芸当は、魔術以上の魔術だ、天性、興行師に出来ている女だ」

と言つて賞めそやすのを、お絹がつんと横を向いて、「恥と外聞を捨ててかかりや、何だつてできないことはありませんよ」

福村がこの場で賞めそやしたのは、無論女軽業の親方のお角のことです。すべて女の前で女を賞めるのは禁物にきまつているうちに、このお絹という女の前で、お角を賞めそやすのは、油屋の前で火事を賞めるようなものであります。それを知りながら福村が賞讃をあえてするところを見ると、ともかく、

よくよくあの女の手腕うでに感心したものがあればこそと思われる。

「ところが今度という今度は、恥も外聞も捨ててかからないんだからな。渡りはつけてみたが、トテも昨今のあの女の手には負えまいと、こう見くびっていたところが案外なもので、物の見事に背負しよいきつたのみならず、その手際のとを見せないあざやかさには、全く恐れ入ったよ。たしかに手腕うではある女だ」

「そりゃあ、蛇じゃの道は蛇へびですから、血の出るような工面くめんをして、一時の融通はつきましようさ。その日その日の上りを見込んでする山仕事と、末の見込みをつけてやる仕事とは違いますよ。線香花火みたような仕事を喜ぶのは子供みたようなものでしょう、女だてらに山いかんは大嫌い」

「してみますと、お絹様、あなた様は、末の見込みのついた仕事をやっておいでになりますのですか」

「存じません」

「お怒り遊ばしますな、なにも、拙者があの女を賞めたからとて、あなた様をケナすわけでもなし、また、あなた様に、あの女のような真似をしていただきたいというわけでもなし、性質は性質としてただ、その手腕うでのあるところだけを賞めたのだから、あえて、お咎めとがを蒙る筋こうむはあるまいと存じます」

「ああ、うるさい、それほど腕のあるのがお好きなら、観音様へおいでなさい、観音様には腕が千本ある」

「もう、腕の話はやめ……それはそうとしてお絹さん、お前も、恩怨おんえんの念は別として、ぜひ一度あの一座を見てお置きなさい、たしかに前例のない見物みもの、また後代ちよつとは見られないものですよ。相当の身分ある者が、微行しのびでいくらかも見に来ています。昨日きのうはまたあれで思いがけない人を見出した、多分そうだろう

と思つたが、見直そうとしている間に消えてなくなつたが、あの男をあんなところで見かけようとは意外千万」

「誰ですか」

「あなたも御存じでしょう、番町の駒井能登守」

「エ？」

不平満々で横を向いて絵本の空読みをしていたお絹が、この時、思わず向き直ると、福村が、

「甲府の勤番支配をしていた男、神尾主膳と喧嘩をしたとか、しないとかいう男……甲府をし、く、じ、つ、てから切腹したとか、行方不明とかいわれていた駒井の姿を、ちらとあのと看見かけたので、拙者にはグツと思ひ当つたことがあるのだ。ははあ、女軽業の親方お角のうしろにはあの男があるのだな、して見ると、あの時分、お角が柳橋あたりで、専ら由緒ゆいしよありげな人物とあ、い、

び、ぎをしていたという噂が、ぴつたりと当てはまる。虫も殺さぬような面かおをして、あれで駒井もなかなかの食わせ者だが、これを擒とりこにしたお角の腕も確かに凄すごい。いやまた腕の話になつて恐縮」

福村は腕を枕にゴロリと横になる。お絹は相変らず絵本の空読みをしている。ところへ女中が手をついて、

「お客様でございます」

「誰か」

福村が肥つた身体を大儀そうに起すと、

「百蔵さんとおっしゃいます」

「ナニ、が、ん、り、き、が、来、た、か」

福村も起き上つておちつかない心持、お絹も思わず本をさしおく。

「そうら、腕のある話がハズミ過ぎたものだから、腕のない奴がやつて来た——まあ仕方がない、来たものを帰れともいえまい、帰れといつても帰る奴ではない、かまわぬ、ここへ通せ」
女中が出て行つたあとで、福村とお絹とが面を見合わせる。

「奴、何の用で来た、今時分」

「何の用ですか」

二人はうす気味の悪い心持でいると、そこへ案内されたのは、

「へえ、これはお二方ふたかた、永らく御無沙汰を致してしまいました」

「ナーンだ、金公か」

五分月代ごぶさかやきに唐棧とうざんの襟附の絆纏はんでんを引っかけて、ちよつと音羽屋

の鼠小僧といったような気取り方で、多少の凄味を利かせて、が、んりきの百蔵が現われることを期待していると、意外にも、それはおつちよ、こちよ、いの金公でしたから、二人も拍子抜けがし

ているのを、委細かまわず金助は、

「ちよつと旅に出ていましたものですから、つい、何しまして……
御無沙汰を仕りましたつかまつ」

「どこへ出かけていた」

「お馴染なじみの甲州街道筋をぶらついて参りました」

「面白いみやげ話があらば聞かしてくれ」

「なんせ、山ん中のことでございますから、面白いみやげ話と
てありよう道理はございませんが」

と冒頭まくらを置いて、金助はべらべらと締りもなく、お角に頼まれ
て出かけたことから自分の手柄話、結局、このたびの大魔術の
ことになって、お角という女の親分肌を、口を極めて讚美にか
かりましたから、お絹がいよいよ不機嫌になってしまいました。
来る奴も、来る奴も、ロクなことはいわない。この女の前で、

ほかの女、ことにお角を讚めるのは、この女をコキ下ろす結果になるということ、御当人ほどに誰も気がつかない。お角の腕を認めるのは、つまりこの女の働きのないことを当てこす、意味になるのを、誰も御当人ほどに受取らない。

そうでなくても、このごろは、食い足りないことばかりで、焦れつたがっている。当座の安心のために、福兄に身を寄せてはいるが、福兄に、わが物気取りでヤニさがられているのが嫌だ。そうかといって、謀叛むほんを起そうにも、今はちよつと動きが取れないことになっている。当座の腐れ縁とはいえ、一人の男を守っている現在の意気地なきに、自分ながら愛想あいそがつきる。それも大した男ならトニカク、福兄あたりでは自慢にもならない。ところへ、向う河岸むこがしでは盛んな景気で、思う存分の腕うでを揮ふるっている上に、聞き捨てにならないのは、お角が駒井能登守ほどの

男を自由にしているとのこと。それやこれやを見せつけられているお絹の立場はたまらない。

それを、それほどにお察しがなく、べらべらと大魔術の能書のうがきを並べたり、承つたりしている金助と福村の面が癩かおにさわり、
「何だい、乞胸ごうむねの親方なんか、そんなに持ち上げる奴があるものかい。金公、ちつと気を利かして口をきいておくれ、席が汚れるよ」

とってお絹は、いい気になつて喋しゃべっている金助の肩をこづいたものですから、ハズミを食つて金助が、ひとたまりもなくひっくり返つてしまいました。

「これは、これは」

金助はひとかたならず恐縮してしまい、ははあ、うっかり口すべを込らし過ぎたなと思つて起き上ると、口を抑える真似まねをしま

した。

それを尻目に、お絹はさつきと寝間へ入ってしまいます。

八

小仏から陣馬を通つて、上野原へ急ぐ一挺の駕籠。

この道は、過ぐる夜、蛇滝じやたきの参籠堂を出た机竜之助の駕籠が、そこで、小雨と、月の霽間はれまと、怪霧と、天狗と、それから最後に弁信法師の手引によつて救われた甲州街道のうちの一つの隠し道であります。

あの時は月夜、今日は、たそがれ時で、足もとの明るいうちには必ずや上野原の駅へ足を踏み入れようという時分、左手の山谿さんけいの間には、遠く相模川の川面がおりおり鏡のように光つて

見える時、山巒さんらんを分けて行く駕籠は、以前のように桐油とうゆを張つた山駕籠ではなく、普通に見る四ツ手駕籠。

「そういうわけで、あのお若さんも殺されちまつたそうですが、殺したのは多分、もとの御亭主だろうという話で……」

といったのは前棒さきぼうの駕籠屋。偶然にも、その駕籠を舁かついで行く権三ごんざと助十すけじゅうは、あるとき机竜之助を乗せた二人であるらしい。

ただ、乗っている駕籠の客が滅多には口を利かない。

さて、駕籠屋たちはあの時以来、幾度もこの道を往来したと見えて、あの時の天狗物語も口の端はには上らず、丹沢山塊の方面で怪しい火の見えたことも、濃霧に襲われたことも、時効にかかっているらしい。

陣馬の鼻まで来た時分に、佐野川方面から下りて来る笠を認めたと前棒が、

「あ、向うから人がやつて来るぜ。おやおや、唯の人じゃねえ、お供をつれたおさむらいだ。ことによると八州のお役人様かも知れねえ」

そこで、前後の駕籠屋が二の足を踏みました。駕籠屋自身には暗いことはないが、お客のために心配があると見えて、

「旦那様、向うから、人が来るようですが、その人も唯の人ならよろしうございますけれど、このごろ、八州のお役人様が、この辺へお入りになつてゐるそうですから、もしお役人だとすると、空からならば言いわけが立ちますが、中身があつてはお客様のために面倒と存じますから、どうか、ちよつとの間お下りなすつてくださいまし、そうして暫くお隠れなすつていてくださいまし。」

ナニ、通り過ぎてしまえば何のことはねえのですから……」
駕籠屋は駕籠おろを卸して、中なる人にかく申し入れました。

本来、ここは変則の道であることは前にもいった通り、小名路こなじの宿から本式に駒木野の関所を通つて、小仏峠から小原、与瀬へとかかつて上野原へ行くのが順なのを、五十町峠からこの道を取るのには、厳密に言えば関所破りにはなるが、習慣の許すところにおいては、変則の道があつて、濫用らんようされない限りは見ぬふりのお目こぼしがあると聞く。しかし、役向の者が、役向を以てめぐる時分には、その正面を避けない限りは、事が面倒になるのは当然あたりまえであります。

多分これを心配して、駕籠屋は駕籠の中へ申し入れたものと見える。最初からほとんど無言で通して来た駕籠の中の客も、これには返答を与えないわけにはゆかないので、

「承知致した」

そこで駕籠屋は急いで垂たれをハネ上げると、駕籠の中から一刀

を提げて出て来たのは、羽織袴の身分あるらしい覆面のさむらいでありました。

「どうか、こちらの方へひとつお隠れなすつていていただきませう」

駕籠屋が案内した木立の中。駕籠屋どもはなにくわぬ面かおをして、ワザと悠々と空駕籠を荷になつて通り過ごすこと半町ほどのところで、期待した通りに、バツタリとであつたのは予想の通り、供を一人つれた八州見廻りの役人であります。

「駕籠屋」

「はいはい」

「その駕籠は空であろうな」

「はい、仰せの通り空でございます、摺するさし差まで参りましての戻りでございます」

と言つて駕籠屋どもは申しわけをする。それで許されるであらうことを予期して、唯々いとしてやり過ごそうとすると、

「それは幸いのことじゃ、摺差するさしまでやってくれ」

「エ？」

駕籠屋二人が呆気あつけに取られました。

「摺差までやれ」

「はい」

八州の役人は、その駕籠へ近寄つて、手ずから垂たれを揚げたものですから、駕籠屋どもは、もう二の句がつけません。お断わりを申すにも申すべき術すべもなければ、理由を見出す余裕などがあるはずはありません。相手が泣く兎もだまるはずの八州のお役人ときているのですから——

ぜひなく、この当座の空駕籠は臨時のお客を入れて、再び小仏

から摺差へ戻らねばならない羽目はめになりました。しかし、これは常ならばむしろ勿怪もつけの幸いで、一人でも客にありついた商売冥利しょうばいみょうりを喜ぶはずになっているのが、今の場合はそうではありません。「摺差まで三里はございますけれど、この三里は下りでございますから、楽でございますよ」

以前に客を残して置いたところで、駕籠屋はワザと大声でいきました。

そこでこの駕籠は、結局以前のお客を置きりにして、新しい権威ある客を乗せて、三里余りの山道に戻ってしまうのです。駕籠が山の蔭にかくれた時分に、木立から立ち出でた最初の客、恨めしげにそのあとを見送っていました。やがて思い返して、前路に向って力足を踏むの覚悟。

人里に遠い夕暮の山道に取残されたとはいえ、足に覚えのあ

る者ならば、上野原までの道は、さまでは苦にならないはず。

ところが、思いきつて踏み出したこの覆面のさむらいは、思いのほかに足弱でありました。三町五町歩むうちに、その疲れ方が目立ってきて、腰の物が重過ぎる。この分で三里の山道は甚だおぼつかない。ましてその間には迷い易い幾筋もの岐路えだみちがある。

果して、暗の落つると共に、路を失ったこの旅のさむらいは、左に行くべきを右にいつて、甲斐と武蔵の国境を、北へと辿たどつているのであります。こうなると、もいつそう暗くなるのを待つて、どこかに火影ほかげを認めて進む方が賢いかも知れない。程経て、陣馬と和田との間の高いところへ立ったさむらいは、そこで今まで脱ぐことをしなかつた覆面を解いて、夜の高原の空気おもてに面を曝さらすと、西の空に二日月ふっかつぎがかかっているのを見るばかりで、

前後も、左右も、みな山であります。

ホツと息をついて汗ばんだ面を拭うと、べつとりと濡れた髪の毛——その髪の毛は、女にも見ま欲しいたつぷりしたのを、グルグルと櫛巻くしまきにして、後ろへ束ねていました。

西の空にかがやく二日月。暫く放心してその月影をながめているうちに、何に打たれてか身ぶるいしました。その時の、この人の形相ぎようそうは、絵に見る般若はんにゃの面影おもかげにそのままであります。この人は月をながめているのではない、月を恨んでいるのです。

この高処に立って、下りて行くべき何かの暗示を求めて得ざるが故に、二日の月に空しく恨みを寄せている。

「わたしは知らない」

その恨みは女の声。その女はまさしくお銀様であります。

黒衣覆面の男おんそおの装よそおいして、両国のお角の宅を出し抜き、こう

してここまで辿たどつて来たお銀様。ここでまたも方角を失たいました。

ほどなく西北と覺おぼしき方面の谷間たにあいにあたつて一団の火光。

お銀様はその火を見て喜びました。

しかしながら、この一団の火光は、お銀様を喜ばす目的地方面の火ではなく、怖るべき山窩さんかの一団の野営ではないか。お銀様は、そんなことを一向に知りません。

お銀様が進んで行く行く手の谷間から、カラカラと神楽太鼓かぐらだいこの音が起りました。

それを聞いたお銀様は、いよいよ里の近くなつたことを知つてよろこぶ。

あのは、やしねの音は、鎮守ちんじゆの夜宮か、或いは若い衆連の稽古。その音をたよりに里へ出ようとして、かえつて里へ遠くなるこ

とを気づかないのはぜひひもありません。

この神楽太鼓の音こそ、人を迷わすものであります。その音の響き来る^{きた}ことを聞いて、この音の起るところを知らない囃子^{はやし}がそれです。土地の人はそれを恐れていたけれど、お銀様は、そのいわれを知らない。

当時、この附近の村里に住む人は、この太鼓の音を聞くと怖毛^{おぞけ}をふるつたものです。

「諸国^{しよこくりじんだん}里人談^{いわ}」に曰く、

「武州相州^{さかひ}の界、信濃坂に夜毎にはやし物の音あり。笛鼓^{ふえつづみ}など

四五人声にして、中に老人の声一人ありける。近在または江戸などより、これを聞きに行く人多し。方十町に響きて、はじめはその所知れざりしが、次第に近く聞きつけ、その村の産土神^{うぶすな}の森の中なり。折として篝^{かがり}を焚くことあり。翌日^{あけのひ}見れ

ば青松、柴の枝、燃えさして境内にあり。或はまた青竹の大きなる長さ一尺あまり節をこめて切つたるが森の中にすてありける。これは彼の鼓かにてあるべしと里人のいひあへり。ただ囃はやしの音のみにして何の禍ひもなし。月を経てやまず。夏のころより秋冬かけてこの事あり、次第次第に間遠まどほになり、三日五日の間、それより七日十日の間をへだたり、はじめの程は聞く人も多くありて何の心もなかりけるが、後々は自然とおそろしくなりて、翌年あくるとし、春のころ囃のある夜は里人も門戸を閉ぢて戸出とでをせず、物音高くせざりしなり。春の末がた、いつとなくやみけり」

この怪しむべき囃子の音が、信濃坂を去つて、ようやく西にのぼり、ここ武蔵と、相模と、甲斐の国とが、三つ巴どもえに入り込んだ山里のあたりを驚かせているものと見えます。

このごろ、遠音とのおねにその音を聞くと、土地の者は、おそれをなして早く戸を締める。ことに上野原の町ではちようど、火の見柱の下で盗賊が狼に食われた前後のことでしたから、その遠音の囃子はやしを一層おそれたものです。

しかしながら、偶然、足を踏み入れたお銀様にとつては、この囃子の音が、いよいよ人里に近いものにして、足の疲れを忘れさせるだけの力がありました。それも行くことやや暫くにして、その囃子の音、ようやく遠くなるような気がしたものですから、またしてもお銀様は小高いところをえらんで、最初に認めた火の光を追おうとしました。

この山中にあつて、今しも、この怪しむべき囃子の音を聞きつけたものは、お銀様だけではありません。三頭山みつとうざんの連脈を縦走して、熊倉山腹の炭焼小屋附近に露營をしていた二人の者が、

同じくこの囃子の遠音に耳をそばだてました。その一人は猟師の勘八と、もう一人は宇津木兵馬であります。

思いもかけぬ時とところで、囃子の音を聞いたものですから、宇津木兵馬は覚ええず目をあげて、音のする方をながめると、猟師の勘八が心得こころえが顔に、

「そらはじまった、お化け囃子がはじまった。久しく止んでいたと思つたら、また、はじめやがった」

「あれは何です」

「お化け囃子といつて、ああして響きは聞えても、起るところがわかりましねえ。よつぽど不思議な囃子でございます」

「しかし、さほど遠いところでもないようだが」

「左様ですが、どこで聞いても同じように聞えるんで。三里遠くで聞いても、五里遠くで聞いても、あのくらいに聞えるんでが

すよ。お化けか、そうでなければ天狗様のいたずらでがんしよ
う」

「お前は、それを調べてみましたか」

「いいえ、そういうことはしてみましねえ」

「さまで遠くはないようだ」

九

けれども、響きがあつて物のないという道理はありますまい。
これをお化け囃子と名づけ、天狗のいたずらと怖れてしまうの
は、それを究める人きわに、究めるだけの勇氣と根氣とがないせい
でありましょう。

現に、陣馬、和田、熊倉、生藤しやうとうの間に囲まれた谷の中に、箒かがり

を焚いて、カンラカンラと鼓を打ち、ヒューヒューヒヤラヒヤラと笛を吹いている一団があるのであります。

ここに箒を囲むほどの連中が、みな仮面をかぶっている。鼓を打ち、笛を吹き、鉦を鳴らすものも、みな仮面をかぶっている。その仮面は、ありふれた里神楽の仮面もあれば、極めて古雅なる伎楽の面に類したのもあるが、打見たところ、箒の周囲に集まるほどのものが、一人として素顔を現わしたのはありません。

そうして、かれらの或る者は太鼓を叩き、或る者は笛を吹き、或る者は鉦を打って、残りの者がことごとく踊っている。一見すれば極めて古怪なる妖魅の集い——

彼等は、拍子に合わせて、さんざんに踊ると、赤頭に猩々の面をかぶったのが、

「いかにおのおの方、大儀に覚え候ぞ、一休み致して、また踊ろうずるにて候ぞ」

うたい 謡がかりの口調でいうと、

かしこ 「畏まりて候なり」

一同が踊りをやめて休息に入る。無論、囃子の音も、その時はヒタとやみました。

囃子も、踊りも、ひときわ休息に入ったけれども、この連中のすべてが仮面めんを取ることをしませんから、誰がどうだと正体のほどはわかりません。

かがり 幾つかの箒で、そこらは白昼のよう。前には小流れがあつて、
うしろ 背後に山を負うて帆木綿ほもめんの幕屋。

この谷間の、この部分だけは白昼のように明るいけれども、
こくあんあん 周囲は黒闇々に近い山々。僅かに二日の月が都留つるの山の端はに姿

を見せているばかりです。

この時、猩々は再び立ち上つて仮面めんの下より、

「いぎ、このたびは天あまの返矢かえりやを舞おうずるにて候ぞ」

「心得て候」

またも、一同が入りみだれて、舞の庭に立ち上る。狩衣かりぎぬ、差貫さしぬぎ

よものもの、白丁はくちようにくくり袴ばかま、或いは半素袍角頭はんすおうかくずきん中、折烏帽子おりえぼし

に中啓ちゆうけい、さながら能と神楽かぐらの衣裳屋が引越しをはじめたように

ゆるぎ出すと、笛と大拍子大太鼓がカンラカンラ、ヒユウヒユ

ウヒヤラヒヤラ。

「そもそも、天の返矢といっぱ……」

そこで踊りの面々が、おのがじし踊り出すと、恵比須えびすの面めんを

かぶったのが、いちいちその間を泳いであるいて、この踊りを

訂正する。手のさし方、足の踏み方を、模範を示して直してあ

るく。すべてが一心を打込んで踊っているうち、ひとり、例の
狸々だけは踊らない。自然木じねんぼくの切株に腰うちかけ、中啓を以て
踊りの庭を監督している体ていです。この時、不意に谷の一方に、
けたたましいさけびが起つて、一団の人が罵ののりながらこの場へ
入つて来て、

「太夫に申し上げまする」

「何事にて候ぞ」

「ただいま、怪しい奴が、これへ忍んで参りたるによつて、こ
の通り取押えて引立てましてござる」

「なんと、怪しい奴が？」

どちらが怪しいのだからわからない。この奇怪極まる山中の、
仮面めんの集まりを襲うてくるもののある以上は、やはりそれ以上
怪しいものも存在するかに見ゆる。

「こやつでござりまする、われわれの楽しみをさまたげんとて来りし奴、目に物見せてくりようと存じまする」

猩々の面前に引据えたのは、覆面にして双刀を帯する身、まさしく武士の姿。

「覆面を剥いで見い」

「畏まりました」

箒かがりの前へ押向けて覆面を剥かごうとする。そうはさせまいとする。やがて意外のさけび、

「やあ——女だ」

床几しょうぎに腰をかけた猩々しょうじょうの仮面めんは、

「おお、御身ごみは女性にょしょうにて在おするな。何とて斯か様ようなる山中へ、女性の身一人にておわせしぞ。まして男の装かいしたる有様こそ怪しけれ」

ことさらにいうとも思えないほどの自然な調子、朗々たる音吐おんとで、雅文体の問答をしかけられましたので、捕えられた男装の婦人は、

「はい、小仏より上野原へまいる途中、駕籠かごを見失い、道に踏み迷うてこれへまいりました」

おもて面を伏せて柔順すなおに答えました。

「して、何用あつて上野原へまいらるる。御身はいずれの御出生ぞ、うけたまわりたし」

「たずねる人があつて、江戸を立ち出でてまいりました」

「男の装い召されしは何故ぞ」

「道中が心配になりますから……」

「さりながら、女性にょしやうの男装して関所を越ゆるは、国のおきての許さぬことを、知らぬ御身にてはよもあらじ」

「それは存じておりますけれど」

問われて窮する女の姿を、仮面の中より見下ろしていた猩々は、

「いかさまこれは、ことさらにわれらが楽しみをさまたげんとて来りしものとも思われねど、まずは詮議せんぎの次第もあり。いかにおのおの、この女性を幕屋のうしろ、栗の大木の下へつなぎ置き、暫しの窮命をせさせたまえ。ただし、手荒に振舞いたもうなよ」

「畏まりて候」

こういつて鬼の面をかぶった数名のものが男装の女——いうまでもないお銀様を引立てて、幕屋の背後うしろへ連れて行きました。そうして、猩々から命ぜられた通りに、栗の大木へ結ゆわいつけましたけれども、特に手荒に振舞うべからずとの言葉添えあずかが与つ

て力ありと見え、ただ、逃げられない程度に縛つたのみで、敷物まで持つて来て坐らせました。

お銀様は、どのみち、怖ろしい目に遭うべき暫時の後を期待して、覚悟をきめてしまいました。それにしても、いよいよ合点がてんのゆかないのはこの一団の集まりであります。こうして、舞いつ歌いつ、よろこび楽しむ分には、さのみ世をはばかり必要はあるまいに、この山中へかくれて、そうして張抜きの大筒おおづつをこしらえるわけではなし、謀叛むほんの相談をしているとも思われない。いかに世上おだやかならずといえども、神楽をするに、隠れ忍ぶ必要もあるまいではないか。ことに打見たところでは、それぞれ仮面をかぶり、立派な衣裳道具を備えている。なお一団のものゝの会話が、中古の雅文体をそのままで、どうかすると近代なまの訛りが入る。大将分らしい猩々の音声は、清く澄みわたつて、

水の滴したたるような若さがある。とはいえ、一団の人、いずれも仮面めんをかけているから、品格のほども、年配のほども、一切わからない。狐狸妖怪の世界か、それとも人間か。

お銀様が思い乱れている時に、不意に轟然ごうぜんとして、山谷をうごかす一発の銃声がありました。

この鉄砲の音はいずれから起ったかわからないが、その一発の音が起ると、さしも昼あさむを欺くほどに焚かれていた篝火が、ほとんど一度に掻消され、同時に歌舞音曲の賑いはパツタリとやみ、人が闇中を右往左往にうごめき出す。ただその右往左往にうごめく人が、枚ばいをふくんだ夜討のように、一言も声を立てないで、踊りの庭と幕屋の内外を走り廻り、物を掻集め、ひきほどきひきむすんでいる体ていは、まさしく隊を組んでこの場を走ろうとする形勢であります。

お銀様だけは、どうすることもできません。幸か不幸か忘れられていました。眼前の幕屋でさえも、手早く引きほごされて、荷ごしらえをされる有様なのに、忘れられたお銀様は、ただ怖ろしい夢の中で、走れない人のように気を焦立いらだつけけれども、この場合、助けを呼ぶのが利益か不利益かはわかりません。すべてが沈黙して暗中にどよめいている時。

つづいて山谷にこたゆる第二発目の鉄砲。

その谷間より程遠からぬ柿の木平というところに立っていた
獵師の勘八と宇津木兵馬。

勘八が鉄砲の狙いねらをつけると、兵馬は逸はやりきつた犬の紐をひかえながら、

「まあ、待つて見給え、もう少し近寄つてみようではないか」
勘八の切つて放とうとしたのは第三発目の鉄砲です。

その第一発を、やはり同じところから発射した時に、賑やかな拍子の音が、パツとたえ、それと同時に、さしも昼間のよう
に明るかったその一団の火がフツと消え、闇の中に、なんと
く谷間が動揺しているようですから、程を見すまして第二発を
切つて放したが、これは手答えがありません。やがて闇中の動
揺も静かになつて、一様に空々寂々たる山谷さんこくの夜となりました
から、二人はまさしく物につままれたような気分で、なお暫く
形勢をみていましたが、用心のため、更にもう一発を切つて放
ち、そうして、その明りと音のあつた方向へ進んでみようとい
うつもりで、勘八が第三発目の狙いをつけたのを兵馬ひんまが遮つて、
ともかくもこれから探り寄つて見ようという。

そこで二人は、わざと火繩をかくし、松明たいまつもつけず、闇にま
ぎれて、最初の怪しい音と明りの場所をめざして進んで行きま

した。

勘八の頭では、これは、てつきり物ものの怪けの仕業しわざだと思つてい
る。最初から、さわらぬ神たに祟たりなしの方針を取つて、聞き流
していたかつたのを、強しいて兵馬にすすめられたものですから
出て来ました。出て来て見ると、音のするところに明りがある。
そこでその明りをめがけて一発打ち込んでみたのは、単にさぐ
りを入れたつもりで、その根元をきわめようとまで思つていな
かつたものです。

こうなつてみると、例のものすごい二日月が山の端はにかかっ
ているだけで、真暗まっくらのところを、裾をめぐつて行くものでは
ら、めざす方向がドチラだかわからなくなりました。

「げえもねえからよそうじゃございませんか、ばかされてもつ
まらねえ」

勘八は、なお気が進まないのに、好奇ものずきに駆かられているのは兵馬ばかりではありません、兵馬の手にひかえられている獵犬がしきりに逸はやつて、先に立つものですから、気が進まないながら勘八も、後ろへひくわけにもゆきません。

犬が案内してくれました。やがてめあての谷へ近づいた場合にも、犬がいよいよ勇みますから、危険がないと知り、そこで勘八は、火繩の火を附木にうつして用意の松明たいまつをともし、一行は小流れ伝いの谷間へ入り込んで来ました。

兵馬の心では、人の噂うわさに聞くことに多くの不思議がある、今は目まのあたりその不思議にぶつかったのだから、この機会を逸してはならない、あくまで根元を究めてみようとして勘八を引きずり、犬に引張られて、ほどなく例の谷間までやって来ました。

松明の光に、まず照らされたその谷間の光景はすこぶる狼藉ろうぜき

たるもので、かがり 篝の燃えさしだの、木や竹の片きれだの、地面に石や穴が散在していることだの、つい今までなにもものかが集まっていた形跡は蔽おほうことができません。もし、ここに相当の陣地を構成していたものならば、いちはや 逸早く退却してしまつたものに相違なく、その退却ぶりを見ると、その形跡こそ狼藉たるものだが、武器や生活の要具は一つも落ちのこされていないことによつて、かなり鮮あざやかな退却ぶりだといわなければなりません。

兵馬は勘八の手から松明を借受けて、狼藉たる陣地の跡を隈なく照らし見ようとした刹那、猟犬の縄をゆるめたものですか、犬はまつしぐらに一方へ向いて飛んで行きました。二人がおどろいてその方向を見ると、栗の大樹があつて、その根もとに人らしいものがうずくまっています。

勘八は鉄砲を取り直しましたが、兵馬はし、かと見定め、

「人がつながれている」

これも危険なしと見て近寄ると、繋がれている人の姿は男でありますけれど、正しくは女でした。

ほどなく宇津木兵馬が先に立ち、獵師の勘八がお銀様を背負つて、もと来た炭焼小屋まで立戻つて参りました。

そこで、兵馬はお銀様に向い、お銀様の捕われた一団というのが、一定の住所というものを持たずに、全国の山から山を旅して渡り歩く山窩さんかというものであろうことを教え、なお山窩さんかというもののいわれを一通り説いた上で、とにかくもその手から逃れたことを、お銀様のために祝いました。けれども、なお充分がてんに合点のゆかぬことは、その一団が立派な衣裳道具を持ち、上品な言葉づかいをしていたということ、一般の山窩さんかは、もつと野蛮で、もつと兇悪な分子を持っているはず、その一点だけ

がどうも解げせないという、獵師の勘八も傍から口を出し、山窩の奴等に、舞いを舞ったり、笛を吹いたりするような風流気はあるものでなく、せいぜい彼等は箕みな直なおし、風車売りぐらいのところ、その性質疑い深く、残忍性に富んでいることを物語り、右の一団は、どうも山窩ではあるまいといいました。

それは疑問のうちに残されながらも、ともかく、そこを脱出したお銀様の行先について、

「あなたは上野原の月見寺へおいでなさるそうですが、誰をたずねてあの寺へおいでなのですか。わたしもあの寺にいたのです」

「あのお寺に、琵琶を弾く盲めくら目の法師がいると聞きましたから、それをたずねてまいる途中でございます」

「ははあ、弁信殿を尋ねておいでなのですか。あの人ならば、ま

だ寺にいでるでしよう。珍しく勘のいい人ですね」

お銀様は、この少年の親切にして、義気のあるのに感心しました。見たところ、さむらいの風をしているのに、どうしてこんな山の中に、獵師と一緒に生活をしているのだろう。月見寺のことも、弁信のことも、よく知っているのが不思議だ。まだ尋ねてみたいことも多いが、万事は明日。そこで、広くもあらぬこの炭焼小屋に枕を並べて、一夜を明かすことになりました。勘八は早くも高たかい躰びき、兵馬もやがて眠りにつき、お銀様もうとうととして夢路に入りましたが、肉体は疲労によつてあくまで休息を求めらるのに、神経は夜来の刺戟によつて、盛んに躍動をつげようとする。こういう時には、誰しも見まいとして見るのが怖ろしい夢です。

お銀様は怖ろしい夢にうなされました。その夢とても、過去

の現実を離れた夢ではなく、過去の最も怖ろしかった記憶が、ほとんどそのままに再現されたままです。

その怖ろしかった記憶は、躑躅ヶ崎つじさきの古屋敷で、酒乱の神尾主膳きょうはくに脅迫された時、伯耆ほうぎの安綱やすつなの名刀を抜いて迫り来る神尾主膳、それを逃れて走り下りた二階の階段、そこには善悪邪正いずれとも判別しかねる人がいた。

理も非もなくその人に縋すがりついて助けを求めた時、その鉄壁のような冷たさと、吸盤のような引力に吸い込まれて、その夜、ついに怪しい二つの蝶の夢を見て、夜が明けた時は、肌がすっかりと汗ばんで、髪がべつとりと濡れていました。

その時以来、そのつめたい人がこの胸を火のように燃やす。ひとたび愛人幸内を失ったお銀様には、たまらない肉のもだえがある。わが雇人であった幸内を、身も心も自由にしていたよ

うに、お銀様は、その人に、わが心も、わが身も自由にし、自由にならせていた。その持つていたつめたい残忍性が、お銀様を翻弄する時に、お銀様もまた、残忍そのものを翻弄する痛快心に駆られて、この女だけが人を斬ることを知って、少しもおそれなかつたのです。最初の縁は躑躅ヶ崎の古屋敷。

「ああ、あの蝶の羽風はかせが……」

悪夢の中に、どろどろにもだえたお銀様は、力かぎりその人にしがみつく、夢が破れて、おどろいたのは自分の胸に重い物。いつか知らず傍らの宇津木兵馬をかたくだきしめていました。

宇津木はそれを知らず、知ったお銀様は、どうしてもこの腕を離しとれない心になりました。

信州諏訪すわの温泉、孫次郎の宿についた晩、お雪は久助と外のお湯へ行き、竜之助は、ひとり剃刀かみそりで面おもてを撫でておりますと、

「御免下さいまし、お土産みやげをお召し下さいまし」

スルスルと入って来たのは女の声です。竜之助は返事をしないで、なお燈火あかりの下で面を撫でておりますと、入って来た土産物売りは黙認を得たとでも思ったのか、

「いろいろございます、これが諏訪の明神様の絵図、こちらがおなじ明神様の神木でこしらえましたお箸、それから、湖水で取れました小蝦こえびと鮒ふな……」

ここまで並べ来った時に、物売りの女が、あつとおどろいたのは、行燈あんどんのあかりが消えてしまったからです。

「おや、お明りが消えました、おつけ致しましょう」

お土産物の陳列をよそにして、行燈のそばに寄った土産売りの女は、その抽斗ひきだしから火打道具を手さぐりで探して、やつと火をきつて、附木にうつし、行燈の燈心を搔かき立てた時に、再び驚いたのは、この部屋の主は、相変らず面を剃刀で撫でていたからです。つまり、燈火の消えたのを平気で、その暗い中で相変らず面を剃っていたのであります。

「どうぞ、何か一品お召し下さいませ」

改めて、土産物売りの女は自分の座へ戻りました。

「土産を買ってやるから、この首を剃ってくれないか」

「ええ、よろしうございます」

そこで机竜之助は剃刀の柄えを向うにして、物売女の方へ突き出すと、物売女は気軽に受取って、

「お面かおの方はお済みになりましたか」

「ああ、面は済んだから、この襟足のところだけを願いたい」

「はい、お明りをこちらへ向けましょう」

女は剃刀を取って、竜之助の後ろへまわりました。

「御逗留ごとうりゆうでございますか……」

「一夜泊りだ」

「左様でございますか」

女は慣れた手つきで、竜之助の首筋に剃刀を当てて後ろに撫で卸すと、

「景気はどうです」

と竜之助がたずねますと、

「おかげさまで、この下の諏訪しもすわは、あんまり不景気ということ
がございませぬ。丁度、甲州筋からおいでの方も、中仙道を和

田峠からおいでの方も、塩尻を越えて木曾の旅をなさるお方も、伊那の方からおいでの方も、みんなここへお立寄りになりますのに、諏訪のお社やしろというものがございます上に、この通り温泉が湧いて出ますものですから……」

「諏訪の湖というのはどちらに当ります」

「え、湖でございますか。湖は、もうこのすぐ下がそれでございますよ、障子をあけてごらんになると、一面に……」

女は、今までそれを気がつかなかったお客は、多分、暗くなつてから着いたお客だろうと思ひ、

「今夜は、お月夜かも知れませんが、障子をあげましょうか」

氣を利きかして、女は剃刀の手を休め、客をして月明の諏訪の湖うみをながめ飽かしめんとした好意を、竜之助は断わつて、

「風が冷たいからそれには及ぶまい。そうだな、月というもの

を見たのは、いつのことか。伊勢の阿漕あこぎヶ浦うらというところで見
たのが、あれが最後だろう。いや、あれは見たのではない、聞いた
ただ。ゆうなき夕凧あさなきと朝凧に名を得た静かな伊勢の海、遠く潮鳴りの
音がして、その間を千鳥が鳴いて通った時、浜辺と海がぼ、う、つ
と明るくなつたように覚えている。多分、あの時に月がのぼつ
たのだろう。あれ以来見たことはもちろん、聞いたこともない」
竜之助が、謎のような独語。ひとりごと急に剃刀の手を止めた女の面が
美しいものになりました。

この女は、もうよい年ですけれども、お化粧をして、赤い縮緬ちりめん
の前掛をしていましたが、

「まあ、伊勢からおいでになりましたのですか」

急に、晴々はればれした美しい面になると、真紅まっかな縮緬の前掛が燃え
出したようにうつり合いました。

「伊勢から来たというわけでもないが、伊勢には暫くいたことがあるのだ」

「それでは間あいの山やまをごらんになりましたか」

「間の山は見ないけれど、間の山節というのを聞いたことがある。そういうお前こそ伊勢の国のうまれか」

「わたくしは伊勢のうまれではございません、どこと行ってうまれた国は……まあ、渡りものなんでございますね」

「渡りもの？」

「ええ、お恥かしい話ですが、男に欺かれて諸国をひきまわされたあげく、今ではこうして信州の諏訪へ来て物売りを致しておりますようなわけでございます。女みずしやうというものは、水性なものでございますから、男次第でどうにでもなります。ほんとうに意気地のないものでございますね、オホホホホ」

この時の女の言葉には、触さわれば落ちるような甘味をふくんでいたもので、竜之助は暫く沈黙しました。

「ねえ、旦那様、おついでにお面かおの方も、もう一ぺんあたつて上げましょうか。殿方のおあたりになったよりも、これでも女の方が、手ざわりがいくらかやわらかになるかも知れません。御免下さいまし」

そのやわらかな手を、首筋から頬のあたりへうつした時に、竜之助の面おもてがひととき蒼白あおしろくなりました。

「もうよろしい」

「どうも失礼を致しました……いいえ、お代はあとで帳場からいただきます」

といつて、女が出て行ってしまったあとで、竜之助は、自分の身に残るうが、つり香がといつたようなものに、苦笑いをしました。

これは売女の類だ。物を売ることにかこつけて、色を売らんとする女。よく温泉場などにあつた種類の女——おれをそそのかしに来たのがおぞましい。

とはいえ、今の竜之助にあつては、女というものの総ては肉である。美醜をみわけるとの明を失っているから、美のうちに貴ぶべきものの存するのを発見することができない。醜を感知するの能を失つてから、醜の厭うべきを知つて避けるの明がない。

いや、それは単に女ばかりではあるまい。この男は、すべてにおいて、むずかしくいえば、宗教がなく、哲学がなく、またむしずのはしる芸術というものがない。ただあるものは剣だけです。勝つことか、負けることかのほかに生存の理由がないので、恋というものも、所詮は負けた方が倒れるものである。心中の場合においては、大抵、男が女に負けて引きずられて行く

のである。曰く薩長、曰く幕府、曰く義理、曰く人情、みな争いである。争いでなければ、争いを婉曲えんきよくに包んだものに過ぎない。人間日常の礼儀応対までが、この男の眼——見えない眼を以て見れば、ことごとく剣刃相見けんじんあいまみゆるの形とならないものはない。いやまだまだ、人間の生存そのものが、また一つの立合である。

一剣を天地の間に構かんえて、天地と争って一生を終る——所詮、天地の間に吐き出されて、また天地の間に呑おわまれたものと知るや知らずや。生存ということは、天地の力に対抗して、わが一剣を構かんゆることに過ぎない。わが一剣の力衰えざる限り、天地の力といえども、如何いかんともすることができない——と、彼はそう思わないで、そう信じている。

女というものに触れる時——彼は、いつでも戦いを挑いどまれた

ように思う——そうしてこれを斬つてしまわなければ己れが斬られてしまうように思う。この場合においては、相手の善悪美醜を選ぶのいとまがないのです。

まもなく久助とお雪は外の湯から帰つて来て、鮎ふなや小蝦こえびをお茶菓子に、三人お茶を飲みました。そこへ、宿の番頭がやつて来て、

「ええ、御免下さいまし、毎度、御ごひいき臈きに有難う存じます。ええ、それからちよつと申し上げておきまするは、今晚のところは、土地の風習で、お万殿の夜詣りということになっておりますから、九ツ半過ぎては、外へお出ましにならぬように、なにごんよろしくお願い申します」

と言う。

「何ですつて」

それをお雪が聞きとがめると、番頭が、

「お万殿の夜詣りでございまして、はい」

と番頭が答える。

「お万殿の夜詣りというのは何ですか」

お雪が念を押してたずねる。

「ええ、何でございますか手前もよくは存じませんが、月に一度ずつ、お万殿の夜詣りということがございまして、その晩、九ツ半過、外へ出ますと、祟りたたがあるといい伝えられているのでございますから、なにぶん……」

「ええ、ようござんす」

お雪が、それを承知してしまいました。断わられなくても、大抵の人は九ツ半過、今の夜中から一時までの真夜中をかけて、

出て歩く必要はないはず。

そこで、番頭が行ってしまったあと、お雪ちゃんは、まだ何か物足らない面かおで、

「お万殿の夜詣りって何でしょう、外へ出ると祟りがあるんですって」

「ナニ、詮索せんさくするがものはがあせんよ、土地の習わしですから、郷ごうに入いっては郷に従えと行ってね」

「ですけども、こんな夜更けにわざわざお詣りをなさるお万殿という方も、気が知れない」

「何か因縁があるでがしようね」

「丑うしの刻詣りときまいじゃないでしょうか。丑の刻詣りの人に道で行逢うと、祟りがあるつていいますから——」

「ですけどね、わざわざ先触れをしておいて、丑の刻詣りを

する人もないもんじゃないやありませんか」

「それも、そうですね」

「まあ、なんにしても九ツ半から外へ出さえしなけばいいのさ、言われた通りにね」

「なんだか気がかりになるわね」

久助は触らぬ神に祟りなしの態度を取っているが、お雪ちゃんふは腑ふに落ちないものがあつて、あきらめきれない。あらためて竜之助に向い、

「先生、御存じですか」

「知らない」

「おかしいわね」

お雪は首をひねって思案してみたが、

「考えたつてわかりやしませんわ、塵劫記じんこうきとはちがうんですも

の、土地の人に聞いてみなければ」

「番頭さんが知らないくらいだから、土地の人だって知っちゃいますまいよ」

と久助がいう。

「年寄の物識りものしに尋ねたらわかるでしょう」

「それほど詮索をしなくつたつて、やっぱり郷に入つては郷に従えですよ、こういう晩には早寝に限ります」

「それもそうですね」

お雪は、まだ解ききれない塵劫記じんこうきの宿題でも残っている心。

その時、お雪は、ふと行燈あんどんの下の暗いところで何物をか認め、

「おや、こんなところに櫛くしが落ちているわよ……」

と拾い上げて、

「まあ、二つに割れていることよ」

お雪の手にしたのは、まだ新しい木曾のお六櫛。

拾つても悪い、落しても悪いという女の櫛。しかもそれが自分のほかには女のいないこの席に、真二つになつて落ちていた。お雪はその時、なんとも言えない忌いやな気持ちになりました。

十一

この座敷は、それで済まされたが、どうしてもそのままでは済まされない座敷がありました。

「ナニ、九ツ半過から外へ出るな、お万殿の夜詣りがある、それを見ると祟たたりがあるとは奇怪千万」

元治元年がんじに京都で暗殺された佐久間象山の門生が二人——ちよ
うどこの宿屋に泊り合せていたのが肯うけがいません。

第一、そういう迷信のために、一種の交通遮断を行うのは、迷信を仮かりての暴虐である。これに甘んじて従うのは近代人の恥辱である。と力りきんだわけではないが、久助や、お雪ほどに素直すなおにはゆかない。

「そのお万殿とはなにものだ」

「ええ、何でございますか、手前もよくは存じませんが……」

「知らない、貴様が知らぬことを、ナゼ人に強しゆるのだ」

「恐れ入りました、よくは存じませんが、お万殿が九ツ半過にここをお通りになつて、諏訪の明神様へ御参詣をなさるのださうで」

「そのお万殿とやらが、参詣をするために、なんでわれわれが外へ出て悪いのだ。お万殿というのは禁裏のお使か、或いは將軍の代参でもあるのか」

「いいえ、そういうわけではございません、それにいきあうとたたりがありますので」

「たわごとをいわずに引込んで、誰かその因縁を知ったものをつれて来い、さもない時はわれわれが、今夜親しくそのお万殿の正体を見とどけて遣つかわすぞ」

「はい」

番頭は青くなりました。青くなったのは、この連中に向つては迷信の権威が甚だ薄いから、よく納得なつとくさせないかぎり、必ずや九ツ半を期して、その正体を見届けに出かけるに相違ない。そうになると、まंनीち間違いの出来た時に責任がある。と思つたから青くなつてほうほうていの体で、この座敷をすべり出しました。

ここに二人の佐久間象山の門生——といつても象山門下を名

乗るものにかぎりはない。ちよつと玄関をのぞいただけでも、都合上その門生の名を利用するものも多い。宿帳にはそうはしるさなかつたが、一人は丸山勇仙、一人は仏頂寺弥助、共に信州松代まつしろの人としてある。

丸山は書生であり、仏頂寺は劍客であります。従つて丸山はよく洋書を読み、仏頂寺はよく劍を使う。丸山の学力のほどは知らず、仏頂寺の劍は当時に鳴り響いたものです。

この仏頂寺弥助と、長州の高杉晋作とが試合をしたことがある。その前に、高杉晋作が、はじめ佐久間象山に謁見えっけんした逸話がある。

高杉晋作、天下第一の気概をいだいて、江戸に出でて書劍を学ばんとす。その師吉田松陰の勧めに従い、道を信濃に取つて佐久間象山に謁す。象山、つくづくと晋作を見て、

「君は幾つになる」

「二十一」

そこで、象山が、またも晋作の面おもてをつくづくとうちまもり、嘆息すること久し。

晋作はその時、内心得意でありました。象山が嘆息したのは、おれの英雄心を見て取つての感嘆であろう。そこで、

「先生、僕の歳を聞いて、ナゼそのように御嘆息をなさる」

「されば」

と象山は徐ろおもむに曰いわく、

「おれは十五歳にして、信濃一国に鳴り、二十歳にして日本全国に鳴り、三十歳にして五大州に鳴る。君は二十一歳というのに、おれはまだ高杉晋作なるものの名を聞いたことがない。いったい、君はどこへ年を取っているのだ」

これには、さすがの高杉東行も、默然もくねんとして一言もなかった。ここにいる仏頂寺弥助と高杉晋作とが試合を試みたのはその時です。

仏頂寺は斎藤弥九郎の高弟。そのころ無敵といわれた道場荒し。

当時の佐久間象山は、水戸の藤田東湖と共に一代の権威。諸侯も礼を厚うして、辞を卑ひくうしなければ教えを乞うことのできぬ人だから、高杉もこの人に逢つては、油を絞られるのもぜひがない。象山はまた豪傑の士に逢うと、好んでこういう手段を弄ろうしたがる男である。

そこで、仏頂寺弥助と竹刀しなの立合。高杉はそうそうは負けてもおられまい。といつて高杉は剣術使いではない。

尋常では勝てないことを知っている彼は、立合の場へ立つと、

いきなり交叉してあつた竹刀を取り上げ、

「オメーン！」

まだ立合わない仏頂寺の頭を一つ食くらわせてしまった。仏頂寺大いに怒り、

「まだ、礼式も相済まぬうちに、頭を打つとは何事でござる、無作法千万」

高杉晋作は、いつかな聞かない。

「何とおつしやる、貴殿もし、戦場に臨み、敵に頭を斬られてなお礼式呼ばわりをなさるか」

「以ての外、ここは戦場ではござらぬ」

「いやいや、立合の場は戦場と同様でござる、貴殿の頭は、もう拙者が打ち割ってしまったのでござる」

「強弁を振いたまわず、いさぎよく立合つて勝負をさつしやい」

「勝負はすでについてござる、拙者の勝ちでござる」

仏頂寺が躍起になつて怒るのを、高杉は頑がんとして勝ちを主張してこの場を去つた。これは高杉一流の手前勝手。

とにかく、仏頂寺弥助は当时有数の剣客でありました。

それはさて置き、この二人が今しも一酌を試みて談笑していると、最前二人にオドカされてほう、ほうの体ていでこの座敷を逃げ出した宿の番頭が、恐る恐るやつて来て、

「御免下さいまし、ただいまお話のお万殿のことは、この本にくわしく書いてあるそうでございます」

「うむ、そうか」

番頭は一冊の本を置いて、逃ぐるが如く走はせ去つてしまいました。

「ナニ、諏訪昔語りか……」

丸山勇仙が、その本を取り上げて見ると、こくめいに書いた写本であります。

「お万殿のこと……」

二三枚めくって、ある点に急がしく眼を飛ばせて走り読みをすること暫し。

「なるほど、これで、すっかりわかった」

「どういふ仔細だ」

そこで丸山勇仙は、仏頂寺弥助に向つて、自分が走り読みしたお万殿の部分を、次の如く要領よく話して聞かせました。

天正十年のこと、織田信長がこの国に侵入して、法華寺といほっけでらうので兵糧ひょうろうを使つているところへ、色々の小袖を着た女房が一人入つて来ました。

この女房は信長の前へ出ると、懐中した錦の袋から茶入を出

して信長に見せると、信長は何に激したか大いに怒り、刀を抜いてこの女房を一太刀ひとたちに斬つて捨ててしまいました。

この女房というのがすなわちお万殿で、もとは、美濃国岩村の城主遠山勘太郎が妻、信長のためには実の伯母おばです。岩村の城陥落の時、武田家の将、秋山伯耆守の手に捕われ、ついに伯耆守の妾となつて、少しも恥ずる色がなく仕えていたから、信長が怒りに堪えずこの始末。

それで、お万殿の恨みが消えない。遊魂ゆうこん今もさまようて、夜な夜な神詣かみもうでをするといういつたえが残る。

「ははあ、ではそのお万殿というのが、色々の小袖を着て、錦の袋に茶入を納め、それを捧げながらこの前を通つて、諏訪明神へ参詣というわけだな。そうなると、いよいよ見てやりたくなる」

仏頂寺弥助がいますと、丸山勇仙は、

「それはなんとなく忍びない心持がする、見てやらないのが人情だろう」

その時、盃の酒の冷えたのに気がつきました。

十二

こちらの座敷では、明朝塩尻までの馬の相談にいつて来た久助が、どこで聞いて来たか、前のとほぼおなじようなお万殿のいわれを、お雪に向って話すと、

「かわいそうだわね、それではお万殿の恨みが残るのも無理がないわ」

といました。

「どうも仕方がねえ、敵の大將に肌をゆるしたんだから——」
久助は鈍感な返事。

「だって、かわいそうですわ、生捕りにされちまつたんですもの」

「生捕りにされたつて、お前様、敵の大將に肌をゆるせば、後で殺されたつて仕方がない」

久助は、仕方がないで押切るのを、お雪は残念がつて、

「それでも……常磐御前ときわごぜんをちようあいごらんさいな、義朝よしともにつかえていて、あとで清盛の寵愛を受けて、それでも貞女といわれてるじやありませんか」

お雪は常磐御前を味方に連れて来て、久助をいいこめようとする。久助は迷惑がつて、

「ありやお前様、子供を助けたいからなんでさあ。源氏の胤たねを

残したいから、仕方がなしにああなつたんでしよう」

「仕方がないといえ、お前、お万殿だつて、戦に負けて敵に囲まれてしまえば、なお仕方がないじゃないの。自害しようたつて、できないこともあるでしょう。わたし、お万殿はちつとも悪い人じゃないと思つてよ。信長の前へ色々の小袖を着て、錦の袋に納めた茶入を持つて来て見せるなんて、しおらしいじゃないの。きつと、信長は自分の甥のことでもあるし、自分も心ならず敵に従っているんだから、許してもらおうと思つて、その茶入を土産みやげに持つて来たんでしよう。それを、むぎむぎと一言ひことも聞かずに斬つてしまうなんて、わたし、信長という人はにくらしいわ。まして自分の本当の伯母さんなんでしよう。だから、信長という人は、あとで自分の家来の明智光秀に殺されちまつたんでしよう。自業自得というものですわ、ねえ、先生」

お雪は今度は竜之助の方へ加勢を頼みに来て、

「ねえ、先生、あなたは、どう思っていていらつしやるの、やはり、お万殿をかわいそうだと思っていていらつしやるでしょう。信長という人を、にくい人だと思いにならない？」

「けれども、この時の習いで、敵に肌をゆるした女をたすけてはおけなからう」

竜之助が答えますと、お雪は非常に失望しました。

「まあ、先生も、そう思っていていらつしやるの。お万殿だつて、好んで敵にゆるしたんじゃないやありますまい、いくさにまけたから仕方がなかったのでしょう。世間にはずいぶん、よい夫を持ちながら、好んでほかの男に操みさおをゆるす女があります。では、そういう女は、殺しても足りないのね。お万殿の方が、よつぽど罪が浅いわ。それをむざむざ殺してしまうなんて……」

お雪は頼まれてもしたもののように、ムキになつてお万殿に同情を寄せる。

竜之助は何ともいわず、横になつたままひじまくらで肱枕をしましたが、その冷やかな面おもてがズンズン底知れず沈んで行くようでもあり、また行燈あんどんの光に照りそうて、一際ひときわの色をそえるようにも見えません。

「なんにしても、こんな晩には早寝にかぎりませう、先生もお休みなさいまし、お雪ちゃんもお休みなさいまし」

久助がいい出して、女中を呼び、前の晩のように竜之助はこちらの間まに一人、お雪と久助はこちらの間へ隔へてて床をのべてもらいました。そこで、竜之助は寝巻ねまきに着かえて、大小を引寄せて枕まくらにつこうとするのを、見ていたお雪が、

「先生、わたしは、いつもおかしいと思ひますよ、そうして、お休

みになる時まで、刀を後生^{ごしやうだいじ}大切にしていらっしやるのが……

「もし悪者が来て、これを盗まれてもしようものなら大変だ」

「だって、先生、盗む気で来れば、いつでも盗めるでしょう」

「どうして」

「どうしてって、失礼ですが先生はお目が御不自由でしょう、ですから、盗むつもりなら、いつでも盗めるじゃありませんか」

「盗みに来れば斬ってしまおう」

「それでも先生、ちよつと浚^{さら}って逃げたらどうなさいます、追っかけることはできないでしょう。また、刀をお抜きになったところで、どこに悪者がいるかおわかりにならないでしょう。ですから、お抜きになっても、トテも斬ることはできやしないでしょう」

「そうも限るまい」

「それは先生が、お目さえ御不自由でなければ、悪者が来ても怖くはないでしょうけれど、肝腎かんじんのお目が悪いんですから、盗もうと思えば、わたしだつて盗んで見せますわ」

「ははあ、雪ちゃん、お前にこの刀が盗めますか」

「眠つていらつしやるところを、そう、つと持ち出せば何のことはないじゃありませんか。それは譬たとえですけれども、どうしても盗めとおっしゃれば、今夜にも盗んでお目にかけますわ」

「それでは今夜、盗んでごらん」

「お約束はできませんけれど、もし、わたしが夜中に目がさめましたら、きつと盗んでお目にかけます」

「なるほど。それでは、下げ緒も向うへまわして、お前の盗みよいようにしておきましょう」

「そうして、先生、もし盗めたら、この刀を返しませんよ」

「いいとも、盗まれるのはこつちの落度おちど、それを返してくれと
はいわない」

「けれども、あやまれば返して上げます」

「返してもらわなくてもよい」

「それでも、わたしが刀を持っていたって仕方がないじゃありませんか」

「それは知らない、盗んだものの捌はけ口ぐちまではわしは知らない」

「おあやまりなさい」

「あやまらない」

「それじゃせつかく盗んでもつまらない」

この時、竜之助は微笑をたたえて、

「雪ちゃん、お前は盗むことばかり考えているが、もし盗みそこねたら、どうしますか」

「そりや先生、盗みそこねたら、罰としてお望みの物をなんでも差上げますわ」

「きつと？」

「きつとですとも」

弁信法師も言「った通り、お雪も年ごろの娘であるのに、あまりに無邪気です。自分が愚かなるが故に無邪気なのではなく、人を信ずるが故に無邪気なのです。人を信ずるの深きは、つまり己おのれの心の純なる所以ゆえんでしょう。

「それではお約束をしましたよ、雪ちゃん、その心持でお休みなさい」

大小をこころもち前の方へ置いて、机竜之助は枕につきました。
た。

「ここから風が入るといけません」

お雪は竜之助のために、枕の間の夜風を、夜具の襟で埋めてしまおうとした途端、ゾツとして唇の色まで変りました。

しかし、べつに夜具の中に鬼も蛇じやも棲すんでいるわけではない。蠟ろうのように白い竜之助の寝顔を見た時、はじめて、「姉を殺したのはこの人だ」と言った弁信法師の言葉が、ハツと思ひ当つたからでしょう。

弁信法師のいうことは、上かみは碧落へきらくをきわめ、下しもは黄泉こうせんに至るとも、あなたの姉を殺したものがこの人のほかにあるならばお目にかかる——それは途方もない出放でほうだい題。

弁信さんは、時々ああいうことをいい出すからいけないのだ。もし、あの弁信さんが今晚ここにいたら、あの人だから、何をいい出すまいものでもない。「今晚、九つ半過から、この道を通つて諏訪の明神へおまいりをなさるのは、い、に、し、え、のお万殿

ではありません、それは殺されたあなたの姉さんです」——こんなことをいい出すかも知れない。どうも、そういう気がしてならない。なお念を押して、「私は血まよってはおりません、私のいうことが本当でございます」と付け加えるかも知れない。

いい時はいいが、悪い時は、弁信さんのいうことは一から十まで気になる。ああ、悪いことを思い出した。

そう思うと、しんしんと淋しくなつて、ほんとうに殺された姉さんが、ほどなくこの街道を通るように思われてならない。見ていればいるほどこの人が、ほんとうにわたしの姉に手を下したもののよう疑われてならぬ。

罪という罪は多いのに、夫にそむいて他の男に許した女の運命のみが、なぜそのように酷いむじのдарう。わたしには、どうしてもお万殿がそれほどの悪人とは思えない。信長という人の方

が、どのくらい無慈悲な、極悪ごくあくな男だか知れない——わたしの姉さんだつてその通り、優しくつて、如才じょさいがなくなつて、うわべだけでない親切つぐな気のあつた人——ついた間違まちがいが、死を以てするよりほかに償つぐないがないとは、なんという情けなさけない女の運命。そんなことを考えれば考えるほど、気が滅入めいつて、あらぬ人に疑うたがいをかけてみたがつたり、世間よを呪のろいたがつてくる。全くこんな晩には早寝をするにかぎると思ひ直して、お雪は次へ行つて帯を解こうとすると、廊下にバタバタと人の足音があつて、「さきほどはどうも、失礼を致しました」

と障子をそつとあけたのは、以前、お雪のいない時に物売りに来たなまめいた女です。

「何か御用？」

帯を解きかけたお雪がこちらを見て返事をする、女もお雪

を見て、ちよつとはにかんで、

「あの——さきほど、そこいらに櫛くしが落ちてはおりませんでしたらうか。いいえ、つまらない櫛ですから、どうでもいいのですけれど……」

「あ、櫛ですか、落ちていました」

お雪はほどきかけた帯をちよつと締め直して、

「落ちてはいましたけれど、お気の毒さま、こんなに割れていましたよ」

「まあ」

お雪が行燈あんどんの上にさしおいたお六櫛の二つに割れたのを取って見せると、

「おやおや……わたくしのそそうですから仕方がございませぬ」
女はしよげて、二つに割れた櫛を受取り、

「どうもお邪魔を致しました、お休みなさいませ、よろしく」といつて竜之助の寝ている方を横目でチラリと見て、障子を立てきつて出て行きました。

ちよつといきがつた髪ゆなの結いよう、お化粧、着こなし、緋縮緬ひぢりめんの前掛、どう見ても湯女ゆな気分の色っぽい女。お雪はちよつと眩惑されて憎らしい気分がしましたけれど、そこになんとなく人なつこいものの残るのを、さぐってみると、どうも殺された姉に似たところがある。気のせいかわからないが、姉の持っていた、人ずきのする懐かしみをかなり多量に持っている。

今の女が、わたしのいない時にこの座敷へ物売りに来て、そうして櫛を落していった。その櫛が二つに割れている。

「ああ、この女もまた姉のように殺されるのではないか」
忽然こつねんとして起つた何の抛りよどころもない暗示。こんな暗示に

襲われた自分を、お雪は戦慄せんりつしました。

この女が廊下でバツタリ、仏頂寺弥助に出逢ったのが運の尽きであります。

弥助は、いやがる女を無理に自分の座敷へ連れ込んでしまいました。しかもその座敷には新たに二人の客があつて都合四人、酒興たけなようやく酣たけなわなるの時でありました。

女がしきりに、あやまるのを、かれはどうしても聞き入れない。女はついに泣き声になつても、どうしても、許すことをしないものだから、その狼藉ろうぜきがあたり近所の座敷まで驚かすの有様となりました。

しかし、女も、もうのがれられないと観念したか、やがておとなしくなつて、そこへすわると、かれらは女に酒を飲ませました。

やむを得ず、女はその盃を受けると、つぎの一人がまたさす。からかいながら、強^しいてその盃を乾させて興がるのです。もう遅いからぜひおかえしくださいますと、またも女がせがむのを、もう一つやればかえすといつては、無理に酒を飲ませる。

女は、できるだけ、それに逆らわずに、酒を酌^ついでもらつて、早く帰してもらおうとつとめているらしい。

男共は、それと違つて、この女をもりつぶして興がろうとしているらしい。

仕方がなしに重ねているうちに、強^くもない酒が廻^まつて来るのはぜひありません。もともと水性^{みずしよう}の女ですから、少しづついい気持になつて、相手になつているうちに、とうとうもりつぶされてしまいました。

そこで、四人の者は凱歌^{がいか}をあげて喜ぶ。

「もういただけません、どうしてもこれで御免を蒙ります」

いったん酔いつぶれた女が、よろよると立ち上ったのは、それから暫くの後で、初めて気がついたように、

「ああ、もう何時なんどきでしょう、いけません、いけません、皆さんは、わたしをだましてしまいました、口惜くやしいッ」

女は何におどろかされたか、まっしぐらにこの座敷を逃げ出しました。

そのまま梯子はしじを駆け下りて、帳場から表入口へ飛び下りた足どり、酔がさめているのではない。

「もう時刻ですよ、泊っておいでなさい、泊っておいでなさいつてば……」

帳場で支えるのを聞かず、この女は表へ飛び出してしまいました。

夜の遅いことは知っているだろうが、今が何時なんどきだかは忘れて
いる。

「ああ口惜しいッ」

夢遊病にとりつかれたような女は、それでも本能的に自分の
下駄だけは間違えないで穿はき、盲目的に外へ飛び出してしま
いました。

「ああ、こんなに酔っぱらっちゃまった、頭がガンガンして、か
らだが火のように熱い、ああ、わたしはうつかりして、欺だまされ
てしまった、口惜くやしいッ」

女はこういつて、まっしぐらに外の街道を駈け出します。

この女の家は町はずれにあるはず。そこへ帰るつもりで、ま
るつきりちがった方角へ走っているらしい。そのくらいだから
髪かみのくずれていることも知らない。着物のみだれていることも

気がつかない。

「口惜しいッ」

と何かわからずに口惜しがって、街道を駈け出したが、やがてぱったりと物に突き当って打倒れ、その時、起き上るほどの気がなかつたと見えて、そこへころがったままである。

けれども氣絶したわけでもなければ、怪我をしたのでもない。まだ、充分に酔いがまわっているのに、走り出して疲れたものですから、泥のようになって、そこにかすかないびきをさえ立ててねむってしまったのです。

女が倒れているのは——静かな神社の境内けいだい。突き当ったのは、注連しめの張った杉の大木にめぐらした木柵。ここは諏訪の秋宮あきのみや、この杉こそは名木根入杉ねいりすぎ。

この時が、ちょうど、例のお万殿の出遊しゅつゆう、呪いのろを怖れる者の

出であるいはならないという九ツ半でありました。

十三

しかし、その晩は、宿の方ではそれよりほかに変つたことはなく、お雪ちゃんも夜中に目がさめて、竜之助の刀を覗ねらうような物騒なことをしないで済み、竜之助も血に渴かわいて、夜中に忍び出でた形跡もなく、久助は無論前後も知らず、隣室の、かのおだやかならぬ四人連れのものどもも、無事に眠りについて夜を明かし、まだ暗いうちに、竜之助は昨晚頼んでおいた馬で、お雪は駕籠かごで、久助は好んで徒歩かちあるきでこの宿を立つと、それと前後して、やはり隣室の四人連れ、丸山勇仙と、仏頂寺弥助と中ごろから加わつた二人、その名をいえば、高部弥三次、三谷

一馬の都合四人も、この宿を出かけました。

下諏訪を立つとまもなく塩尻峠。一足先に出た竜之助の一行と、やや後れておく仏頂寺ら四人のものは、この道中において、やはり後になり先になりましたが、徒立かちだちとはいえ一方は屈強のつわもの、一方は病人と女づれのことですから、徒かちの四人が先になるのはぜひもないことです。

これより先、彼等四人のものには、竜之助の一行が問題となつて、

「あれは昨晚、われわれとおなじ旅籠はたごを取つたものだが、なものだろう、夫婦でなし、兄妹でもなし……」

「左様、夫婦にしては年が違う、兄妹にしては他人行儀なところがある、付人つきびとも仲間ちゆうげん小者ではない、どこの藩中という見当も、ちよつとつきかねる、そうかといつて、ただの浪人にして

は悠暢ゆうちやうな旅だ」

横目でジロリジロリと竜之助の一行を眺めましたが、竜之助の笠はかなり深いのに、垂たれのない駕籠で、お雪の姿はありありと見えましたから、離れると、

「ちよつと可愛らしい娘こだ」

「人好きのする娘だ」

といつてカラカラと笑い、

「昨晚はかわいいそうに」

「そうそう、丸くなつて逃げ出したが、あれつきり姿を見せなかつた」

これは酔いつぶされて逃げ出した女のこと。

やがて、峠の上、立たて場の茶屋へ来るとそこで一休み。

仏頂寺弥助は鍵屋の辻の荒木又右衛門といったような形で縁

台に腰をかけ、諏訪湖の煮肴にぎかなを前に置いて、茶の代りに一酌しつしやくを試みている。

この辺の連中、腕はたしかに出来るには出来るが、ややもすれば無頼漢になつてしまふ。これより先、江戸三劍士（千葉、桃井、斎藤）の一人斎藤篤信斎弥九郎が、その門弟のうちから十余人の腕利うでぎきを選抜して「勇士組」と名づけ、これを長州へ送つてやったことがある。仏頂寺以下もそのうちの一人で、最初のうちはよかつたが、後にたちが悪くなつて、京阪の間で悪事を働いたものだから、師の篤信斎の怒りを買ひ、実はもう、とうの昔に殺されていなければならぬはずの男でありました。それがまだこの辺を宙にさまようて出沒しているのは奇怪きつかいせんぼん千万のことで、多分、再び、京阪の間かんへ舞いのぼり、勤王や、新撰組の中へ潜もぐつて何か仕事をしようとするつもりと見える。しかし

ながら、長州あたりでも、新撰組でも、もうこれらの連中は亡者扱いにしているから、真実に相手にする者はなかりうと思われる。といつて、腕にかけては、その当時といえども、この辺の連中がそうザラにあるべきわけのものでもありません。

自然用うるところのない亡者どもは、そのあり余る手腕は悪い方へ使えばといつて、善い方へ使う気づかいはない。

厄介千万なのはこの類たぐいの亡者。

荒木又右衛門気取りで酒を飲んでいるが、本物の荒木が来てさえも、そうは容易たやすく後ろを見せない者共でありながら、楯に取るのは義理名分でもなく、勇侠義烈でもなく、つまるところは酒と女。今もここに網を張つて、病人と足弱の一行を待ち構えているようなものですが、相手次第で、どう変化するかわかつたものではありません。

その日の天気模様は朝から曇っていたものですから、肝腎の峠の上から諏訪湖をへだてた富士の姿が見えず、あたたら絶景の半ばを損じたもののようで、ことに寒気が思いのほか強く、風こそないけれども、海拔一千メートルのここは、今にも雪を催してくるかとはばかりです。

そこへまもなく、峠路を上つて来た竜之助の一行。道中の不文律に従つて、ともかくもこの立場たてばへ一休みはするだろうと期待していると、案外にもそのまま挨拶もなく（挨拶すべき義務もなく）この前を素通りして先をいそがせましたから、四人のものが拍子抜けの体ていです。仏頂寺弥助の如きは、盃を宙にして、口をあいて、掌ての中の珠たまを取られたような形でいましたが、さりとて、上つて来たその人は河合又五郎でもなければ、阿部四郎五郎でもないから、立ち塞がるわけにもゆかず、呼びとめる

縁故もありません。

やむなく、相当の時間と茶代とを置いて、この立場を出立しました。四人はいい合わさねど忌々しい面いまいまをかおしている。

峠の上の立場たてば——五条源治を素通りした竜之助の一行は、やがて、い、い、の、じ、ヶ原の一軒家へかかろうとする時分に、後ろから、

「おおい」

と呼ぶ声。

その声を聞くと駕籠かごの中のお雪が、まず恐怖に打たれました。

「おおい」

二度呼ぶ声ふたたび。久助は聞かないふりをしてしていると、堪りかねた

お雪が、

「久助さん、おおい、おおいって、呼んでいるのは、あのさむ

ら、いたちじやありませんか」

「そうかも知れねえ」

「なんだか、気味の悪い人たちですね、麓ふもとでも、わたしの駕籠をジロリジロリと見ていました、いそぎましよう」

「急ぎましよう」

急ぐといつて、ここは下りに向つた塩尻峠ではあるが、見通しの利きく野原の一筋路。

もし隠れるとすれば、い、の、じ、ヶ原の真中に、屋根に拳石けんせきを置いて、中で草鞋わらじを売る一軒家があるばかりです。

「おおい」

と三たび呼ぶ声。この声に竜之助が聞き耳を立てました。

「うるさい奴等だ」

「何でしょう、あのおさ、むら、いたちは？」

久助が心配する。そこで期せずして二人がひっかかりました。「先生、かまわないうで行きましよう、そうでなければ、あの一軒家へ隠れて、先へやつてしまいましよう」

最も多く心配するのはお雪です。

「おおい、お待ちなさい」

ようやく近寄つて来た四人の者。

「ちえッ」

竜之助は小癩こしやくにさわる心持で、馬から下りてしまいました。

「先生、芸もないから相手になるのはおよしなさいまし、なんだか、たいそう気味の悪いさむらいたちですから」

久助も、お雪も、馬から下りた竜之助を見て、かえつてそれに驚かされました。

「小うるさい奴等だ……久助どの、お前はお雪ちゃんを連れて、

その一軒家とやらへ隠れておいで……馬も、駕籠も、近くへは寄らぬこと」

馬から飛び下りて、右の手で野袴の裾をハタいて、それから笠の紐を取った竜之助の面は例によつて蒼白あおしろい。いつも沈みきつている人も、時あつては小癩にさわる憤りを漂わせることがある。

「え、滅相めつそうな」

老巧の久助も面かおの色を変えました。この人は事をわけて相手をなだめるために下り立つたのではない、まさしく怒気をふくんで待ち受けているのです。病人であり、盲者めくらであるこの人が……油を以て火を迎えるようなもの。

物騒な相手よりも、相手を知らぬものが怖い。久助は何かいおうとして、慄ふるえ上つてしまいました。

しかし、心得たのは、お雪を乗せた駕籠屋で、客の安全よりは自分たちの安全を頭に置いて、竜之助にいわれた通り、お雪を乗せたままの駕籠の中に、程遠からぬい、のじヶ原の一軒家めがけて飛ばせてしまいました。馬も、馬方もそれについて——

久助は、無謀千万な同行者の態度に、いうべき言葉を失って慄え上っている間に、

「お呼び留め申して失礼」

おだやかならぬ四人のものは、早くもそこへ追いついたから、久助は、本能的にお雪の駕籠を追いかけて走りました。

あとにひとり残った竜之助は、うしろを顧みずしてあるきながら、

「おのおの方は、さいぜんからわれわれをお呼び留めなさるようだが、何の御用でござる」

「ちと、承りたい筋があつて」

竜之助と押並ぶようにして、まずし、やし、やり出たのが高部弥三次。

「それはまた何事」

竜之助が答えると、弥三次はせき、込んで、

「貴殿は昨夜、下諏訪の孫次郎へ一泊致したでござろうな」

「仰せの通り」

「そうして、貴殿は、あの宿で女をかど、わかして、これへ伴い参つたはず」

「何をおっしゃる」

「我々に向つて尋常にその女をお渡しなさい」

弥三次が詰め寄ると、後ろで仏頂寺をはじめ他の三人がニタリと笑っている。

そこで、竜之助は黙っていました。このやつらは、いいがかりを考えて来たな、自分たちで企たくらんだことを、こちらへ向けて先手にやって来たな。よしその分ならばと思つたのでしよう。

「いかにも女を一人つれて参つたに違いないが——」

「穏かにその女をお渡しなさい」

「渡すべきいわれのない者には渡せない、貴殿らにその女を受取るべき縁故があるなら聞きたい」

「我々はその——女にとっては親戚のものでござる、つまり、親戚のものから頼まれて、あとを追いかけてまいつたものでござる」

「しからは、その受取りたいという女の身元は？」

「宿の女じゃ、貴殿がかどわかして、駕籠かごに乗せてまいつたあの女」

「して、その女の名は何といつて、年は幾つぐらい」

「くどい——」

高部弥三次がいっかつ一喝しました。少々離れてあとからついて来た
仏頂寺はじめ三人のものは、高部の一喝をおかしいものとして、
あぶなく吹き出すところでしたが、やっと我慢していると、大
まじめな高部は、

ぬすつとだけだけ

「盗人猛々しいとは貴殿のことだ、人の大事の娘をかどわかして
おきながら、年はどうの、名は何のと……人を食った挨拶」
と言って竜之助の肩へ手をかけてゆすぶると、竜之助は横の方
を向いて、

「紙入を一つ拾うたからとて、手渡しするまでには相当に念を
押さにやならぬ、まして人間一人……」

そのまま歩いて行くと、高部も肩を捕つかまえながら邪慳じゃけんに歩い
て、

「やい、この刀が目に入らぬか、我々のかけ合いは、ちと骨つぽいことを御存じないか。お手前はそのかどわかして来た女を、あれなる一軒家へ隠して置いて、踏みとどまって我々に応対を致そうとするからには、相当に覚えがあるに相違ない。刀にかけて返答をするつもりか、それとも、あれなる一軒家へ案内して、尋常に女を渡すつもりか。さあ、こちらを向かつしやい、こちらを向いてこの刀、粗末ながら永正えいしようの祐定すけさだを一見さつしやい」

高部弥三次は、こういつて長い刀の柄つかを丁と打ちましたから、あとにつづいていた三人がまたも面かおを見合わせて、高部でかしたといわぬばかり。

その時、竜之助は、

「あいにく、拙者は眼が見えないのだ」といつて、苦にがりきつて向き直りました。

「ナニ、眼が見えない？」

向き直った竜之助の面を高部がキツと見て、暫くあきれていると、

「この通り盲目だ」

「盲目？」

これを聞いて驚いたのは高部ばかりではありません。後ろについて、かけ合いを検分して来たところの仏頂寺はじめ三人の者が、六つの目をみはつて、一度に竜之助の面を見つめました。

事実、今までこの四人は、この男が盲目であるとは知らなかった。

さてこそ、悪く取りすました返答ぶり、大胆と沈勇に出でた結果でもなんでもなく、敵の威力を見定める眼を失っているからのこと。こう思つてみると、四人は一度にカラカラと高笑い

をして、

「盲蛇めくらへび、物に怖おじず」

といいました。

そこで高部は一層凶に乗って、竜之助の肩をゆすぶり、

「一体、貴殿はどここの藩中だ、両刀を帯している以上は、多少、
武術の心得はあるだろう、まして、この道中、盲目の分際で傍
若無人の振舞、酒をのみ、女にたわむれ……」

といつて、高部は自分ながら妙な面をして失笑したのは、よく
ある手で、この手合の因縁あつぱをつける時は、たいてい自分の不埒ふらち
を先方へなすりつけて、天晴あつぱれ先手を取ったつもりでいる。相
変らずその手をまじめくさって使い出したけれども、自分なが
ら気がさしたと見えて、舌を吐きました。

後見役の仏頂寺はじめ三人は、やれやれと目面めがおでけしかける。

高部もいよいよ得意とならざるを得ないのです。

「昨晩も、下諏訪の宿で、あたりはばからぬあの乱暴狼藉、同宿の我々がどのくらい迷惑致したか知れぬ。しかるにまたも悠悠として女を伴い、これ見よがしの道中、武士の風上には置けない仕業……」

かさにかかつて苛め立てようとするのに、相手がさのみこたえない。

聞き捨てにして徐々と前へ歩んで行くから、高部もいささか張合いが抜けて業が煮え、

「生国と姓名を名乗らつしやい」

高部はまたも竜之助の肩をこづき立てましたから、竜之助が、

「生国は下総国、猿島郡」

と何のつもりか出鱈目のところを述べると、この時まで、後見

役気取りで、あとについて来た三人のうちの仏頂寺が、急に二人の横を摺り抜けて前へ出てしまいましたから、高部はちよつとその挙動を怪しみました。しかし、もともと仲間のことですから、怪しんだのみで危ぶんだわけではありません。

そうすると、徐ろおもむに歩んでいた竜之助が、ふいに足をとどめたものですから、押並んで歩んでいた高部も足をとどめないわけにはゆきません。その間の空気かんが、なんだかちよつと変でしたから、後ろにいた三谷と丸山も妙な面かおをして立ち止まりました。

この時、高部は前よりグツと手荒く、竜之助の肩をつかみ、極めて意地悪く小突き廻すと、その時、竜之助の癩かんがピリリと響き、

「ちえイツ」

無慈悲にその肩を左に開くと、侮りきつていた高部がよろめいた途端を、左の手で突放つつばなしたと見る間に、

「あつ！」

と言つて、頬を抑えて無二無三に後ろへ飛び退すさつたのは高部で、ほとんど五間ばかり一息に後ろへ飛びさがつて、そこで仰向けに倒れて、

「あつ、つ、つ、つ、つ」

と左の手で自分の頬をおさえると、その指の間から血が滝のように溢れ出します。それでも、右の手には早くも脇差を抜いて、仰向けに倒れながら、それを構えたが、みるみる、面かおの全部が溢れ出す血潮で塗りつぶされ、余れるものは指の間から筋を引いて下へ落ちます。

竜之助は、抜討ちに高部の横面よこめんを斬りました。それでも、幸

いにして、その横面は、頭蓋骨を二つに殺いでしまわな^そいで、左のこめかみから三日月形に、頬を伝い、骨を残して肉だけを斬つて、上唇まで裂いてしまいました。高部が飛び退つてその傷を手で押えた時に、はじめて血が迸つた^{ほとばし}ものですから、その瞬間に見た傷口は、なんのことはない、口が左へ耳の上まで裂けあがつたのと同じことです。しかし、それも瞬間のことで、その血は忽ち^{たちま}顔の全面に溢れたものですから、丸山勇仙は、高部がやられてしまったなと思ひました。それと見て、先へ一足進んでいた仏頂寺弥助が、刀を抜く手も見せず竜之助に飛びかかろうとして、急に飛びのいてしまいました。

三谷一馬もまたすかさず抜き合わせたけれども、遠く離れて、それを振りかぶつたままです。腕に覚えのない丸山勇仙は、一時仰天してしまいましたけれど、これは抜き合わせずに、高部弥

三次の介抱かいほうにまわつて、後ろから抱きながら、いたずらにうろたえているばかりです。

机竜之助は抜討ち横なぐりに高部を斬ると共に、当然踏み込んで行くべき二の太刀たちを行かずに、後ろへ退ひいてその刀を青眼に構えたままです。

多分、仏頂寺が、斬りかかろうとして飛び退いたのはそれのためでしょう。高部を追いかける途端を、小癩こしやくなど、横合いから一ナグリに斬つて捨てようとしたのが、案外にも、出足を進めないで、後ろへひいて構えた変化。そこを斬り込めば自分が斬られることを知っているから、退いて立て直すことにしたのでしよう。

三谷ときては、見当がつかないから、その当座は遠く離れて振りかぶっているが無事。

そこで、彼等の内心のおどろきは非常なものでありました。

これは、絶体絶命の自暴やけで振りまわしている刀ではない。

めくらめつぼう
盲目滅法の捨鉢でもない。

盲目といったのは嘘だ。我々を油断させるための機略だ――

と気がついて見ると、やつぱり盲目は盲目に相違ない。

眼が開いていないから――この際に至つて、なお眼をつぶつ

て、機略そつを弄ろうする必要はないのだから――

その蒼白そうはくにして沈鬱おもて極まる面にたたえられた白く閃ひらめく殺気。

白日荒原の上に、地の利と人の勢いの如何いかんを眼中に置かず、十

方碧落へきらくなきのところへきらくに身を曝さらして立つの無謀。

これより先、い、の、じ、ヶ原の一軒家に送り込まれたお雪は、気がでなく、どうしても中へ隠れてはいられないで、幾度も、幾

度も、外へ出て見ましたが、竜之助と覚しいのを中に、四人で、都合五人ほどの人が極めて悠々寛々とこちらへ歩いて来るのも、どかしいことの限りです。

久助もまた居たり立ったりして心配してみましたが、何の方便もありません。要するに、万一の場合は、一行の中でいちばん弱いお雪を保護するのが急だと、

「お雪ちゃん、裏の方へまわって休んでおいでなさい……」

場合によつては、この家の主あるじに頼んで表戸を締め切つてもらおうと思いましたが、お雪はやつぱり気が気でなく、またも敷居の外へ出て見て、今度は、急に真青まっさおになり、

「あれ、大変です、斬合が始まってしまいました、どうしましょう、どうしましょう、大勢して先生一人を殺そうとしています、かわいそうだわ、目の見えないものを、あの憎らしい人

たちが寄つてたかつて——」

と絶叫しました。

この叫びで、久助も色を失つて駈け出して見ると、お雪は夢中になつて、

「誰か、助けて上げてください、四人と一人じゃ敵かないませんわ、どんな強い人だつて。まして目が見えないんですもの……あ、誰か倒れた、先生が斬られてしまった、見ていられない」

お雪は両方の眼を両手でかくして、久助へよろけかかりました。

十四

次の恐怖がほどなくこの一軒家へ襲うてくる。逃げられなけ

れば隠れるほかはない。隠れおおせないまでも——

久助は、目をふさいで凭りかかったお雪を抱き込んで、

「戸、戸、戸を締めて下さい……」

そこで、この家の主人あるじが先立ちで、駕籠屋、馬方など避難の連中が、ビシビシと戸を締めきり、内からくるる柩を卸した上に、心張しんぱりをかき、なお、万一の時の用意に、慶長年代の火縄の鉄砲を主は持ち出し、駕籠屋は息杖いきづえをはなさず、馬方は手頃の棒を持っています。

久助とお雪は、裏口へまわって物置の蔭に小さくなつて、

「だから、先生を馬から下ろさなければよかつたのに……」

「だって、下りてしまったんだから仕方がねえ」

「きつと、ここへやってくるわ、もし、この家をこわしてしまつたら、どうしましょう、逃げ出したつて一筋道だから、捉まる

にきまつているわね」

「この主人が鉄砲あるじを持つているから、安心しなさいよ」

けれども、事実、その鉄砲がどのくらい威力あるものだか覚束おぼつかない。

今や、締めきつた戸を割れるばかりにたたくもののあることを期待し、それが、いよいよ戸を押し破つたなら、その時こそ最後……と腹をきめるよりほかはない。

お雪は、久助の懐ろに息を殺している。

ところが、おそい来るべきはずの敵が容易に来ない。一陣を斬りくずして、余れる勢いでこの孤城に殺到して来るべきはずの敵が、なかなか来ないのであります。

「久助さん……来ませんね」

「ここに隠れたことを知らずに、通り越したのかも知れねえぜ」

「そうだとすれはまたひきかえして来るかも知れません」

「ナア二、そのうちには、お大名のお通りがありますよ。お通りがあれば、あんな悪い奴は、蜘蛛くもの子を散らすように逃げてしまいますからね」

ここで、万々一のお大名行列の威力まで引合いに出して、お雪に力をつけてみたのですが、お雪の耳へは入らないで、

「先生がかわいそうだわ」

「どうも仕方がございません、助ける手段がねえのだから」

「先生も悪いわ、早く馬で逃げてしまえばよかつたのに。ですけど、そうすれば、わたしたちが直ぐにつかまってしまいます……でも、同じことなら、眼の見えない人より、眼の見える人が先に殺された方がよかつたかも知れない」

「あ、人の足音がするようです、静かに——」

久助はお雪をかかえて、からだ身体を固くする。

しかし、人の足音と思つたのはひがみ僻耳でしよう。そうでなければ表の戸を守っている主と、あるじ駕籠屋と、馬方とが身動きをしたのか、またそうでなければ、ききよう桔梗ヶ原からつかま塚魔野へ、意地の悪い鴉が飛んで行く羽風であつたかも知れない。

諏訪からのぼつて来た人は、峠の上のこの騒ぎで、五条源治の立場たてばあたりに食い止められているんだろう。塩尻からは、まだここへ通りかかるほどの早立ちの客がなかつたものと見てよろしい。

それですから、い、の、じ、ヶ原は空々寂々として、原林のような静けさ。まして雪もよいの陰鬱な天気。

ところで……高原の空気にさ冴ゆる剣の音も聞えない。吹き来きたるべき暴風が途中で沈没してしまつたものか、或いは人の恐怖

を出し抜いて、その頭上を通り越してしまつたものか、いつまで経つても、一軒屋の表戸をおどろかすものがありません。いつたいどうしたのだ。あまりのことに、こつそり戸をあけて、もう一度様子を見ようとまで気がゆるんだ時に、ようやく野風のさわぐ音。

この間、い、の、じ、ヶ原には、灰色の雲がいつぱいに立てこめて来ました。

諏訪の盆地は隠れて見えぬ、鉢伏はちふせと立科たてしなが後ろから覗き、伊奈いなと筑摩ちくまの山巒さんらんが左右に走る。遠くは飛驒境ひだぎかいの、槍、穂高、乗鞍等を雲際に望むところ。近くは犀川さいがわと、天竜川とが、分水界をなすところ。

すべてを灰色に塗りつぶした、い、の、じ、ヶ原は山路にあらずして、いとど荒原の趣を加えてきました。見渡すところ、この荒

原の中、離々たる草を分けて歩み行くと、たつた一人の人、這うよ
うな遅い足どりで――

天地が塗りつぶされた灰色の中に、その人も灰色。

その人は、手に白刃をさげたままで、左の手で半身にあびた
血汐ちしおを拭いながら、よろよろと荒原の中を歩いている。

野袴の裾には、尾花すすきが枯れている。

立科から桔梗ヶ原へ向けては、灰色の空をしきりに鳥が飛ぶ
のに、地上の荒野原は、この人ひとりがあるかせるための蒼涼そうりょう
たる画面。

しかし、どう見ても、痛々しい足どりだ。病めるにあらざれ
ば、傷ついている。

誰と戦つて、誰のために傷つけられた。相手はどこにいる。
どこにもいないではないか。連れはどこにいる。それも見えな

い。

こういう場合には、傷ついたりも、殺された方が幸いである。殺されて屍しかばねを荒原に横たえ、魂を無漏むろの世界へ運んだ方が安楽で、傷ついて助けのない道を、のたり行く者の苦痛とは比較になるまい。

誰か通りかかる人はないか。通りかかって、このあわれな負傷者をいたわってやるものはないか。いたわってやる余裕と勇気がなければ、せめて遠くから、その方角を教えてやれ。この男は時々、真直ぐな道をさえ間違えて、草原に迷い入り、南北をわすれてしまふではないか——傷ついたのでみならず、彼はもう、眼が見えなくなっている。

ああ、この痛々しい足どり——だが、今となつては誰を怨うらもうようもあるまい。十種香の謙信でさえが、「塩尻までは陸地くがじの

切所、油断して不覺を取るな」と戒めているではないか。

しかしながら、世間のこと、他の羨望せんぼうするほど気楽でないこともあれば、他の同情するほどに苦痛を感じていないこともある。

この男はこれが商売です——商売という語ことばが目ざわりならば、生存の意義とでも、遊戯とでも、なんとでもいつて下さい。江戸の市中にある時は、これを夜行なつたから誰も見たものがない。今は白昼——よし灰色の空であつても、その裏には白日のかがやくところにおいて、おなじことをくりかえして、おなじように引上げるだけのものです。

ただ今日のは、白日荒原の上、十方碧落なきのところ、前後左右に敵を引受けた無謀と、それに相手が相当の代物しろものだけに、その勝負の程度が問題になるので、現在こうして、歩いてゐる

以上は、とにかく、生命に異状はないらしい。だが、或いはまた、勝負は多勢に無勢の当然の結果を踏んで、その魂だけが、こうして浮びきれない荒野を、さまようて歩くのかも知れない。

それにしても仏頂寺弥助はいずれにある。三谷一馬はどうした。高部弥三次はいかに。また丸山勇仙はどこへ行つた。

それらの者の影は、一つもこの荒原の上に見えないではないか。

まさか、四人が四人、枕を並べて、屍しかばねを草深いところに横たえてもいまい。

では、逃げたか——或いはまた勝つて再び立場たてばの五条源治へ引上げ、そこで祝杯を挙げてでもいるのか。

ともかくも、荒野にただ一人、机竜之助の姿は、蹠そうそうろうろう々跟々として歩み且つ止まり、この世の人が、この世の道をたどるとは

思えない足どりで、それでも迷わんとして迷わず、さして行くところは、い、の、じ、ヶ原の一軒家。

そこへたどりついて、戸をホトホトと叩きました。

荒原にざわざわと風が吹き、草も、木の葉も、一様に裏を返したのはその時。

締めきつた戸を、外からホトホトと叩かれた時、まず鉄砲を持った主が、ワナワナと慄え出してしまいました。

この鉄砲というのが、慶長以後、島原の遠征に一度参加して帰ったという履歴付きの代物で、最近においては、塩尻附近の猪追いに持ち出して成功した記録があるので、主も自信のある品にはなっていました。この時は、どうしても目当がつかないのみならず、五体が上下に動き出して、その鉄砲を支えられないという有様です。

えものえもの
得物得物を持った駕籠屋と馬方は、土のようになって、へたへたと土下座をきつてしまいました。

「久助どの、久助どの」

外では、続いてホトホトと戸を叩き、低い声で人の名まで呼んだのですが、こちらの守備兵の耳ががんと鳴り出して、それを聞き取れなかつたと見えます。

「テ、テ、テッ砲だぞ！」

あるじと主が叫び出したが、自分で何をいい出したかわかつてはいま
すまい。鉄砲の銃口が無暗つぐちに上り下りして躍っています。

すると、外では、やや間まを置いて、

「お雪ちゃんはいないか……ともかくもここをあけて下さい」

「ナニ！」

まだがんととして、何が何だかわからないで、居たり、立つ

たりしていると、程遠からぬ裏の物置にいたお雪と久助との地獄の耳にそれが届きました。

「おや？」

久助の胸に固くなっていたお雪が、まず聞き耳を立てると、久助も、

「あの声は？」

といいました。その時、表で第三度目の戸をたたく音――

「誰もいないか、久助どの、お雪ちゃん」

それでまさしく合点がゆくと共に、二人は重しにかけられた千貫の石が、急にハネのけられた気持がしました。

「先生が戻って来ましたよ」

「たしかに、そうでしたよ」

二人が、はじめて立ち上ると、その時、またも表でホトホト

叩き、

「ともかくも、ここをあけて下さい」

久助とお雪とは表口へ走り出しました。島原遠征の鉄砲が、漸く手の上に納まったのもこの時であります。土下座をきった駕籠屋、馬方が、生氣いきを吹き返したのもこの時で、

「誰だい」

「そこへ来たのは誰だい」

お雪が早くも戸の傍へ立つて、

「先生ですか！」

「ああ、いま戻りました」

戻ったというのは、地獄から戻ったのか。その声は、たしかに地獄から響いて来たもののような声です。そうでなければ、自分たちが地獄から解放されたような心持で、従って、外なる

人の言葉が、まだ地獄の底に救われない人の声のように聞きなされるのでしよう。それでもお雪は、ふるえつくように戸へ手をかけて、

「先生、ほんとに御無事でしたか、お怪我はなさいませんでしたか」

いきなり戸をあけようとするから、久助が心配して、

「まあ、お待ちなさい」

あるじ主と、駕籠屋、馬方は、油断なく万一に備える心持で、まだ得物えものを手放さないでいると、

「大丈夫ですよ、それほど用心しなくとも。たしかに先生の声ですもの」

といって、お雪が戸をガラリとあけましたが、あけて後、失神したもののように驚いて、後ろへさがりました。

「まあ……あなたは」

そこに、たしかに竜之助が立っているには立っていませんけれど、その人は血をあびて、手には白刃を提ひきげて立っています。無事で帰ったというよりは、殺された魂魄たましいが煙の如く立ち迷うて、ここへ流れついたと見るのが至当かも知れない。

十五

一方い、のじ、ヶ原を再び後へ戻ったところ、峠の上の立場たてば、五条源治の茶屋は、この時、上を下への大騒ぎであります。

それはほかでもない、ここへ、さい、ぜん、出立した四人が舞戻つて来たからです。しかもそのうちの二人の者が、血に染みた二人の者をおかつぎ込んで来たからであります。

丸山勇仙は高部弥三次を肩にかけ、仏頂寺弥助は三谷一馬をひきせお引背負つて、この茶屋へかけ込みました。

それによつて見ると、負傷したのは二人で、負傷しないのが二人。負傷の程度はドノ位か知らないが、二人とも、身動きもできないのを、ともかく、応急の血どめをして、ここへ担ぎ込み、仏頂寺弥助は、はげしく店の者を追いまわして、蒲団ふとんの上にゴザを敷いて、ともかくも、その上へ二人の負傷者を横たえる。丸山勇仙は刀の提げ緒を取つて襷たすきにかけ、

「亭主、大急ぎ、焼酎しょうちゆうと畳針を心配してくれ、それに麻糸まいとと晒さらし」
といいつけるのを仏頂寺弥助がおつかぶせて、

「なければどこぞ近いところへ人を走らせて、焼酎と畳針と、それから麻糸に晒……この傷を縫い合わせるのだ」
とわめきました。

そこで、顛倒てんとうして店のものが、また大騒ぎで、家中を探しにかかると、いいあんばいに、焼酎はかなり豊富に蓄しえられてあるし、麻糸も人間を縫う程度には蔵しまわれてあつたし、少々、錆さびてはいたけれども、相応の畳針まであつたのを取揃えて差出すと、

「有難い、誂あつらえむ向きの品が全部そろつていた」

丸山勇仙は、焼酎の壺を取り上げました。この男は医術の心がけがある。そこで、負傷者のために、救急療治として、その傷口をまず焼酎で洗い、次にこの畳針で縫い合せの手術にとりかかるのは心得たものです。仏頂寺弥助は、それに介添かいぞえとして働き、かなりの時間を費して、ともかくも、二人の傷を縫おい了つて、体中を、晒ですっかり巻いてしまつてから、

「仏頂寺、いつたいこれはどうしたというものだ」

と丸山勇仙が、仏頂寺弥助にたずねると、

「おれにもわからない」

仏頂寺弥助は、投げ出したような返事。

「あれは、いつたい、ほんとうに盲目めくらなのか」

丸山が重ねてなじると、仏頂寺は、

「本物らしい」

「してみれば、君たち三人が、まとまって、ついに一人の盲人のために不覚を取ったという理窟になる——いや、理窟ならまだいいが、現実この通りの始末。剣術というものは、本来、それほど段のあるものか」

「ううん、それをいわれると面目めんぼくないが……」

と仏頂寺弥助はうなり出して、じつと考え込んでいたが、

「術には、さほどの相違もあるまいが、出ようが悪かったのだ」

「出ようが悪い——それは向うのいうことだろう、向うは眼が見えないのだぜ」

「眼は見えないけれども、あれは心得たものじゃ、真劍の立合では神しんに入いっている、まさに驚くべきものじゃ」

「盲目で……」

「眼のあいた奴の仕事はたいてい見当がつくが、眼の見えない奴の構えは測ることができない。一時いつとき、おれは、あいつの構えを見て、ズウツと骨まで寒くなつたよ。その瞬間だ、出てくれない、引寄せられられたのだ。そこで案の如く斬られてしまった。出たのじゃない、引寄せられられたのだ。そこで案の如く斬られてしまった。あれは眼のあいた奴にはできない芸当だ、あの引寄せる力がめあきにはない。おれも今までずいぶん、命知らずと戦つた、また千葉の小天狗栄次郎殿や、練兵館の歎之助殿（斎藤弥九郎の

次男歡之助、弱年にして鬼歡おにかんの名を得たりは怖ろしい相手だ
と思うが、それは怖ろしくとも眼があいている」

「めあきは不自由なものだと、塙はなわけんぎよう検校が言つた」

丸山はカラカラと笑つたが、仏頂寺は浮かない。

また一方、この日の朝まだき、下諏訪あきのみやの秋宮の社前は、まが、

いものの鹿島の事ことしおれ触が、殊勝らしく、

「さて弘ひろめまするところは神慮しんりよかみごと神事なり、国は坂東ばんとうの総社常陸ひたち

の国、鹿島大神宮の事触れでござる。さて鹿島大神宮の一年の

御神事ごしんじは、七十二度の御神事、七度の御祭礼とござつて、いき

が、い、おきどり、湯ゆためし様の御神事と申して、一天地のようだいを

申してまかり通る。当年はすなわち天に陽明とござつて、日照ひでり

が六分……」

七ツさがりに、その日の先触れをするような文句を唱えながら、通りかかって、あつと面かおの色を変えました。

というのは、その社前の立木を汚けがして、一人の女が縊くびれていたからです。

鹿島の事触は、これを見ると立ちすくんで、大声をあげて人を呼びました。

そこで、忽たちまち人が集まって、その縊くびれっ子を調べてみると、それはこの温泉駅では誰も知っている物売りのお六でありましたから、いつそう騒さわぎが大きくなりました。

そこで、評判と臆測が、たちまち町中いっぱいにひろがりました。

あの愛嬌者が、どうしてこんなことをしでかしたのか。孫次郎の宿で聞いてみると、昨晚遅く目の色を変えて飛び出したの

が変だとは思つたが、それはお万殿の時刻までにと、大あわてにあわてて、自分の家へ帰つたのであろうとばかり思つていたが、そういわれると思ひ当ることがないでもないといつています。

しかし、この女が、縊れて死なねばならぬ事情というのは、誰にも、どうしても思ひ当らない。竹細工師で情夫とも御亭主ともなつてゐる、氣のよい男をただしてみても、いっこうあたりがつかない。そこで、当然、魔がさしたのだ、その魔がさしたのは、いま、めを忘れて、お万殿のお詣りの時間を犯し、その怒りに触れたために、この始末だろうという説が最も有力であります。

死骸は一通り検視を受けた上に、ともかく、間近の孫次郎の宿の一室へ引取られて、そこへ静かに横にして置きますと、ちよ

うど来合わせた巫女いちこがあります。宿の女中たちは、巫女を呼んで、この女のために口よせを頼み、その非業ひじょうの魂をやわらげると共に、無告むこくの訴えを幽冥界から聞こうとしました。巫女は心得て、櫛しきみの葉に水を手たむ向けて、あずさの弓を鳴らし、

「そもそも、つつしみ、うやまつて申したてまつるは、上かみに梵天ぼんてん帝釈たいしやく四天王してんのう、下界えんまほうおうに至れば閻魔法王……」

もつともらしく神おろしをはじめたが、時が時でしたから、笑う者がありませんでした。

この口よせのいうことは、一向とりとまりはないが、その文句のうち、「口惜くやくしい悲しいで気がとりつめ」とか、「この魂が跡を追いかけて引き戻してくる」とか、「東は神宮寺、西は阿礼あれの社やしらより向うへは通さぬ」とか、髪をふり乱し、五体をわななかせ、油汗を流して、呪わしい言葉を口走っている。それ

を正直に女中たちは、身の毛をよだてて怖れている。その時どうしたのか、急にこの席を外してはず立つたのが、この宿の番頭で、まっくろい面をかおしながら、うろたえて帳場へ戻つて坐り込んだが、落着かないで、物につかれたように眼を据すえている。

昨晚、女が血相変えて飛び出したのを、留めてみたのもこの番頭で、あの前後のことをうすうす知っているから、只今の巫女いちこの出鱈目でたらめがこの上もなく気になつて、席に堪えられなくなつたものと見える。

番頭がぼんやりして帳場へ坐り込んでいるところへ、今朝早立ちをした仏頂寺弥助が先に立ち、後ろには戸板に人を載せて人足に担がせて、ドヤドヤと店頭みせさきへ入り込み、

「塩尻峠の上でちつとばかり怪我をしたから戻つて来た、また厄介になるぞ」

番頭は、この時、面色めんしよくが土のようになり、よく戻っておいでになりましたともいいませんでした。

十六

さてまたここは江戸の下谷の長者町。道庵先生は何を感じたものか、俄にわかに触れを廻して、子分のならず者や、近処のワイイ連を呼び集めました。

何事ならんと馳はせ集まつた者共を前に置いて、先生は薬研やげんの軸しゃを斜しやに構え、

「皆様、早速お集まり下さいまして……」

先生としては、極めて鄭重ていぢゆうな物のいいぶりでしたから、集まつたものが、少し様子が変だと思いました。

変だと思つたのも無理はありません。こういう場合において先生は、いつも野郎共呼ばわりをして傍若無人に振舞うのに、今日に限つて、皆様だの、お集まり下さいましてだのと、改まり方が急激でしたから、集まつたものも、あんまりいい気持がしませんでした。

けれども、何か、先生も急にほっしん発心したことがあればこそ、この殊勝に改まつたものに相違ないと思うから、みな、神妙にうけたまわつておりますと、先生はおもむろに、

「さて、皆様、実は拙者も、近こごろ悟るところがございまして、皆様の前で、今までの非を改めると共に、今後をお約束致しておきたいことがあるのでございます、それでお忙がしいところを、かくお集まりを願つた次第で……」

来会者が、いよいよオドカされてしまいましたけれども、先

生はいつこう頓着なく、

「ええ、皆様も御承知の通り、拙者もこれで医者の端くれでございませうが、医者は医者でも、ただの医者だと思つたと了見りようけんが違います」

「違えねえ」

そこへ、クサビを打ち込んだのが、一子分のデモ、倉でありました。道庵先生は氣取つた面かおをして、デモ、倉の横顔いちべつに一瞥いちべつを与え、

「近頃の医者は、みな、学問も出来れば技わざも出来、従つて知行もたくさん取り、薬礼の実入みいりも多分にあり、位も高くなるし、金も出来るのに、哀れやこの道庵は、今も昔も変らぬ、ただの十八文……」

といつて先生が、ホロリと涙を落しました。

「泣かなくなつたつてもいいやな、先生、先生も酔興でやつてるんだらう」

慰め顔に弥次をとばしたのが、やはりデモ、倉であります。先生は、それに力を得て、

「ツイ愚痴が出まして、まことにお恥かしい次第でございます。ただいま、申し上げる通り、当節のお医者、皆学問も出来れば、技わざも出来、従つて知行も沢山取り、薬礼みいりの実入も多分にあり、位も高くなるし、金も出来るのに……」

「先生、わかつてるよ、そうくりかえして愚痴をこぼしなさんなよ、了見を見られちまうじゃねえか」

忠義なる子分は聞き兼ねて、先生に忠告を与えても、先生は顧みる色なく、

「知行もたくさん取り、薬礼の実入も多分にあり、位も高くな

るし、金も出来るけれども、いい子供が出来ねえ」

といい出しましたから、一同がまたキョトンとした顔です。そうすると、悄しよげ気げていた道庵先生が少しくハズミ出して、

「さあ、そこへ行くところの道庵なんぞは大したもんだぜ。林子平りんしへい

じゃねえが、親もなければ妻もなし、妻がなけりやあ子供のあるう道理がねえ。板木はんがねえから本を刷つて売ることでもできねえ。この通り。ピイピイしているから金なんぞは倒さかさにふるつたつて出て来ねえんだ。だから、まだなかなか死につこはねえよ、安心しろよ」

ここで見事に脱線してしまいました。初めは処女の如く、終りは酔漢の如く、すっかりボロ（ではない生地きじ）を出してしまつたのはぜひもないことで、こう来るだろうと思つているから、聴衆もさのみは驚きもしません。

しかし、先生はまたあらたまつて、薬研やげんの軸を取り直し、真面まがおになつて、

「ところで今日、こうしてお集まりを願つたのは、余の儀でもございませぬ、さいぜんも申し上げる通り、拙者も近頃、つくづく自分の非を悟つた点があるのでゲスから、その点を皆様の前で改めると共に、一つのお約束を致しておきてえんだよ」

おきてえんだよ……が少し納まらない。

道庵先生ほどのものが、自分の非をさとつて、それを公衆の前で懺悔すると共に、且つ、今後の実行に現わして約束をしようというのは、よほどの道徳的勇氣がなければできないことです。

けれども、ここに集まっているや、からに、道徳的勇氣なんぞの呑込める面つらは一つもないのであります。ないからといって、

先生は少しもそれを輕蔑するよふぜいうな風情はなく、諄々じゆんじゆんとして説きはじめました。

「その昔、奈良朝のころに、帝みかどの御病氣のお召しにあずかつた坊主で、医者いしやを兼ねた何とかいう奴があつたが、車に乗せられて帝の御所へいそぐ途中に、見るもあわれな乞食が路傍で病氣に苦しんでいたものだ、それを件くだんの、坊主で医者いしやを兼ねた奴が見ると、車から飛んで降りて、その乞食を介抱して、とうとう帝のお召しをわすれてしまったという奴がある……とところでまた、おれの先祖には、お百姓の病氣を癒なおしても十八文、二代將軍の病氣を癒しても十八文しきや藥札を取らなかつた奴がある」といい出すと、氣の早いデモ倉が、

「取れる奴からはウンと取つて、ちつとはこつちへ廻してくれたらよかりそうなものだ、よけいな遠慮じゃねえか」

この差出口には道庵先生がハタと怒つて、

「馬鹿野郎」

と一喝いつかつを食わしたが、急に我と我が唇のあたりをつねって、

「それがいけねえのだ、この口が……ところで、よく考えてごらん、病人と、医者と、薬はついて離れねえものだ、病人がなければ医者はいらねえ、病人があり、医者があつても、薬がなければ飲ませることもできねえ、つけてやることもできねえ」

「先生！ 馬鹿につける薬はねえつていいますぜ」

「デモ、倉様、お前、今日はまあ少し黙つていておくれよ、おれも今日はしらふで話してるんだからな」

さすがの道庵も、デモ、倉のやかましいのに我がを折つて妥協を申し入れると、デモ、倉もやむなく沈黙しました。

「さて皆様、よくお聞き下さりましょう、ただいまも申し上げ

た通り、病人と、医者と、薬の三つは、切つても切れぬもので、つまりこれが三位一体さんみいつたいというやつ……それで病氣びいきというやつは、とりついたが最後、貴賤上下の隔てはねえ、北辰位ほくしん高くして百官雲の如く群がるといえども、無常の敵きたの来るをば防ぎとどむる者一人もなし、と太平記に書いてある」

「なるほど」

これは弥次ではなく、豆腐屋の隠居が思わず発した感嘆詞でありました。道庵は言葉をついで、

「そこでまた薬というやつが、苦にがいのもあれば辛からいのもあつて、百味の箆たんす筒すずにちやんと納まつているが、いぎ、人の腹中へ行つて働はたらきをしようという場合には、すべて平等一味のもので、こやつは店賃たなちんを払はらわねえから利きいてやらねえの、あれは付届ひいきふんけがいいから鼻ひいきふん屑ふん分ぶんにしてやれとはいわねえ……」

「左様でゲスとも、薬と差配のハゲと一緒にされちゃ堪らねえ」
道庵先生は、それを耳にも入れず、

「だから、医者というやつも、貴賤貧富によつて、匙加減さじかげんがあつてはならねえのだ……」

といつて、ソレから自慢をハジメたり、ひとをコキおろしたり、
大気焰を上げましたが、結局今日の集会の要領は、今まで自分
は十八文を標榜ひょうぼうして、貴賤上下に、この医術に基づける平等説
を實行しているが、まだ人間を差別的に見る癖があつて、まこ
とにお恥かしい次第であると気がついたから、今後は徹底的に
それを實行するではじめとして、まずすべての人を軽蔑しない
意味において、今までのように、野郎や、貴様呼ばわりを全廃
し、誰人に向つても「様」という字をつけて呼ぶことにするか
ら、左様心得てもらいたいという言い渡しでありました。

初めに処女の如き「皆様」の様づけも、多分その辺から出たのでしよう。

道庵先生の説によると、医者としての自分の職掌上、病氣や薬と同格に、すべての人を待遇しようという好意に出でたのはちがいないが、これを実行に先立って発表してしまったのは、少々逸はやまったようです。

果して、さまざまの弥次や、質問や、難題が続出しましたけれど、先生は少しも撓ひるまず、最後までそれを説伏するの意気込みは勇ましいもので、自分にしてからが、上様だとか、公方くぼう様だとかい口の下から、現在自分が世話になっている大切の薬籠やくろう持もちに対しては、国公だの、この野郎だのと、頭ごなしにやっていたのは、相済まないわけである、今後は上様、公方様、殿様、爺様、婆様、おびんずる様並みに、国公を呼ぶにも国公様を以て

する——門弟の道六に対しても、子分のデモ、倉、プロ、亀らに対しても、お出入りの馬鹿囃子に対しても、野の幫だ間いの仙公に対しても、その通り、例外というものがあつては平等が意味をなさないと、スバラしく気焰を揚げたものです。すると物もの和やわらかな豆腐屋の隠居が、

「先生、それではいかがでゲスな、物の本に出ております昔の英雄、豪傑といったような者も、みな『様』づけでお呼びになりますか」

「そうだと、無論のことだ、英雄、豪傑というものは神様の次だ」

「そう致しますると先生、弓削道鏡ゆげのどうきょうさま様が和氣清麻呂わけのきよまろさま様を……」

「そうだと」

「楠正成様が足利尊氏様に亡ぼされ……」

「その通り」

「曾我の兄弟様が工藤祐経様くどうすけつねさまをお討ちになつた……」

「それに違いないじゃねえか」

「太閤様のところへ、石川五右衛門様いしかわごえもんが盗賊にお入りになつた……」

「そうだともし」

「それじゃ先生、どちらがいい人間だか、悪い人間だか、わからなくなつちまいますね」

「べらぼう様、天のような広い心を持って。天は悪い奴にも、いい奴にも、おなじように日を照らせたり、雨を降らせたりする」
先生の気焔が、いよいよあがつて、ものやわらかな豆腐屋の隠居では受けきれなくなりましたから、デモ、倉が代つて出ました。

「そうすると先生、たとえば芝居を見にいつてもですね、団十郎様が由良之助様をおやりになつたとか、九蔵様の実盛様を拜見して来たとかおつしやるんですか」

「そうだと。第一、役者だからといって、横町のおちや、つび、いまでが呼捨てにするのは怪しからん、氏とか、様とかつけるべきものだ。昔は女寅閣下という名を使つたものさえある」

そこで、芸名を呼ぶに様をつけて敬意を表する以上は、芸妓にもそれを適用しなければならぬし、遊女の源氏名にも無論、様をつけて呼ばなければならぬ理窟になる——それでは、知らぬ面の半兵衛とか、来たり喜之助とか、川流れの土左衛門とかいふものに対しては、どうです——という奇問に対しても、先生は少しも驚かず、いやしくも、人格を表明した存在物には、有名であろうと、無実であろうと、そこに区別を立てるような

ことがあつてはならぬと主張し、最後に、

「さあ、そこでもし、これから後で、愚老が、かりにも人様を呼ぶのに様づけを忘れた場合には、それを一番先に見つけ出したお方様に百ずつ進上する、軽少なから百ずつ……」

といい出しましたから、子分たちは勇みをなして喜び、いつか先生の尻尾しっぽをつかまえて、百の罰金をせしめてやろうと、腕により、をかけました。どのみち、ひっかかるにきまつている。思えば先生もツマらない約束をしたものですが、先生としては大得意で、天晴れあっぱの名案を考えたつもりで、やがてこの席を終り、薬籠持やくろうもちの国公を伴つて、都大路をし、やならし、やならと歩み出しました。

宇治山田の米友は、このごろ深刻に苦しんでいます。

死というものに初めて直面した苦しみを、まとも、に受けて、八百長なしに取組んでいるのですから、その苦しみは慘憺さんたんたるものであると共に、名状すべからざる奇観です。

米友といえども、死というもののこの世（或いはあの世との境）に存在することを、いま初めて知ったわけではありません。今更、足もとから鳥の飛び立ったように、「死」というものに驚きさわぐのは、滑稽なようですけれども、「死」の存在を知って、その来る瞬間きたまでそれを怖るることの少ないのは、多くの人間の常であります。

「今までは人のことだと思いに、おれが死ぬとはこいつたまたまらぬ」——死の来る目前まで、舞踏歓楽し、死の直面に來つて、

はじめて恐怖狼狽する人間の通有性を、米友もまた御多分に漏れず持ち合わせていればこそ、こいつ、たまらぬと噪ぎ出したのか知ら——いや、当人はピンピンしている。まだたたき殺しても死にそうもない体格に、ゆるみは来ていない。事実、この男は一度も二度もたたき殺されているのだが、容易に死なない。今もまだその通りで、おれが死ぬとは思っていないが、死というものが、見るもめざましく眼前に押寄せて、自分を窒息させようとしているのに、それにまともにもぶつかって、周章狼狽しているのです。

壁を穿つて海を発見したように、土を掘って天を見出したように、お君というものに死なれて、そこから涯と底との知れない冷たい風が、習々として吹き出したのに、米友は、恐れ、あわて、おどろき、悲しみ、憂えて、名状すべからざる奇観にお

ちいつているのであります。

そうして、なお悲惨なのは、米友にあつては、この苦痛をまぎ、
らかす手段のないことであります。真正面からその苦痛と戦つ
て、直接に解決が終るまでは、一時何かの魔睡によつて、その
神経を眠らせておくといふことのできない男であります。

その夕方、伝通院の墓地にまぎれ込んだ米友は、墓地の中を
あてどもなしに歩き廻つて、しきりに墓を動かしてみました。

伝通院は家康の生母水野氏の廟所。びょうしょそこには徳川氏累代の貴

婦人の墓が多い。或いは無縫塔、或いは五輪、或いは宝篋印、ほうきょういん高
さは一丈にも二丈にも及ぶものがあつて、米友の怪力を以てし
ても、ちよつとは動かし難いものばかりであります。

しかし、この男は、それらのいずれともつかずに、しきりに
それをゆすり試みて歩いている。その様、墓を動かして、そこ

から何物をか聞こうとするもののように見える。

「墓はこの世からあの世へ通ずる道の蓋である」と誰やらが教えた。さればこそ、この男は、蓋を開いてあの世の人のたよりを聞きたがっているのだ。

ほどなく米友は、非常に大きな五輪の石塔の前に立っている。石塔の高さは台石ともに二丈もあろう。碑面の文字は、模糊たる暮色につつまれて見え、米友は、呆然として腕組みをしなから、立ってその石塔をながめていると、

「友さあん、この石を取って下さいな、この石があんまり重いので、出ることができませんわ」

米友はハッと自分の耳を疑いました。今の声は果して墓の底から出た声か、それとも自分の耳から出たのか。

「え、何といった」

米友は両手を耳に当てて、屹きつと五輪の塔の空輪くうりんの上をながめていると、

「この石を取って下さい……この石さえなければ、友さんとわたしと自由に話ができるんですけれども……この石が一つあるばかりで、お前とわたしとは世界が違うんですから悲しいわ、どうしても会えない別々の世界にいるんですもの……」

米友はその声を聞くと、その声の起った自分の耳朶みみたぶを搔かきむしって地団駄じだんだを踏みました。

程なく、宇治山田の米友は、その巨大な五輪の石塔の上へよじ上りのぼ、力を極めて、その空輪を動かすはじめました。

いうまでもなく、この男は、生と死との間をさかいする蓋ふたに手をかけて、これを取り除こうとあせり出したものと見える。で、その次の世界から聞える声を、この世で聞こうとあこが

れているにちがいない。

こういう挙動を笑うものは、まだほんとうに死というものの哀切を、味おうた経験のないものであります。

かりに諸君のうち、その最愛の子女の一人を、失ったものがあるとしてごらんなさい。現在自分がその最後の病床から、野辺のおくりまで見届けても、なお途中で、それによく似た年ごろ^{かつこう}恰好の子女にであつてごらんなさい、われ知らず前へまわつて、その面^{おもた}立ちを見定めなければ立去れないことがある。死というものが万事の消滅だと事実が証明しても、空想がそうは信じさせようとしません——しかも、人生のことは空想が大部分で、人は事実生きるよりは、むしろ空想に生きているのであります。

聖人は空想と事実とをよく統一する。狂人はそれを混同する。

凡人は、その間に彷徨かんして醒ほうこうめたるが如く、酔えるが如し。

さてここに、宇治山田の米友に至つては、空想と事実との境界が、ほとんど判然しない。この男は人間のこしらえた差別線と高低線に対しては、先天的に色盲のような男で、どうかしてその線にひつかかると、眼の色を変えて怒り出す。この男の怒り方は、反抗的、或いは相対的に怒るものではありません、先天的に怒るのであります。とはいへ、この男を狂者と見るには、あまりに道義的で、同時に常識的のところがあります。

今や、不幸にしてこの男は、人生の水平線がわからなくなつていようように、死と生との分界線がまたわからなくなつているのであります。死が万事の消滅だと信じきれなくなつているのであります。ああ、この何千貫の石の蓋は、かよわき女性のためにはあまりに重い。この蓋あるがゆえに、魂がこの石の下で

呻うめき泣ないでいる。

我々にとつて、この重し、というものはかなりにこたえる。死して後にこたえるのみならず、生ける間にこたえていた。我々凡人は、単に生れどころが悪かったというだけの理由で、ずいぶん、意味のわからない重しを、かけ通しにかけられて来たようである。おれはまだ生きているし、おれの身体は小さくとも、まだまだ充分その重しに堪えられる力はあるつもりだが、お君は死んでしまった。死んで後までもこんな重い物をかぶせて、魂ゆづめいを幽冥の下までも咽むせび泣かしむる人間というものの仕しわざ様の、愚劣にして残忍なることよ。

そこで、宇治山田の米友が、高さ二丈を数える巨大な五輪塔の上によじのぼつて、その風ふうだい大の上に足をふまえて、頂上の空輪を取つてのけようとする努力には、彼の持つているあらゆる

力が一時に加わりました。

前にいう通り、この五輪の石塔の主ぬしの何者だということとは、碑面にはまさしく銘きぎんではあるが、暮色もく模糊こたるがために、読むことができなくなっていました。米友としてはこの墓地は、伝通院殿をはじめ、多くは徳川氏系統の貴婦人の墓を以て充たされているということだけの予備知識はあつたのですから、無論、この塔も、さるやんごとなき婦人たちの石塔の一つに相違はないと思つていたのが、いつか知らず、お君の墓ということになつてしまつていました。

伝通院殿——なにがしの高貴なる婦人——高貴ならざる婦人——同時に一般の婦人——ただ一人の婦人——お君——虐しいたげられたる女——それが今この重しにかけられている。

そこで米友の力には、虐げられた女性のために、一つにはこ

の圧抑あつよくを除き、一つには幽冥の境を撤去開放しようという勇猛力が加わりました。

そうしてこの男は、双の腕に満身の力をこめて、満面に朱をそそぎ、五輪の塔の空輪をグラグラと動かししました。

この怪力を以てすれば、空大くうだいを頂上から揺り落すことはできるかも知れない。それが成功すれば、次は足場あしだいを二段下ろして、風大ふうだいを揺り落とし、その次は火大かだい、その次は水大すいだい、最後に地大ちだいを揺り動かして、かくて夜明けまでには本来の大地に、生身しょうじんの心耳しんにをこすりつけて、幽冥の消息を聞くことが必ずしも不可能とは思われません。

ただ、迷惑千万なのは、五輪塔自身で、安政の地震にさえ何の異状もなかつた身が、今晚になって、突然上の方から沙汰なしに取崩されようとする運命を、おどろき呆あきれて手の出しよう

もない有様。しかし、自分をこうも無茶に取崩しにかかる身の程知らずの運命をも、やがてまた哀れむべきものだと、内心気の毒がってもいるらしい。

全く、その通りで、たとい取崩しに成功してみたところで、やがてその身に報い来る咎きたとがを思えば、空怖そらおそろしいものがある。頼山陽の息子は、寛永寺の徳川廟前の石燈籠いしどうろうを倒して、事面倒になつたことがあります。それは酔つていたということではあり、なんにしても石燈籠のことで、謝罪で事は済んだ。けれどもこれは徳川宗族の墓地を荒して、その霊を辱はずかしめたということになると、非常にあぶないが、無論、米友は、それを考えてはいない。それを考えては、またこんなこともできない。また、この際、そんな前後を考えている余地のあるべきはずありません。

「友造さん」

「エ？」

もう一息、空大を押しきろうとする時に、米友はその手を休めて、あわただしく塔下の前後左右をながめました。まさしく自分を呼ぶ声があつたからです。

「友造さん、まあ、そこで何をしているの、そんなところで……」
「あ、お婆さんか」

米友が塔の上から腰をかがめて、塔の周囲に建てめぐらした石の玉垣の入口で見つけたのは、絵にある卒塔婆そとぼこまち小町が浮き出したような、白髪はくはつのお婆さんであります。

「ああ、わたしだよ、ほんとうに、びつくりさせるじゃありませんか。なんだって今時分、そんなところへのぼって何をしているんです」

「あ、あ……」

米友が呆然^{ぼうぜん}として円い眼を瞬^{まばた}きをして、初めて暮色の暗澹^{あんたん}たるにおどろきました。

「第一、お墓の上へのぼるなんて、勿^{もつ}体^{たい}ないことですよ」

「ううん」

「それは天樹院様のお墓ですよ、早くおりておいで……」

「ううん」

米友は、そこで円い眼をみはって、うん、とうなりました。

「早くおりておいでな、天樹院様のお墓の上へのぼって、何をなさるつもりなの」

卒塔婆小町の浮き出したような白髪の婆さんは、やさしく米友をたしなめると、

「エ、これが天樹院様のお墓か？」

塔の上で米友が叫びました。

そうそう、これほどに暮色がせまつていないならば、米友といえども、文字のある男だから、向う正面を、じつと見上げて立っていた時に、碑面にしるされた文字——

「天樹院殿

栄誉源法松山

大禅定尼」

が読めなかつたはずはない。側面へまわれれば「寛文六年二月六日」の忌日きじつの文字までも瞭々りょうりょうと見えるはずであつたのに——

二代將軍を父に持ち、豊臣秀頼を夫として、大阪の城に死ぬべかりし身を坂崎出羽守に助けられ、功名の犠牲として坂崎に与えられるべかりしを、本多忠刻ただときと恋の勝利の歓楽に酔つて、坂崎を憤死せしめた罪多き女、その後半生は吉田通ればの俚謡りようにうたわれて、淫蕩いんとうのかぎりを尽した劇中の人、人もあろうに

宇治山田の米友は、この女のために、無用の力を絞っていました。

十八

両国橋の女おんななかるわざ軽業の親方お角は、その夕方自宅へ帰つて来ると、早くも家の様子でそれと知つて、齒ぎしりをして口く惜やしがつたのは申すまでもありません。

「ちえッ！」

と男のするように舌打ちをして、二階へ上つて見る気にもならなかつたのです。

「わかつてる、わかつてる、知恵をつけた奴はわかつてるよ、何かにつけてケチをつけたがるあのおたんちんめ、どうするか覚

えていやがれ」

とののしつたのは、当のお銀様のことではありません。また、お銀様に向つてよけいなことを喋しやべった金助のことでもありません。お角はそれを通り越して、いちずに向つてゐるのがお絹のことです。こうしてお銀様を逃がしたのは、てつきりお絹の指金さしがねにちがいないと、いちずに思い込んでしまいました。

もとより、これは前例のないことではない。いつぞやも、せつかく人気を集めた清澄の茂太郎を中途からつかつぱらつて、こちらに鼻を明かせたのもあいつの仕業しわざ。またしても、こんなこと。お角は、いつそあいくち匕首でも懐中して怒鳴り込み、刺し殺してやりたいほどに、お絹を憎み出しました。

お絹にとつてはいい迷惑で、お角が大事に保護（？）してゐるお銀様を逃がしたのが、お絹の仕業でないことは確かで、そ

れは間違ひなく金助というおつちよこちよいの、よけいなお喋りがもとであるけれども、お角が一時にそう恨みをかけるのも、日ごろが日ごろだからせひがないと申さねばなりません。また事実においても、もしお角がああしてお銀様を保護し、それを上手に利用することを知っていたなら、あの女は、きつと何か茶々を入れるくらいのことをやったのにちがいないのであります。

こうして、お銀様を逃がしたのは、いちずにお絹の計略だと思ひ込んで、怒鳴り込んで刺し殺してやりたいほどに腹の立つたお角も、そこはさる者だから、怒りに乗じてあとさきの見えないことをやり出しはしません。

「梅ちゃん、今晚から、わたし一人で二階へ寝るから、下はお前に頼みますよ、淋しければお勢ちゃんでも誰でもお呼び」

といつて二階の梯子はしごに足をかけると、お梅にはわからないから、「お嬢様はいらつしやらないのですか」

「ああ、お嬢様は今日からよそへおいでになつたんだから、あとは、わたしが引受けるのさ」

といつて、さつきと二階へ上つてしまいました。

二階へ上つて見ると、綺麗きれに取片付けてあるのがよけいに腹が立つ。机の上の置手紙のしてあるのも、見るのが癩しやくだ。

「わがままのやんちや者」

戸棚をあけて見てもかわつたことはない。お好み通りにととのえて上げた歌の本よみほん、読本よみほん、絵草紙の類まで耳をそろえてキチンとしている。

藤の花を一面にえがいた大屏風おおびようぶを引きのけて見ると、手ぎわよくたたまれた縮緬ちりめんの夜具蒲団やぐふとん。

「お嬢様という人も、お嬢様という人じゃないか、子供じゃあるまいし、出るなら出るところとわつてくださりや、いけないとはいいませんよ。ごらん、わたしたちはああして、下の方に、夜かぶりだつてなんだつて奉公人同様にして、お嬢様にはこの通り、何一つ不足という思いをさせて上げた覚えはないのに、いくらお嬢様だつて、あんまり義理というものを知らな過ぎませ
あ」

これほどにして置いて逃げられたかと思うと、お角の胸が、またむしやくしやくする。いきなり、その美しい模様の縮緬の夜具蒲団をズルズルと引張り出して、その上にゴロリと寝そべり、

「梅ちゃん、梅ちゃん、済まないが煙草盆を持って来ておくれ」
腹はら這いばになつて、お梅の持つて来てくれた煙草を二三ぶくのみました。

暫くすると表格子で、

「今晚は」

「どなた」

お、さ、ら、い、を、し、て、い、た、お、梅、が、返、事、を、し、ま、す、と、

「入つてもようござんすか」

「金助さんですか」

「ええ、その金助でございますよ」

「お入りなさいな」

格子戸をガラリとあけて入つて来たのは、金助に違いありません。

「梅ちゃん、親方は……」

「おかあさんはね……ちよつとよそへ参りましたよ」

「え、留守ですか。留守で幸い、梅ちゃんの前だが、親方は怒つ

「てやしませんか」

「いいえ、別に」

「金助の野郎、出入りを差止めるなんていいやしませんでしたか」

「そんなことはいいやしませんよ」

「それで安心……」

金助は大仰に胸を撫で下ろす真似をしながら、ソロソロと上り込みました。

この野郎も、おつちよこちよいのくせに、いいかげん図々しいが、それでも気がとがめるものがあると思えて、あらかじめ雲行きをうかがってから上り込むと、

「まあ、こつちへいらつしやい」

お梅は火鉢の前へ座蒲団をすすめます。

「へ、へ、これは恐れ入りやす。梅ちゃん、お一人でお留守はさびしいでしょう」

「ええ」

「お稽古は何ですか」

「でたらめよ」

「驚きましたね、でたらめのお稽古とは」

「金助さんの前でやると、ボロが出るからよしましょう」

「ト、トンでもないことで……どうか一つ綺麗なところを、お聞かせなすつて下さいまし」

「ははあだ、綺麗なところなんてあるものですか」

「御冗談でしょう、梅ちゃんも隅へ置けない、幾つになりました」

「知らない」

「梅ちゃん、あの福兄さんが、この間も、それ言つてましたよ、梅ちゃんの実が入つて、食べごろになつたけれども、これが怖いからうつかり傍へ寄れないつて」

金助が親指を出して見せると、

「ばかにおしでないよ」

お梅が腹を立てて突き飛ばす。

「こりゃア、ちと荒っぽい、まともに鉄砲を向けられちやたまりません、いくら金助がお粗末だからといつて、これでも男のはしくれ、罰ばちがあたりますよ」

「福兄さんに、それ言つて下さい、たべていただけがなくつてもようござんすよ、大切に漬けておいて、梅干にしますから困りませんつて」

「梅干はかわいいそうですね」

「かわいそうなことがあるものか、第一梅干にしておけば、土用を越したつてなんともないし、それに実用向きで……」

「あやまる、あやまる」

金助はしきりに頭を下げ、

「若い娘が梅干気取りでおさまっていりやあ、世話はないや」

「世話はありませんとも、梅干一つありやほかにおかず、なんか何も要りません」

「あれだ、手がつけられねえ」

金助はまたも額ひたいを丁ちようと打つて、

「冗談はさて置き、いつたい、親方という人は、今時分ドコをドウ、ろ、ついてあるいてるんだらう、人の気も知らないで……」

「今晚は帰らないかも知れませんよ」

「え、帰らない？ おだやかでありますな、ここへ帰らなけ

りやどこへ泊るんです」

「どこだか知りません」

「いい年をして、そう浮うわついてあるには困りますって、金助が腹を立てたって、帰ったらキットそういつて下さい……第一、こんな若い娘をひとり留守居に置いて家をあけるなんて、時節柄、物騒千万」

金助が減らず口を叩いて容易に帰ろうともしないから、お梅が迷惑がりました。迷惑がったところで、遠慮する人間ではなく、ずるずるべったり、泊り込んでしまうつもりかも知れませんが。

その時、二階でミシリと音がしたものだから、金助が例によって仰山ぎょうざんな身ぶりをし、

「おや！」

実は金助も、この時まで二階にお銀様のいる約束をわすれて、お梅にからかつていたのに、このミシリという音で気がまわり、
「お嬢様が二階においでなさるんでしたっけね」

「ええ」

「御機嫌はいかがです、あのお嬢様の」

「別にお変わりもございません」

「お嬢様もお一人で退屈でしょうね」

「どうですか聞いてごらんなさい」

「毎日、ああして、ひっ、そく、しておいでなさるのも、お大抵じゃ
ありますまい」

「お嬢様は出るのがお嫌いなんですから、仕方ありません」

「毎日、ああして、何をしていらっしやるんですか」

「歌をおつくりになつたり、本を読んだりしていらっしやいま

す」

「字学の方がお出来になるんだから、御不自由はないさ。お家はなかなかの大家なんですつてね」

「ええ、すてきなお金持だつていう話ですよ」

「ちよつと、お見舞に上つてみようか知ら」

「え……」

金助がお銀様のところへお見舞に行くといい出したので、お梅もいかげんの挨拶ができなくなりました。

「お見舞に行つてまいりましょう」

「およしなさいな、お気にさわるといけませんから」

「大丈夫、お嬢様の御信任は、このごろ一いっに拙者の上に集まつているんでゲスから……」

「それでも……」

「ついこの間などは、忠勤をぬきんでて、そつと申し上げてしまったものだから、もう今では一も金助、二も金助、さだめて今日もお待ちかねのことと存じます」

「金助さん、お嬢様に何を申し上げちまったの」

「イエナニ……」

「金助さん、お前、お嬢様によけいなお喋りをしやしないかエ」「よけいなお喋りなどをするものですか。何しろお嬢様もたよりのないお身の上で、金助さん頼みますとおっしゃるものですから、拙せつの気象で、ちよつとばかりお力になつてあげたまでのことですよ。以来お嬢様は、ことごとく拙をおたよりなさるんで、お気むずかしいのなんのといひますけれど、それは嘘です。どれ、ちよつと御機嫌を伺いに行つて参りましょう」

金助が立ち上つたので、お梅はおどろいて引留めようとした

が、また思い返すことには、あんまりいけぬ々しい男だから、このまま二階へやった方が面白かろうと考えました。二階に寝ているのは無論お嬢様ではない、親方のお角であります。お角と知らないでこの野郎がノコノコと出かけて行って、齒の根の浮くようなことを喋り出したが最後、イヤというほどとつちめられるに相違ない。これは素敵もない見物みものだと思つたから、お梅がワザと留めないでいると、金助の野郎は妙に衣紋えもんをつくろい、気取つたなりをして、二階へノコノコとあがつて行きました。

「金助さん、お嬢様のお気にさわつてもわたしは知らないよ」

お梅の駄目を押すのを、金助は聞き流して、

「どう致しまして。お嬢様、へえ、どうも御無沙汰を致しました、先日はまた大枚たいまいの頂戴物を致しまして」

洒蛙しやあしやあ洒蛙として二階へ上り込んで見ると、お銀様は縮緬の夜

具を、頭からスツポリとかぶつて寝ていました。

「これはこれは、お嬢様、そう自暴やけにおかぶりになつては、第一のぼせて毒でございます、ちとお発はらしなさいまし」

傍へ寄つて来て、かぶつていた夜具へ手をかけ揺ゆつたものですから、その夜具が遽にわかに躍り出すと、

「金公、なんとといういけ、凶々しいんだい」

むつくりとハネ起きざま、金助の横面よこつらをイヤというほど食らわせたのは、お銀様ならぬ親方のお角であります。

「あ、これはヒドイ」

金助はお角にハリ飛ばされた横面をおさえて飛び上ると、

「金公、お嬢様を逃がしたのはお前だろう、手前てめえがよけいなことを喋りやがつたんだろう」

お角はつづいて金助の胸倉をとりました。

「まあまあ、親方、そう手荒いことをなさらなくつても話はわかりますよ」

「この野郎、お嬢様によけいなことを喋りやがつて、手前が手引をして逃がしたに違いないんだ。そうして、よく図々しく来られたもんだね。さあ、どこへお嬢様を隠したかお言い、言つておしまい、言わないとこうだよ」

お角は金助の胸倉をギュウギュウ締め上げますと、金助は眼を白黒して悲鳴を上げ、

「死ぬ……圧制……お梅ちゃん、助けて下さい」

下でお梅も人が悪い。助けを呼ぶ声を聞き流して、腹をかかえて、声を立てないで笑いころげています。

「真ッ直ぐに言つておしまい」

お角は金助を締めたり、ゆるめたり。

「親方、あの神尾主膳様が近いうち、田舎いなかを引払ってこちらへおいでなさるそうで」

「そんなことを聞いてるんじゃないやありません、お嬢様をどこへやりました」

「それは存じません。どうかもう少しここをおゆるめなすつて下さい、咽喉のどがつまって声が出ませんから」

「正直にいつておしまい、あのお絹のおたんちんに頼まれたんだらう」

「決して、そういうわけじゃございません、現にこうして、お嬢様がここにお休みなすつていらつしやるとばかり存じて、上つて来たようなわけでございますから……」

「しらばつくれちやいけないよ、今お前、下で何といつたい、お嬢様にそつと申し上げてしまったとか、お力になつて上げたと

かなんとか言つていたろう、お前でなけりや、手引をして逃がす奴はないんだよ」

そこで金助がスツカリ泥を吐かせられてしまつたけれど、別段、この野郎が計略を構えて、お銀様をおびき出したというわけではない、ただよけいなことを喋しゃべつたというだけにとどまるが、このよけいなお喋りのために、お角は大事の金主元を失い、これからのてちがいを心配してみると、この野郎の面つらが癩しやくにさわつてたまりませんから、

「ホントに、おつちよ、こちよ、いほど怖いものはありやしない」
と言つて、その横面をまた一つピシヤンと食らわせたものからです、金助は生ける色がなく、お角の手が弛ゆるんだのを幸いに、丸くなつて逃げ出し、梯子段をころげ落ち、土間へすべり出して、下駄を突っかける暇もなく、両手でひつつかんで、格子戸を押

開け、は、だ、し、で外の闇へ逃げ出してしまいました。下にいたお梅は胆をつぶして、

「あらあら、金助さん、わたしの下駄を片一方持つて行つてしまつて……」

これは笑いごとではない。金助はあわてて自分の穿いて来た後丸あとまるの下駄と、お梅の大事にしていたポツ、クリを半分ずつ持つて逃げ出してしまったものだから、お梅は泣かぬばかりに口惜くやしがつて、あとを追つかけてみましたけれど、どこへ行つたか影さえ見えません。

これはお梅にとつては一大事で、南部表にしゅちんの鼻緒はなごにも、蒔絵まきえにも、八重梅が散らしてある。当人も自慢、朋輩ほうばいも羨ましがつていたポツ、クリを、半分持つて行かれたから、口惜くやしがるのも無理はありません。みんな持つて行かれたわけで

はない、半分は残っているのだけれど、下駄の半分ばかりは、残されたところで有難がるわけにはゆかない。

二階ではお角がおかしくもあるし、腹も立って、それでも、あの野郎、神尾の殿様が来るとか来ないとか、頼まれた用事もあつてやつて来たらしかつたが、それをいい出す暇もなく逃げ出してしまった。こちらもお聞きただしいこともあつたのに、かんしやくまぎ紛れにとつちめて、葉が利きき過ぎた。しかし、どのみち二三日たてば、ケロリとして出直して来る奴だと思ひました。

おかしかったのはその翌日の朝、両国橋の女軽業のおちやつ、ぴいの一人が目の色をかえて、お角のしもたやへ飛び込んで来て、

「親方、大変です、梅ちゃんが心中をしまいました」

その声を聞きつけて挨拶に出たのが当のお梅でしたから、両人顔を見合わせて、これはこれはとあきれました。

「梅ちゃん、お前ここにいたの？」

「ええ、いましたとも、心中なんかしやしないわ」

「でも、たしかに梅ちゃんだつて、みんなが言うから、わたし、ちやあんと見届けて来たのよ」

「そんなはずはないわ、わたしはここにいたんですもの」

落語の二人久兵衛のような話で、二人ともに煙けむに巻かれてしまいました。

あんまりおかしいから、お梅がよく尋ねてみて腹を立てました。

それはこういうわけです。

心中があると騒ぎだしたのは、この朝、両国橋に男物と女物

との下駄が半分ずつぬぎ捨ててあつたのを、通りがかりのものが見つけ出して、それ心中だと大騒ぎになり、例によつて黒山のように人だかりがはじまつた中へ、女軽業のおち、やつ、ぴ、い、連もかけつけて見ると、女物の下駄に見覚えがある。

「あら、このポ、ツ、ク、リは梅ちゃんのだわ、ちがいないわ」

そこで、心中の片割れは、親方のお気に入りの娘分、お梅にまぎれもないということになつてしまひ、早速こうして御注進に駆けつけてみると、心中の片割れであるべきはずの御当人が、平気で挨拶に出たから双方あつけに取られた始末です。

注進に來た、おち、やつ、ぴ、いの方は、まあ間違いでよかつたと安心したが、納まらないのはお梅で、

「ばかにしているよ、あんな奴と心中なんかするものか」
ぷんぷんと腹を立てました。

「あんな奴つて誰のこと？」

おち、や、つ、ぴ、い、は合点がてんゆかない。

「何だ、あんな奴と心中なんか、誰がするもんか」

おち、や、つ、ぴ、い、にはお梅の不機嫌なわけが、いよいよわからな
い。

「女物はたしかに梅ちゃんのに違いないが、男のは後丸あとまるのし、や、
れた、形なのよ」

「ふうちゃん、外聞が悪いから、早くその、わたしのだけを持つ
て来てしまつて頂戴な、男のなんかかまやしませんよ、川の中
へ蹴込んでおやりなさい、このごろは下駄泥棒がはやるんです
とさ」

「それじゃ、梅ちゃん、お前さんの下駄を盗まれたの？」

「大抵そうなんでしよう」

「まあ。でも無事で安心したわ、早くその下駄を持って来ちま
いましょう」

「持つて来て頂戴」

「おち、やつ、ぴ、いは大呑込みにして、急いで行つてしまふ。

「ホントにばかばかしいつたらありやしない、金公の野郎、覺
えていやがれ」

余憤容易に去らず、これは昨晚、金助が両国橋まで一目散いちもくさんに
逃げて、さてその下駄を突っかけようとして見ると、片一方だ
から、やむを得ず、そこへ並べて置捨てにしていったものに相
違ない。

これがためにあらぬ浮名うきななもうを受けたお梅は、相手が相手だから、
浮名儲うきななもうけにもならないと思つて、しきりに口惜くやしがっているの
をお角が慰めて、

「まあ我慢おし、そのうちあの野郎が来たら、水をブツかけておやりなさい。それから今日はちよつと廻り道をして行きたいから、早く出かけましょう、梅ちゃん、そのつもりで支度をし」
ほどなく軽業小屋から留守番に来た女連おんなれんといりかわりに、お角はお梅をつれてこの家を出て行きました。

いつもならば直接じかに回向院えこういんの興行場へ行くのに、今日はどこぞ廻り道をするところがあるとみえます。

十九

お角はお梅をつれて柳橋の遊船宿に立寄り、駒井甚三郎を訪ねてみましたが、不在とのことでありす。

不在といつても、房州の洲崎すのさきへ帰つたのではない、昨日の夕

方、ただひとりでどこかへ出かけていったままだとの返事でしたから、お角も少し失望しました。

しかし、お角は必ずしも駒井だけを当てにして来たのではないと見えて、そのまま素直に踵きびすを廻めぐらしてしまいます。

船宿の亭主が答えたように、駒井甚三郎が、昨夕宿ゆうべを出てまだ帰らないことは事実であります。どこへ行つたか、それは別段、問題にするほどのことではない。その夕方、駒井はどう気が向いたものか、絶えて久しく訪れなかつた番町の自分のもと
の屋敷の方へ、おのずと足が向いたのであります。

人通りの少ない時、明りのしているお長屋の前に立って、駒井は暫く様子をうかがっていましたが、

「一学、一学」

と駒井は低い声で呼びました。

お長屋のうち、ここだけが明りがしていたから、その明りをたよりに呼びかけたところが、

「ナニ、誰じゃ、どなたでござる」

中では、やや狼狽ろうばいしたものの返答ぶりです。

「一学、おるか」

「へえ……」

このお長屋のうちで、ただ一軒だけ燈火あかりをつけて夜業よなべをしていたのが、思いがけなく外から呼ばれて驚きました。

この屋敷の広さは、誰が見ても三四千坪以上、周囲にはお長屋があつて、表は長屋門、左右には黒板塀、書院、表座敷、居間、用部屋、使者の間、表玄関、内玄関、詰所詰所、庭があり、林があり、築山があり、茶畑まであつて、三千石以上の旗本の屋敷としては総てが備わっているが、主人がいない。

主人のいない屋敷は荒れるにきまつている。たとい留守を預かるほどの者が心がけがよくつて、見苦しからぬよう手入れを怠おこたらぬにしたところで、主人を持たぬ家は、その鬱うつぜん然たる生氣を失うにきまつている。

駒井能登守が、すでにこの屋敷を離れてかなりの日数になる。まだ見苦しいほどには荒れていないが、なんとなく痛々しい空気が漂ううているのはぜひがない。

このお長屋にひとりで留守をしているのは、以前、甲府までも主人のおともをして行つたことのある近習役の阿部一学であります。ほかの家来は、それ以来、ちりぢりになつて、多くは別に主取りをしているのに、一学だけは、決着のお沙汰のあるまでこの屋敷に踏みとどまつて、留守居を兼ねて、夜な夜な内職をしているところへ、今いう通り、外からわが名を呼ぶもの

がありました。

ここで、一学の内職というのは、世の常の浪人のする唐傘張からかさばりや、竹刀しなけずりとはちがつて、オランダの辞書と、イギリスの辞書とをてらしあわせて、しきりに筆写を試みているので、この内職には相当の学力と労力とを要するが、うつし終ればその報酬は、他の内職よりはずつと割がいいのみならず、一冊うつせば自分もまた一冊だけの学力がつく。一学が、あえて仕官をあせらずに、こうして落着いているのは、この内職という強みがあればこそで、この内職に堪えられる学力は、旧主の駒井能登守から恵まれたもの多きにおることを知ればこそ、少なくとも自分だけは、最後までこの屋敷の運命を見届けようとの覚悟も起るわけです。

一学は外から呼ばれた声に大きな驚異を持ちながら、筆を、

うつしかけたイギリス語の雁皮がんびの帳面の間へはさんで、あわただしく立って窓の障子を押開き、

「どなたでござる」

「駒井だ」

「ええ、殿様でございましたか？」

一学は倉皇そうこうとして、

「ただいま、表御門をおあけ申しますから……」

絶えて久しい主人が、こうして夜陰やいんにブラリと尋ねて来たものですから、一学も最初は妖怪変化ようかいへんげではないかとさえ驚きあやしみ、且つ喜びました。

飛ぶが如く表門へ駈け出して、門を開き、主人を案内はしたが、それを堂々と表玄関へとおすことができず、自分が今まで内職をしていた長屋の中へ、ひとまずお連れ申さねばならぬ運

命のほどを悲しみました。

駒井甚三郎は、さのみ悲しむ色もなく打通つて、

「勉強しているな」

「はい、おかげをもちまして」

一学は何ともつかず返事をして、取つて置きしきがわの敷革を出して主人にすすめる。

「殿様、これは夢ではございませんまいかと、私は存じまするが、夢ならば、さめないうちにおたずね申し上げなければなりません。ただいままで殿様には、どちらにおいであそばしました、そうして何故に、ただいままでお便りを下さいませませんでしたか」

一学は両手をついて、主人にたずねました。

「便りをしないことは悪かったが、便りをしないことが自他のためであったのだ。それはそうと変ることはなかつたか……と

尋ぬるも異いなものだが……」

「奥方は京都へお越しになりましたことを、御存じでいらせられますか」

「うむ……あれの病気はどうじゃ」

「御病気は大抵、お癒なおりになったそうでございます」

「そうか……」

「殿様」

と一学は膝を押しすすめて、

「私は人情の表裏反覆というものの甚だしいことを、今更のよ
うに学びました、何かにつけて驚き入ることばかりでございま
す」

一学は眼に涙をたたえて昂奮すると、駒井はしんみりと、

「いいや、みんなわしが悪いのじゃ、お恥かしい次第だ、この

心が出来ていないばかりに、わが身を誤り、家を亡ぼし、親族には屈辱を与え、お前たちにも苦勞をさせてしまった、つくづくこの身の愚かさが身にこたえる、ゆるしてくれ、ゆるしてくれ」

「恐れ入ります、そういうつもりで私はただいまの一言を申し上げたのではござりませぬ。一時は私も、殿様のお心がわかりませんでしたが、今となりましては、その考えが変りました。女が悪いのでございます、罪は女にあるのでございます、殿様がお悪いのではござりませぬ」

「何をいつているのだ、そういう話は、もうよそうではないか……実は、こうやって急に思い立って尋ねて来たのは、少々、捜さがしてみたものがあつてのことじゃ、大儀だが、奥の書物庫へ案内してもらいたい」

「^{かしこ}畏まりました、何ぞ、お書物でもお取出しになりますか」

「書物をさがしに来たのだ、急に読みたいことがあつて……」

「では、早速御案内を^{つかまつ}仕りましょう」

一学は、久しぶりで主人にあつて、まだまだいいいたいことが山ほどある^{けしき}気色なのを、主人がむしろ、それを避けたがる様子と、ともかくも書物庫へ、急の用件があるらしいのとで、ぜひなく、^{ちようちん}提灯を用意し、預かりの鍵をたずさえて、この座敷を出かけました。

目的の書物庫は、駒井甚三郎が特に念を入れて建てさせたもので、駒井は、洋行する知己友人のあるたびに、かの地の書物の買入れを頼み、みやげとして寄贈された書物と共に、この庫に蓄えておきました。

いろいろの心持で、頭を混乱させながら案内に立った一学は、

わが主人は、これまでどこに、どういふ生活をしていたのかわからないが、それでも、こうして駈けつけると、早々参考書の庫へおとずれることによつて、主人の今の境遇がたとい逆境とはいいなから、逆転しているものでないことを想像して、心ひそかによろこんでいます。

幸いにして一学も、また好学の書生でありましたから、日頃の心がけも、おのずからこの書物庫の書棚の上に現われて、こうして不時の主人の検閲を受けるような結果になつても、あえて狼狽せずに案内することができたのみならず、いよいよ内部へ入つて、整理の手際を見た時に、主人をして感謝せしむるほどの好成績を示し得たことを、自分ながらよろこばずにはいられませんか。

「感心に手入れの怠りがないのみならず、分類の方法が宜しきよろ

を得ている」

といいながら、駒井は一学の手から提灯を受取つて、汗牛充棟かんぎゅうじゅうとうの書物をいちいち見てあるきました。満足の色を面おもてにたたえて

もし、管理者が一学でなかつたら、この書物は、どうなつて
いるか知れない。紛失はしてないまでも、散逸さんいつはしていたろ
う。そうでなければ虫と鼠との餌食に供せられていたに相違な
い。そして、駒井は提灯をふりてらして、自身に書棚の間を縫つ
て歩きながら、めばしい書物をいちいち抜き取りました。抜き
取ったのを一学に渡すと、一学はいちいちその題目を読んで
取りそろえながら、少なからず奇異の念に打たれたことであり
ます。

申すまでもなく、わが主人の専門は、西洋の兵術と武器とで

あります。その道においてはならばものないほどの新知識であつて、同時に、そのころの西洋科学の粋を味わうことにおいては、人後に落ちなかつたものです。

ですから、今も隠れて、専らその方面の研究に没頭しているものに相違なく、従つて参考書に不足を感じたればこそ、こうしてわざわざ駆けつけたものに相違ない。

ところが、いま主人の抜き出している書物という書物が、みな一学の意表に出づるものばかりでありました。

「Logos——これは理学の本でございますか」

「左様、道理とか言葉とかいふのだらう」

「Mani——これは何を書いたものでございますか」

「マニ……土地の名か、或いは人の名ではないか」

「Hom-ousia——ホモウシアと読んでよろしうございますか」

「そう読むよりほかはあるまい、何の意味かわしにもわからぬ」
「次は Monologion——これは、オランダ語でございませうか、イギリス語でございませうか」

「その原書はイタリーのものだそうだが、太宰だざいしゅんだい春台の独語といつたようなもの、つまり感想録の一種だろうと思う」

「ははあ、これはイギリス語でございませうな、イミタシアン・オブ・クリストと読みますか……」

「うむ」

「内容は何でございませうか」

「何だかわからん」

「これは、ピリグリム・プログレスと読みますか、これには挿絵さしえがたくさんございます」

「それは有名な小説だ」

「小説と申しますると、草双紙くさそうしの類たぐいでございますか」

「そういうわけでもない」

「Socitas Jesu——綴りに従つてソサイタス・ジエスと読みます、ソサイタスは組合とでも申しましようか、ジエスは……」

「人の名だ」

「ああ、これはヒストリー・オブ・プロスチチューション——」

駒井甚三郎の抜き取つて渡す書物は、どれもこれも一学には意外千万であつた。意味のわからない標題や、草双紙や、遊女売婦の歴史。兵書、兵学に関するものとしては手にだも触れないで、またその次に漁あさり出したのが、形は洋装になつてゐるが、標題は漢字で、「ヨハネふくいんしよ約翰福音書」——

「あ、それは切支丹きりしたんの書物でございます」

一学がいうまでもない、これは千八百三十九年（天保十年）

シンガポール
新嘉坡で出版された日本語訳の最初の聖書。

二人は書物庫から両手に一ぱいの書物を抱え出して、再び以前の長屋へ戻り、

「一学、今晩はもうおそいから、ここへ泊めてもらおう」

駒井甚三郎は、ついにその夜は一学と枕を並べて寝ることに
なりました。

「殿様、私はそれを申し上げてよいか悪いかわかりませんが——
日頃胸にあることでございますから、お気にさわるまでも、今
晩この機会に申し上げてしまいたいと存じます」

一学があらたまつていいいますから、駒井が、

「遠慮なくいつてみたまえ」

「ほかでもございませませんが、どうしてもわからないのは、奥方
のお心持でございます」

「うむ、誰の心でも、そうはよくわかるものでない」

「と申しましても、あれほどあなた様を慕っておいでになりました奥方が、あまりと申せば手のうら、をかえすように、お情けないお仕打ちでございます」

「それも事情に制せられて已むを得ぬことだろう、この浮世の階級とか情実とかいう、何百年、何千年来の圧迫を女の手で破れというのは、いう方が無理だろう」

「破れとは申しませぬ、むしろ従えと申し上げたいのでございます」

「よき破壊と、よき忍従とは、共に同じほどの力を要するものだ、難きを人に責めないがよい」

「難きを責むるのではございませぬ、常道を責むるのでございます。奥方のお振舞は、あなた様にとっては、まさしく叛逆な

のでございます」

「叛逆？」

「と申し上げました無作法をお許し下さいませ。叛逆でなければ、復讐ふくしゅうでござります、人の妻として、世の女として、取るべき道ではござりませぬ」

「一学、そちは、常ならず昂奮しているが、わしは何も知らぬ、知ろうとも思わぬが、叛逆という言葉はおだやかであるまい、もし、さる事実がありとすれば、叛逆はかれにあらずして、われにあるのだ、その当然のむくいとして、わしは復讐を甘受しなればならぬ」

「エ、何と仰せられます、殿様が、奥方にそむいたと仰せられますか。それはあまりに御寛大なお言葉でござります。一切を承知致しております私にとりましては、痛ましいほどの御寛大

のお言葉でございます。甲州へおいでになる道中におきまして、毎日、日課として、こまごまとお文をお書きあそばしたあの御情合……」

一学は声をつまらせてしまいました。しかし、駒井甚三郎は感情に制せられず、

「あれは常に気位を持っていた。気位というものは往々人を尊大に導いて、広い同情を忘れしめるものだが、その気位あるによつて、犯し難い見識も品格も出て来ることがある。あれが堂上の上出であり、高貴の血統ということとは、わしにとつては、どうでもいいことであつたが、その自負心から出でる天然の気品は、尊重せねばならぬと思つていたので、その自負心を根柢から動揺させたのが、誰きみじよあろう、この駒井の罪だ……甲州において、人もあろうに、あの君女を愛したということが……駒井の愛情

が、人交わりもできない身分の者に奪われたと知った時に、あれの気位が根柢から動揺するのはぜひもないことだ。あれの身になってみれば、それと知った時は、まさに死ぬより辛い侮辱を与えられたと思つたに相違ない——女というものが、その自負心を傷つけられた憤慨と、その愛を奪われた侮辱の苦痛の深刻な程度は、お前にもわかつてはいまい、わしにもわかつていなかったのだ。思えば、わしは一本の劍つるぎで二人の女の魂を貫いてしまったのだ。その二人とも、今の世には珍しいほどの純な心であつたのに、この駒井の一旦の情慾から、それを殺してしまつたのだ。この復讐が来るならば、いかに深刻きたに来るとも甘受しなればならない」

一学は、主人のいうところに熱情の籠こもることを感じました。けれどもその論旨の意外なるに服することができません。

一切の責せめわれにありと主人がいうのは、世の常の自制でもなければ、あきらめでもない、真にその通りに自覚して己おのれを責むるの言葉としか思われなことが、一学にとつては甚だ意外でありましたのです。

何となれば、一学は、今までわが主人のために、世間と人間とを責めてやまなかつたからです。わが主人ほどの人材を容いれることのできない時代は、時代が悪いのだし、またわが主人ほどの男を愛しきれない女は、女が悪いのだと、強くそう感じていたからであります。

これは、一学の観みかた方にも相当の道理あることで、幕府が今日の危機に立つて、非常に人材を要する時にあたり、ささやかなの失態によつて、わが主人ほどの人物を閑地に置く（生きながら殺してしまった）人物経済上の低能さかげんを、冷笑しないわ

けにはゆきません。これは一学の身びいきのみではありますまい。当時、駒井能登守を一流の新知識と知るほどのもので、この人物経済上の愚劣さかげんを笑わないものはなかつたはずです。

しかし、これは笑うものがむしろ浅見で、当時の幕府の要路というものが、おのずから、そういうふうに出ていたので、人物に異彩があればあるほど、また人物が大きければ大きいほど、グレシヤムの法則がおこなわれていたのです。

試みに徳川の初世の歴史を見てごらんなさい。徳川家康が不世出の英雄とはいいいながら、豊臣以来の御し難き人物を縦横自在に処理し、内外の英物を適材適処に押据え、雲の如き群雄をことごとく一手に収攬した政治的大手腕というものは、驚くに足るべきもので——もとよりこの人は、日本のみではない、世

界史上の第一流の政治家ではあるが——さりとはその末勢まつせいの哀れさ。今日の内外多事に当つて、どこに人物がいる。辛からうじて勝安房守ひとりかつあわのかみの名前が幕末史のページに光っているだけではなないか。

その勝安房守をも、彼等のある者は極力光らせまいとして努力した。

勝は島田虎之助門下で剣術を修行した男である。剣術は出来るだろうが、畢竟ひつぎきようずるに剣術使いで、天下の枢機すうきを託すべき男ではない——また勝は一代の学者であるという評判に對して、なアにあれば正式の学問をした男ではない、いわば草双紙の通人だと。

彼等の考えでは、勝安房ひとりに幕末史を飾らせることは、彼等自身の立場の上から、たまらなかつたものらしい。さりと

て全部を誣^しうるのは、全部を讃^ほめるのと同じように拙策である。そこで勝の持つていた一部分の技能、つまり剣術だけをウンと讃めて、他の技能をそれで隠そうとした。あわれ、日本の歴史に二度と応仁の乱を持ち来たさないうように働いた知恵者を、かれらはどうかして剣術使いだけの範囲にまつり込もうとした。

そういつた意味の時代のばかばかしさを、一学は久しぶりで逢った主人に向って訴え、且つそれが幾分か不遇の主人をなぐさめる所以^{ゆえん}になるだろうと思つていたところが、案外のこと、主人はほとんどそれには取合わないほどの淡泊で、これも案外に思いました。

しかし、この辺のことを問題としていないわが主人は、別に独特の世界を見つめていて、と一学は確認することができたので、その一夜の物語で何か自分に、非常に力強いものを与えら

れたような気がしました。

翌日の朝まだき、駒井甚三郎は、この家を辞して行きました。書物は取りによこすからそろえておいてくれるように、自分の居所はまだ明かせないが、そのうちくわしく知らせるからといって……

駒井が例の如く籐とうの鞭を振って立去る姿を、門に立った一学あさもやは、朝靄の中に見えずなるまで見送っていました。

二十

駒井甚三郎は、生きては再び足を踏む機会はあるまいと思つたわが家へ、計らず帰つて見ると、そこにおのずから感慨無量なるものがあります。

連綿とつづいたわが家を、自分の代に至つて亡ぼしてしまつた。それも、自分にとつては問題にならぬことながら、社会的には無上の汚辱。どう考えても同情の余地のないふしだらのため、一代の嘲笑の的となりつつ葬られてしまった。

よし、駒井甚三郎は、わが身の愚劣と、世間の審判の愚劣とに呆れ果てて、別に天地を求めて生きるの道はいずれにも開かれているとはいえ、先祖の位牌に塗られた泥土は拭うべくもあるまい。また後代の駒井の家の祭りをここに絶つた責は免るべくもあるまい。

先祖に濟まない——という家族制度の根本をなす思想は、この人を囚とらえて窒息せしむるに至らないまでも、決してその良心に安きを与えてはいないはず。

駒井は久しぶりで、わが家の敷居をまたいで、はじめて、こ

の罪の執拗しつようなことを強く感じました。そこで、彼は亡き父と母とのことを深刻に回想してきました。

家門の面目を生命より重しとする武士気質かたぎにおいては、父も母も変りはない。

その間に、ひとり子として生れたこのわれを、人並みすぐれた人にしてそだて上げたいとの希望は、世の常の親と同じこと。幸いにして、父母のこの希望は、家を譲る時まで空しくせられずに、ともかくも、このわれというものの生立ちおいたを、自慢にはしようとも、恥辱とはしていなかた。「駒井の家、これよりおこるべし」と人も讃ほめ、父もひそかに許していたこと。

頑固ながらも、目先の見えた父は、旧来の学問武芸の上に、進んで自分に洋学を学ばしめたこと。もし、父母の存生中にこの事件が起つたならば、父は必ず、われを刺し殺し、父母はさし

ちがえて死んでしまったに相違ない。

幸か不幸か、今の駒井甚三郎は、一婦人を愛したということ
が、それほどの罪とは、どうしても考えることができないから、
それで死ぬ気にはなれない。

もし、自分にとつて、死に^{あた}いする罪がありとすれば、それは
別のところにある。

駒井の最初の考えでは、ただこの家へ読みたい本を取りに来
たまでで、その用が済んだ以上は、さつさと柳橋の船宿へ帰り、
一日も早く房州へ引き上げてしまおう。今もまた、その考えで、
人通りのほとんどないほどの朝まだきに番町を出て、こうして、
下町方面へ、無意識に急いでゆくうちに、むらむらと巻き起る
考えが、駒井の足の向きを変えさせてしまいました。

この機会に父母の墓に詣^{もつ}で、先祖へ対する心ばかりの謝罪を

するのにも、無用なことではあるまい。こう思い出したから、駒井は足の向きをかえて、小石川の方面へとこころぎしたものです。

駒井甚三郎の父母の墓も、先祖の墓も、小石川の伝通院にある。一族、親戚の墓も多くそこにあるはず。

ほどなく、安藤坂を上ると、伝通院の門前。まだ時刻が早過ぎるので、どうかと思つたが、見れば門前に、花を売る店が早くも戸を開いて、表の道のほうきめ箒目もあざやかですから、駒井はその花を売る店へ寄つて、

「お早う」

言葉をかけてみると、店を守るのは例の卒塔婆そとばこまち小町に似た一人の婆さんであります。

「いらつしやいまし」

駒井は無雑作むぞうさに店の中へ入つて、

「お墓参りに来た」

「それはそれは、お早々と」

まもなく、駒井甚三郎は花と香とを携え、卒塔婆小町に似た婆さんは、箒と水とを携えて、伝通院の墓地へ通るのを見受けます。日が漸ようやくのぼりはじめて、寺では梵唄ぼんばいの響。

婆さんはかいがいしくお墓を掃除してくれる。駒井は花と香とをあげて礼拝らいはいする。父母と先祖と、それから、親戚のものにいちいち礼拝をして廻つて、やがて、例の天樹院てんじゆいん殿の前までやつて来ました。天樹院も、本多家も、多少、駒井の家と血縁を引かないということはない。駒井は、玉垣の門を開いてもらつて、ここへもおまいりをして行くつもりです。香と花とを捧げ終つて、駒井は何か物思ふことあるが如く、やや離れて、天樹院の

五輪塔を暫くながめておりましたが、

「婆さん」

箒をつかっている婆さんと呼んで、

「お前は、この天樹院様をどう思う」

「天樹院様をでございますか？」

「うむ」

「どう思うと仰せられましたのは？」

「つまり、いい人か、悪い人か、愛すべき人か、憎むべき人か……」

「左様でございますねえ……」

婆さんは箒の手をとどめて、今更のように天樹院殿の大きな

石塔を仰ぎ、

「お美しい方であつたと存じます」

そういつてお婆さんは、に、つ、と笑つて駒井の面かおをながめます。

今に始まつたことではないが、このお婆さん自身がむかし美しい女であつたに相違ない。いや美しいというよりは、美しいそのものを売り物にした経歴をたどつて来た女ではないか。つまり、それ者上りしゃあが、そういったものが、晩年のいとなみを墓守で暮らしているのじゃないかと、誰にも一応は想像されることです。

「お美しくなければ、あんな騒動は起りますまいから……」
と付け足したが、この返事は駒井の期待しているところには少しも触れない。

「それではお前、坂崎出羽守と本多中務ほんだなかつかさと、どちらが仕合せ者と思う？」

「それはきまつておりますよ」

「ふーむ」

今度は駒井が微笑しました。駒井の微笑は、今の返答が、わが意を得たるところから来たもののようにだと、婆さんは早合点をして、

「本多様は果報なお方でございますわね、それとくらべて坂崎出羽守様ほど御運の悪い方はありますまい……それというのも、あなた、殿方も男ぶりがやっぱりお大切でございますね。容貌きりようを命とするのは女ばかりではございませぬ。仮りに坂崎様が本多様のようないい男であつてごろうじませ、天樹院様だつておいやとは申しますまいよ」

これは婆さんが一歩立入つて、充分にうがつたつもりでしたけれど、駒井甚三郎は顔の筋一つも動かすことをしません。何とも響かないものと見えましたから、婆さんも張合いが少し抜けました。そのとき、駒井は、むすんでいた口を開いて、

「わしは、そうは思わない、本多はやはり不幸な男だ、不幸な程度においては坂崎に劣らない」

といたしました。

「どう致しまして、あなた、本多様がお不仕合せなら、この世に殿方の果報というものはござりませぬ。何しろ、豊臣大納言だいなごん様のものと奥方に思われて……命がけでお救い申し上げた殿御を、振りつけて、そうして思う存分に、絵に描いた美男美女の御夫婦仲……それに天樹院様のお化粧料が十万石……」

「本多はそれがために三十一で夭死わかしにをしてしまった」

「え？」

婆さんがギョツとしたようです。天樹院の墓の下から、小さな蛇が一匹現われました。

「つまり天樹院は豊臣秀頼を殺し、坂崎出羽を殺し、本多忠刻

を殺し……」

その時です、駒井甚三郎の胸をつんざいたのは——現在、自分をうらんで去った自分の妻が、どこかにおいて、この天樹院とおなじような乱行の生涯を送っているのではないか。

果報者の本多忠刻を、三十一歳で天死わかじにをさせた後の爛熟らんじゆくしきつた若い未亡人の乱行。

それは今の世までもうたわれて、淫蕩いんとうの標本とされている。天樹院とても、淫蕩そのもののために特にこの世につかわされた女でもあるまいし、徳川の宗族だからといって、天樹院に限って、その乱行を是認するという制度もあるまいが、あの女性としては、淫蕩と乱行とに半生を使いつぶすことのほかには、生きる道をしらなかつたればこそ……また徳川の宗族も、自ら省みれば、あの女の乱行を抑えるの権威がない。

まだ子供心の失せぬ時分、徳川家から豊臣家へやられたのは、政略のための人質に過ぎないし、後に坂崎出羽に与えられようとしたのは、働きに対する懸賞品の代用として扱われるに過ぎなかつた。女性を、娘を、物品として取扱うことをしか知らぬ父祖というものに対して、この女が呪いの心を発したというの
はありそうなことである。

そして、この女は我儘わがままの目的物として、美男の本多忠刻をえらんだ。

忠刻が、この美人に思われて夭死わかしにをしたのは、お興こしい入れ間もないことで、その死因は単純な果報負けだともいうし、坂崎余党のうらみの毒によるものだともいうし……また、昼夜もてあそに弄ばるる天樹院の、限りなき情慾の犠牲に上げられたものだともいう。

天樹院の乱行には、まさしく復讐の念をふくんでいなかつたとは誰もいわない。

女の復讐は、いつも魂をいだいて泥土の中に飛びくだる——
そうした時に、征夷大將軍の力もそれを救うことができない。

駒井甚三郎は、昨晚一学からいわれ、その時はほとんど念頭に置かなかつた言葉の節々が、今や重く胸にわき上つてくるのを覚えました。

一学はわが妻の挙動を叛逆だと叫んだ。叛逆とは何を意味している。今までそういうことに耳をふさぎたがっていた駒井。わかれて後の妻が若い小姓の誰かれを愛したとか、堂上方のあるさむらいを始終ひきつけていたとか、京都へいった後、ずんと年上な、評判の色悪いろあくの公卿くげさんに籠絡ろうらくされてしまつて、今はそのお妾めかけさん同様に暮らしているとか、聞きたがらない本人の

耳へ、わざとするように苦々しいものがひつかかる。

それは、ドコまで信じ、ドコまで疑うの拠りどころがあるわけではないが、ただ疑われないのは、彼女の心が決して上へはのぼっていない、無限の下へ下へとおち行く光景だけは、見まいとしても眼の前へ現われてくるのです。

駒井甚三郎は、そのことを考えて、心の底から戦くのを禁ずることができません。

「こちらが伝通院様でございます」

婆さんが言葉をかけたので、われに返って見ると、

「伝通院殿

蓉誉智光

大禅尼

慶長七年一月二十九日」

伝通院殿は無事であります。その展墓てんぼを最後として、駒井は老婆と共に墓地の中を出ることにしました。

再び門前の店へ戻つて、

「まあお休みあそばしませ、粗茶一つ、召上つていらせられませ」

駒井は老婆の案内に応じて、土間の長い腰掛に腰を卸すと、あとから続いた老婆は、風を厭いとうて障子を締めきり、やがて、渋茶の一碗を駒井の前に捧げましたから、駒井はそれに咽喉のどをうるおします。

朝日が、前の木立の間から洩れて、いま締めきつた障子に光を投じている。内も外も静かで、本堂から洩れるおつとめの音がよく聞える。

その時分、締めきつた障子の外で、

「おばさん」

「はいはい」

「花を持つて来たよ、これをおばさんの店で売るといいや、院代いんだいさんにことわつてうろ抜いて来たんだよ」

内では見えないが、障子の外に立つてこういいながら、胸一ぱい、に秋草を抱え込んでいるのは、宇治山田の米友であります。

「友さん、どうも済みませんね」

婆さんは障子を少し開いて前から見ると、それは米友が歩いて来たのだか、草花が歩いて来たのだかわかりません。

「どう致しまして」

胸一ぱい、に草花を抱いた米友は、婆さんのあけたところから土間の中へ入り込み、

「花桶の中へ入れといて上げような」

「ああ、どうぞ」

そこで米友は胸一ぱい抱えて来た秋草を、明あいた花桶の中へ入れようとして、

「おや、この桶には水がねえや」

「水がありませんかね。それじゃそのままにしておいて下さい、あとから汲んで来て入れますから」

「おいらが汲んで来てやろう」

といって米友は、胸一ぱいに抱えた草花を桶の中へさし込みながら、傍かたえの手桶を横目でながめました。

その手桶を提げると、米友は以前入つて来たところから、身軽に外へ飛び出してしまいました。動物園へ動物を寄附する時には食糧附の義務があるように、米友は草花を持って来た好意に添うるに、水汲みの労力を以てすることを、さのみ苦には致

しません。これはお安いことです。

米友はこうして水を汲みに出かけました。そのあとで、駒井甚三郎は、

「婆さん、奉書があれば結構、なければ西の内でも、それななければ半紙でもよろしい、紙を一枚下さい」

「何になさるんでございますか」

「え、志納金をお寺へ納めて行きたいと思う」

「左様でございますか」

婆さんは、立って、奉書の紙のいったん使用して皺しわをのぼしておいたのを持って出て、

「これでよろしうございますか」

「それで結構」

駒井甚三郎は一方の脇の床几しょうぎに腰をかけて、花立を置いた前

の机の上でなにがしかの金を包み終り、

「婆さん、筆をお貸し」

「はいはい」

老婆は、蒔絵まきえのある硯箱すずりばこの蓋ふたをとって、水をさし、駒井の前

へ置くと、駒井は墨をすりながら、

「婆さん、お前は、なかなかよい墨筆を使いますね」

「いいえ、お恥かしうございますよ、あなた様」

「嗜たしなみがよい、お前は和歌うたをやりますか」

「いいえ、どう致しまして」

駒井が、それに感心したのは、独り住ひとみの門前婆まへさんのことだから、筆墨しよもつを所望しょうぼうされたら、狼狽ろうたいしてほこりの溜ためったのを吹き吹き、申しわけをしなから、やっと取り出さないうまでも、こんなに念ねんの入いったのを出されようとは案外あんがいで、どうしても、和歌うた

の一つも書きつけているものでなければ、こうは嗜みが出来な
いはずと思つたからです。

「いや、お前は和歌うたをやりそうじゃ、さいぜん、あの墓の前で
ふとお前の姿を見た時に、絵に見る卒塔婆そとばこまち小町を思い出したよ」
「ホホホ、よく皆さんが、そんなことをおっしゃつて下さいま
すが、西行さいぎやうに姿ばかりは似たれども、と申すようなものでござ
います」

「いいえ、お前の前生は小町かも知れない、さぞ男を悩ました
ことであろうな」

「いって駒井は、自分ながら口がすべ迂り過ぎたと思ひました。

「御冗談をおっしゃいます……」

この時に、水を汲んだ宇治山田の米友が帰つて来ましたので、
卒塔婆小町は、

「友さん、御苦労さま」

「おいらは、水を汲むのは何ともねえが、提さげて来るのが骨だよ」

といつてその手桶を土間へかつぎ込んだのと、駒井甚三郎が紙包の上へ、駒井家回向料の文字を認めしたたつたのと同様でした。

「あ！」

米友が舌を捲いて、手桶を抛ほうり出して、駒井の面おもてをキツと見つけたのもその時です。

「やあ、手前てまえは駒井能登守だな」

そのクルクルと廻つた円い眼には、おどろきのほかに憤いきどおりが燃えています。

駒井甚三郎は筆を下に置いて、

「おお、お前は友造ではないか」

はじめて、米友の面おもてをまともに見ました。

「うーむ」

米友は、駒井の面かおを見ていると、むらむらとして、衷心ちゆうしんの憤りとと、憎しみとが、湧き起るのを禁とめることができなると見えて、その拳こぶしがワナワナと動いて、頓とみには口も利きけないでいるのを、駒井はそれと知る由もないから、尋常に、

「お前はこの寺にいたのか。なぜ甲府を出る時に、だまって出ました」

「だまって出ちゃ悪かったかい」

駒井が尋常に出るのを、米友は、喧嘩腰ですから、この時、駒井が怪しみをなしました。しかし、駒井自身においては、よくこの男の性格を知っているつもりだから、至極おだやかに、
「帰るなら帰るように、わしにも一言いつてくれるとよかった」

しかしながら宇治山田の米友は、この時、堪忍袋かんにんぶくろが切れたように飛び上って、

「駒井能登守、能登守……」

拳を握って、齒をギリギリと噛み鳴らしましたから、当の駒井よりは卒塔婆小町の婆さんがおどろきました。

「友さん、どうしたの？」

「どうしたんでもねえんだ、腹が立ってたまらねえんだ、こいつの面つらを見るとおいらは腹が立って、口惜くやしくって、物が言えねえ」

米友の唇もまた、拳のふるえるようにふるえています。

「何です、わからないじゃありませんか、無暗に人様をつかまえて。第一、御身分のあるお方に失礼です」

婆さんが、駒井を御身分のある方と推定したのは、もつと以

前よりのことですが、口に出たのはこれが初めてで、つまりその御身分なるものは何だか知れないが、おとももつれないでこうして参詣に来たというものの、その詣もつでて行く墓は皆、由緒ゆいしよの正しいものであり、また当人の品格が、いかにも奥床しいところのあるのに、いきなりぶツつかつた米友の言語挙動が、いかにも粗暴を極めているから、それで見兼ねて、つい、心にあつた御身分のあるお方というのが口に出たのです。

けれども、こういう境界線は、宇治山田の米友にとっては用をなしません。

「ああ、こいつがいなけりや、お君は死ななくつてもよかつたんだ、こいつが、こいつがお君を殺しちまつたのだ」

米友は、おどまたも躍り上つて、齒をギリギリと噛み鳴らしました。

「友さん、ほんとに、お前どうしたんですよ、お前にも似合わない」

卒塔婆小町の婆さんは、米友が発狂したのではないかとさえ疑いました。しかし米友の昂奮はいよいよ上のほることを知って、静まるということはありません。

駒井甚三郎は、こういうふうのほに頭から罵られても、あえてそれに激するものでもなく、またこのグロテスクの凶暴な表情に恐れをなして、逃げ去ろうでもありません。

その罵るだけを聞き、その受けるだけの乱暴を受けようとの態度ですから、いきおい、卒塔婆小町婆さんが、身を以て二人の間に立入って、万一に備えなければならぬ勢いとなりました。

「お、お、お君は……」

米友は、激しくどもって、

「お君は、お君だけの女なんだ、そ、そ、それを……殿様の威光でおもちやにした奴は誰だ」

「友造——」

駒井が何か言おうとすると、米友はいつそう激してしまい、

「その分にしておけば一生いきでいられる女を、殿様の威光でさんざんおもちやにして、飽きた時分に抛り出した奴は誰だ。いばかにしてやがら。あの女は死んでしまったんだ。死んだ者はこの世にいねえんだぜ。もう一ぺんこの世へ出せるものなら出してしろ、その上で文句があるならいつてしろ、駒井能登守！」

駒井は眼をつぶって、沈黙してしまいました。米友は、唇がわなないて口が利きません。

なんとも手のつけようのないのは、卒塔婆小町の婆さんで、なぜ、この品位ある若殿原が、寺男の米友風情に、こうまで罵

られて言句がつけないのか、また、日頃、親切で正直な男が、まるで狂犬やまいぬみたように、どうして一見の人にガミガミ噛みつくのだか、委細の様子がわかりません。

暫くあつて駒井甚三郎は、沈黙をやむなくさせられた口を開いて、

「それでは、友造、わしは、どうすればいいのだ」

「死んだものを活いかして返せ！」

と宇治山田の米友が叫びました。これは無理です。本来米友という男は、無理をいわない男であるし、自分が無理をいわないのみならず、他の無理に対しても我儘わがままということのできない男であります。しかるに、今は、駒井能登守に対して、無茶苦茶な無理をいいかけています。死んだ者を活かして返せとは、人間として、これより以上の無理な注文はないはずであります。

駒井甚三郎が、いま失意の境遇にあるよわみをつけ込んで、こういう無理をいいかけるのか知らん。そうではないはずです。

この男には、人のよわみにつけ込むという心はないのみならず、苟も弱者の虐げらるるものに対しては、じつとしていられない男であるはずです。しかるに、今このし、おらしい美男の若殿原に向つて、さい、ぜん、からあらんかぎりの暴言を吐くのみならず、人間の力ではできない相談の無理を吹きかけています。モシ、よそめ他目で見たならば、たしかにこれは馬喰いの丑五郎以上の悪態であります。卒塔婆小町の婆さんも、ここに至るとホトホト米友を憎らしく思ひだしてきたのも無理ではありません。

「友さん、お前、無理をいうものではありません、お前にも似合わないじゃありませんか……」

けれども米友は頑がんとして頭こゝべを振つて、

「駒井能登守、死んだものを、活かしてかえせ」

この最大の無理を再びくりかえして、地団駄じだんだを踏みました。

おどろくばかり柔順なのは駒井甚三郎で、これらの暴言に対して、最初から怒るの風がないのみならず、甘んじてその辱めはずかしをうけて慎しむの体ていです。

この人とても、武士の表芸として、武術の一般を学んでいないということもあるまい。まして、こうして物おだやかでない市中を、ひとりあるきするほどのものには、相当の心得がなければならぬはず。その当時の紀綱ききょうを維持する斬捨て御免の制度は、武士階級の面目を保護するために、百姓町人に向つて応用することをゆるさされているはず。しかるに、取るにも足らぬ小者の罵詈ばりあつこう悪口こもに対して、この意気地ない有様は何事。

それでは、宇治山田の米友の槍の手並と、その矮軀わいくたんしん短身のう

ちにひそむ非凡の怪力かいりきを知つて、それに怖れをなしているのか。そうでもあるまい。

この時、宇治山田の米友が、何におどろいてか、両の手を頭の上に高くあげて、

「死んだものを活いかしてかえせとは無理だった、これは人間の力でできることではねえ、神仏の力でも、死んだものを活かしてかえすことはできねえ……往ゆきてかえらぬ死出の旅と歌にもあらあ。そうだ、そうだ、おい、らも旅に出かけるんだつた。長者町の先生が、おい、らをつれて京都から大阪をめぐる約束になっているのだ——京都でも大阪でも、唐からでも、天竺てんじくでも、無茶苦茶にあるいてくるのだ。トテもおい、らのこの心持では、一つところにじつとしてはいらねえ」

と叫び出すと共に、抛ほうり出しておいた手桶を取つて、その水を

ザブリと花桶の中に打込むと共に、疾風の如くこの店をかけ出して、伝通院の境内に姿をかくしてしまいました。

二十一

その時分、神尾主膳は、もう栃木の大だい中寺ちゆうじにはおりません。

ほどなく、根岸の御行おぎようの松に近いところへ、かなりの広い屋

敷を借受けて、そこへ移り住んだ主ぬしというのが、別人ならぬ神尾主膳でありました。

この屋敷は、とても以前の染井の化物屋敷ほどの面積はないが、それでも相当の間数と庭とがあつて、中にじつと潜ひそんでいゝ分には、あまり近所の人目に、わからないほどの広さと静けさを持つています。

ここへ移り住んだけれども、その当座、神尾は決して外出を
するといふことがなく、日中は庭先へさえも出ない有様で、至
極おとなしく暮らしていたが、どうかしたハズミで、部屋に備
付けの鏡を見た時に、神尾が何ともいえない不快な面色かおいろになつ
て、ひとりだけで、出してくるのが例になっています。

寺へ、逼塞ひっそくして、ひとたび心の洗濯もしてみただけれど、額に
残る淫眼の傷は拭えども去らず、消せども消えず、それを見る
たびに神尾が、怒りつ、焦じれつするのもまた無残なるものであ
ります。

ところで、この神尾が、移り住んで来たその身のまわりの世
話をしている女が、寺男の女房のお吉であることも、この世界
にはものめずらしいばかりであります。

お吉は引越しの当座だけ、おてつだいに来たのだから、直ぐ

に帰る、帰るといいながら、まだ容易に帰る様子もありません。また、神尾としてもいま、お吉に出られては、差向きこまるから、かわりのあるまでと、無理に引留めてはいるらしい。

神尾をこうして、再び江戸の方へ引張り出した有力な策士は、がんりきの百蔵であることまぎれもないが、百蔵とても、今はさかさにふるつても水の出てこない神尾を、かつぎまわったところで仕方があるまい。

これは、本来の目的がはずれて、まぐれ当りに神尾にぶつかり、神尾の方でも、また逼塞ひっそくの生活にいかげん退屈しているのを機会しおに、がんりきを頼んだものと見える。

こうして、二人のやくざ者が、腐れ縁ながら提携してしまつてみると、これから後、類は友をひいて、再び染井の化物屋敷が、この根岸へ現われてくるものと見るほかはあるまい。

ただ、気の毒なのは、正直な田舎者いなかもののお吉で、こんなところに永居ながいをすれば、よいことはないにきまつている。

それでも、この女は、もとの領主という尊敬をいつまでも失わず、忠実につとめて、国に夫が待つてさえいなければ、いつまでもここで御用をつとめる気分になつてゐるらしい。

神尾とても、酒乱の兆きざしさざるかぎり、お吉に向つて、そう乱暴を働くということもなく、またこの男は、やくざ者だけに、ドコか肌合いにやさし、味もあると見えて、そう没義道もぎどうに人を使うということもないと見える。

神尾は引籠ひきこもつて、人に姿を見せないし、お吉は別荘の留守番といったような格で、かいがいしく働いているから、庭や垣根の手入れに來た職人達も、別に怪しむほどのことにも至らず、そうして無事に、十日余りを経過しました。

ところが、その翌日、かいがいしく働いているお吉を、いとど怪しく思わせたのは、その日に、荷車や釣台がかなり賑わしくこの屋敷へ着いて、一応の案内を申し入れると共に、無雑作にその荷物を運び入れてしまったことです。

一時は、お吉も人ちがいかと思いましたが、主人の神尾も充分に諒解があるらしく、お吉にもいいつけて、その荷物を一間へ運ばせてしまいました。

荷物を運びながら、お吉がおだやかでないと思つたのは、それがことごとく、たんす箆筒、長持、鏡台、お嫁入りの調度といったような品——はて、誰が来るのだらう。お吉はおびやか脅されたように胸が騒ぎました。

ここへ頼まれてくるまでの話には、神尾の殿様の周囲には、全く女気というものがなく、また自分もうちあけて頼もうとす

るほどの女がないのだから、ぜひにといわれて、お吉は、それを光栄とも、誇りともするような気分で、わが家気取りでかいがいしく働いているところへ、こうして物々しく女の調度がおくり込まれたから、裏切りにあつたように胸を騒がせたのも無理はありません。

一時は口も利^きけないほどになつて、手に持った鏡台をあぶなく取落そうとしたのを、我慢して、差図された部屋まで持ち込み、やつと、

「どなたかおいでになるのでございますか？」

とたずねてみると、神尾はなにげなく、

「少しの間、置いてもらいたいというお客様があつてね」

「左様でございますか」

とは返事をしたけれども、少しの間おいてもらいたい客人が、

何しに箆筒、長持、鏡台、針箱の類たぐいまで持ち込むのだらう。

お吉は、なんともいえない疑惑にみたされながら、それ以上は、尋ねてみる勇氣もなく、そのまま、裏へまわつて風呂を焚きにかかりました。

しかし、そのお客様というのは、こうして荷物だけ先にまわしておいたが、本人というものは、容易には姿を見せません。どんな人が来るのだらうと、お吉は仕事をしながらも、それを心待ちに待ちかまえていましたが、風呂が沸く時分になつても、一向この家へ、訪おとのうて来る人はありません。それでは、殿様の御冗談だらうと——お吉は自分で気休めのように考えてみましたけれど、それにしては現在、送り込まれた荷物が物をいつて仕方がない。どんな人がいつ来るであらう。来たところで、なんでもないはず。それをお吉は、自分で取越し苦勞をして、な

んだかすつかり、自分がだまされてしまったようにも思われてならない。

「お風呂が沸きました」

いつもならば、二つ返事でよろこんで風呂場へ飛んでくるのに、今日は、

「あ、そうか、まあ後にしよう」

といった神尾の言葉までが、いやによそよそしく、冷淡を極めているように思われ、お吉は、いつそ、ここを逃げ出して、国へ帰つてしまおうかとさえ、その時は思いました。

ぜひなく、お吉は引返して、台所の方へ廻り、夕飯の仕度を働いているうちに、表の方に人声がありましたので、ハツとしました。その時、進んで返事をしたのは、珍しく主人の神尾の声でありましたから、お吉が、またも気を揉みました。いつ

も人が来ても、隠れるようにして応対などをしたことのない人が、今日に限ってあの返事——さてはと思うと、お吉は立つ気にもなりません。ワザと腰を重く構えていると、やや暫くあつて、廊下のところで、

「風呂がわいているそうだから、そなた入つたらよかろう」と神尾の声。

「それは有難うございます。では、御免を蒙りまして……」
というのは、ある女の声。

「そこを、ずっと突き当つて行くと開き戸がある、そこが風呂場だ」

神尾が口で案内すると、女は心得たもので、ずっと教えられた通りに打通り、やがて帯を解く音。早くも風呂の蓋を取つて、やわらかに湯を掻きまわす音まで聞えましたから、お吉は躍起

の心持で、思わず台所を立つて、そつと忍び足に風呂場の羽目はめからのぞいて見ますと、油の乗った年増ぎかりの女の肌。

お吉がふるえた時に、廊下を渡ってくる神尾の声、

「お絹、風呂加減はどうじゃ」

二十二

風呂から上ったお絹が、まだ持ち運んだ荷物の散らかっている一間の中で、鏡台に向つて、髪を直していると、いつか、そのうしろに立つて、障子の外からのぞいている神尾主膳。

なんともいわないで、ただお絹の後ろから、鏡にうつる姿をながめている。お絹もまた、なんともいわないで、念入りに髪をいじっている。

鏡にうつるお絹の面かおに、わざとするような恥かしさ。頬から首筋、後ろへまわした手首までが、乳のように白い。

「お前は、いつになつても年をとらないね」

と神尾がいう。

「こんなに、お婆さんになつてしまいました」

とお絹が答える。

久しく田舎いなかに引籠ひきこもつていた神尾の眼には、この女の姿が、めざましいほど、若くあだつぽく、見えるものらしい。

「ほんとにお前は若いよ、羨うらやましい。拙者などは山の中にくすぶつて、あたら年をとつてしまった」

「御冗談でしょう、御前ごぜんなどはこれからでございますよ」

「盛りは過ぎたな」

と神尾が、自分を嘲るようにいいますと、

「これからでございますよ」

お絹は自分のことをいつているような返事。

「女は幾つになつても廃すたりというものはないけれど……」

「廃つてしまえば見返るものもございませんから、廃らないうちが花でございます」

「お前なぞは、四十になつても五十になつても廃りつこはない」といいながら神尾は、この女は天性、女郎になるように出来ている女だなど、つくづく思いました。

「福兄ふくにいさんも、いよいよわたしが出て来るとなると、泣きました」

「うむ」

神尾は苦いものを飲ませられたように思う。それまではいわなくともよかろう。聞きとうもないことを、女の口から、平氣

で喋り出す恥知らずを、さすがの神尾も呆あきれて、よんどころなく、

「福村も力を落したろう」

「ええ、あの人は、今のところ、わたしがドコへも行けないもの、とたかをくくって、ワザと焦じらすつもりでいたところを、こうして、さつきと片付けて、綺麗きれいに引払って来たものですから、びっくりして、しまいに泣いてあやまりましたよ。お気の毒でした」

「かわいいそうに」

「かわいいそうなことはございません、少し思い上っていたところですから……」

神尾はだまって、お絹の横顔をながめると、緊張のない肌がぼちやぼちやとして、その中に濃厚な乳白色のつやが流れてい

る。これは、たまらない多情者だと神尾が思いました。

こういう女は、生涯、幾人いくたりの男をも相手にすることができら。男から男へとうつり行く間に、前の男をわすれてしまう。だから、こういう女をつかまえて、薄情を責めるのは間違ひである。世には天性、女郎になるように出来ている女があつて、それが境遇上、そのところを得ずに奥様になつたり、お妾になつたりする女があるものだ。この女は、まさしくその一人だと神尾が重ねて思いました。

だからこの女は、浜松に生れて、神尾家に奉公し、先代の神尾に寵愛ちよつあいされたことは忘れてゐる。今日まで一緒に暮らしていた福村のことも、もう忘れかけてゐる。

娼婦の如くもてあそばさるるために生れた女があるものだと、神尾は、今あらたまつたようにこの女の毒に触れました。

そこで、だまつて、障子の中へ入つて行く途端に、自分の面かおが大きくお絹の見ていた鏡へうつるのを見出して、思わずクラと眩暈めまいがしました。

いつになつても、蠱惑こわくてき的な若さを持ったお絹の面と、眉間みけんの真中に大傷を持った自分の面とが、鏡面に相並んで浮び出でたのを見た神尾は、クラクラと眼がくらむのを覚ええました。

「ああ、なんとという醜みにくい面つらだ」

神尾は腹の底から、自分の生れもつかぬ傷を呪いました。お絹の面かおが、見るたびに色つぼくなつてゆくにひきかえて、自分は生涯、人中へはこの面つらを出されはしない。

弁信が憎い。おれの面めんてい体たいにこの傷をつけたのは、あのこま、しやくれの、お喋りの、盲目めくらの小法師の仕業しわざだ！　そこでいつもきまつて、弁信というものを憎み呪うのが例になっている。

「ずいぶん大きな傷でございましたわね」

とお絹も、この鏡にうつる傷の大きさを、いまさら驚いた様子です。

「愛想あいそが尽きるだろう」

「なあに、あなた……」

この舌たるい言葉を、神尾は二様の意味で聞きました。一つは傷などはどうであろうとも、面付かおつきなどは、いかに拙ますかろうとも、男でさえあればたんのう、しますよという意味にも聞え、もう一つはなにそのくらの傷は、あなたの男ぶりの全体には少しもさわりにはなりませんよ、という意味にも聞える。

この傷が癩しやくにさわるから、神尾は、日ごろつとめて鏡を見ないことにしていました。今、こうしてまともなう、つ、さされてみると、一時は、眼まいをするほどに、呪わしさと、腹立たしさを

感じましたが、落着いてみると、それが裏を返して皮肉になり、わざと、見つめるだけこの傷を見つめてやろうという気になり、鏡にうつる傷の面をかおじつと力を籠こめて見つめたものです。

「おれには眼が三ツある」

神尾は自分の面を、まともにながめて、つくづくとそう思いました。

横に連なつた二つの眼は、人間並みに物をかたよらずに見る眼、別に出来上つたたて豎の眼は何を意味する。

「何を、そんなに見つめていらつしやるの」

お絹がいうと、

「これを、これを」

神尾は、さも痛快な心持で、眉間の傷を指さしました。最初はその傷を見るのが呪いであり、その次には皮肉であり、今は

痛快な心持で指を突込まんばかりに、さして見せますと、

「悪くはありませんけれど、御自慢にはなりませんわ」

とお絹がたしなめるようにいきました。けれども、神尾主膳は、それにしよげないで、カラカラと笑いました。

その有様は、急に嬉しくてたまらない心持になったようです。たとえば、世間には両眼の見えないものもある。片眼しか用をなさないものがある。最も念入りにこしらえた人間とて、二つ以上の眼は与えられていないのに、自分に限って三つの眼を与えられたことを、喜び躍るかのように見えます。今の先まで、呪い、憎んでいた額の大傷が、何かその喜びに堪えない暗示を与えたもののように、面かおの色まで生々としてきました。

「何がそんなにお嬉しいんです、やんちやな若様」

お絹は、その昔、自分が可愛がつてお守をしたことのある、こ

の若様を可愛がるような心持になります。

この殿様は、駒井能登守のように水の垂れるような美男とはいえないが、決して醜男ふおとこの部類ではない。とりようによつてはにがみぼし苦味走つて可愛ゆいところがあると、お絹もそう憎い人とは思つていなかつたし、神尾もやくざだけに碎けたところがあつて、どうかすると、やんちやな坊ちゃんぶりを發揮するのを、お絹は可愛がつてやるつもりでいました。

山住居やまずまいして、一時行いすましていた神尾主膳は、ここで、境遇の変ると共に、また心持までも逆転したのは浅ましいことです。

お絹がここへ押しかけて来るまでには、さまざまの表裏もあれば魂胆もあつて、糸をひく奴もあるし、引かせる奴もあつて、お膳立ては以前から、ちゃんと出来ていたものです。それをそ

の間際まで知らなかつた福村が、氣の毒といえば氣の毒。未練の充分にある、自分には過ぎ者の女に置いてけぼりを食つて、事實、お絹のいう通り、別れる時は泣いてあやまつたかも知れません。

お絹としては、早く、あんな男と手を切つてしまいたかつたが、いま手を切つては自分の身の落ちつきに差当つて困るから、いいかげんにあやなしていたので、神尾の江戸入りがきまると、自分の運命もきまるように計画を熟させておきました。

そこで、福村をうつつ、やることができ、こうして、いい氣持で乗込んだのもかなりに凶々しいが、今までの身持を、この際すっかり忘れて、平氣でそれを引寄せて、うれしがっている神尾も神尾です。

そうかといつて、お絹とても、この神尾が永久に頼みになる

人間とは思つてしまい。あれも一時ひととき、これも一時で、その場、その場の足がかりさえあれば、前後のことは考えておられない——といつてしまえば、それまでですが、神尾は知らず、お絹としては、ここへ乗込んでくるまでに、また考えたこともあれば、ひそかに蓄えた野心もあるので、神尾をあやなしながら、まだまだ自分を捨てた気にはなりません。仕事はこれからですよ、と口に出してもいつているくらいだから、心では油が乗っているし、第一その相手欲しい肉体が、絶えずそれを物語っているのをどうともすることができません。

今、お絹の胸に蓄えられている野心の一つを打割つて見ると、どうしても元の駒井能登守、今は駒井甚三郎をとり、こにしてやらねば虫がおさまらないといういきはりがあるのです。

この女は、甲府にいる時分から、駒井に気があつたのは事実

で、ついにそれが成功するに至りませんでした。あの時分は生来の浮気がもとで、自分の腕にかけての自信というようなものも加わって、評判になるほどの男を自由にしないまでも、その心をこちらへ向けて焦らすことに快感を覚えるという程度のものでありました。それが思うように利目ききめがないと見ると、今度は自分が焦れ出して、なあに、いつか一度はこつちのものにして見せるといった腹でいるところへ、例の間違ちがいが持ち上って、とうとう、駒井も、神尾も、両倒れの体ていで、甲府を引上げるようになつてしまつたから、お絹としては、未練というようなものが残つて、おりにふれてはむむず、搔かゆい思いにたえられなかつたのです。

ところがどうでしょう——このごろ聞けば、その駒井能登守を、人もあろうに女軽業の親方のお角がとりここにしている、と、

り、こにした上に金を絞つて、興行の旗上げに使っている——という噂を聞いたものですから、お絹が躍起になつたのも無理はありません。

堅いようでお目出度い殿様——人交わりのできない女を相手にして、れつきとした家柄を棒に振つてしまふし、今度はまた女軽業の親方風情にほんろう翻弄されて、おまけに大金をつぎこんでいる。それほどのたあいがない殿様を、自分の手に入れることができないとあつてみれば、意地にも我慢にも腹が立つ。それに、お角という女、何かにつけて自分に楯をつくのみならず、ややもすれば自分を取つて押えて、上に乗ろうとするような仕打ちを見せるのが癩しやくだ。

どちらからいつても、この分には済まされぬ。そこで自分の自信も満足し、お角という女をとつちめる、最上の策は、駒井

能登守を生捕いけどることだ。そうすれば一挙両得で、戦わざるにお角の陣営は崩れてしまう。こうして神尾を当座の足場として置いて、お絹のこれからの仕事は駒井を生捕いけどということに集中させる。まだ整理しきれない座敷の中で、その晩お絹は、行燈あんどんの下に机を置いて、一心に手紙を書き出しました。

二十三

青梅おうめの裏宿の七兵衛は、この時分、裏宿の家におさまって、雨降り仕事に、土間へむしろを敷いて、藁わらを打って、しきりに草鞋わらじをこしらえておりました。

こうして、あたり、前の百姓家におさまって、雨降り仕事に草鞋をこしらえているところを見れば、だれが見ても、あたり、前

の百姓で、これを稀代きだいな盜賊と見るものはありません。

七兵衛自身も、その本心をいえば、どのくらい、このあたり、前の百姓を有難いことだと思つてゐるか知れないのです。そうして、あたり、前の百姓になりきれない自分というものを、こういう際には恨みにも思うほどに、心もおだやかなものでありません。

多年、誰とて、自分の内職をあやしむものはないようなものの、いつまで、この隠しごとが現われずにいるものではない。早晩、三尺高いところへ自分の首がさらされる運命きたの来ること。を思えば、いい氣持がするものではありません。

自分を、あたり、前の百姓で置くことをゆるさなかつた第一のものは、女房をもらいそこねたということ、第二は、持つて生れたこの早い足のせいであると、七兵衛はよくそれを吞込ん

でいる。あるいは第一のものが、第二のものより先に、自分の方向をあやまらせたのではないかとさえ思う。

女房を持ちそこねたという第一の不運は、残された子供をすててしまったという第二の不運となり、その不運と不幸をなぐさめるために、持ち前の早足で、諸方へあそびに出てみたのが、第三の横道を教えてしまいました。

人はその不能に溺れおぼずして能に溺れる、とは、よく寺小屋の先生から聞いた言葉であるが、七兵衛もまたつくづくその真理であることを感ずる。

自分の早足で歩いてみると、世間並みの歩き方が馬鹿に見えて仕方がない。これがそもそも、七兵衛の邪道を行く最初の慢心でありました。この早足を利用して、人間ののろまをねらうことに味を占めた七兵衛は、一步一步とその興味にハマリ込ん

で、今はぬきさしのならない玄人くろうとになつてしまいました。

しかし、なお一方に残された三分の聡明性は、よく、裏と表とを塗りかくして、いまだ誰人たれびとにも、そのボロを見せないだけの横着と、細心とを保っているのです。

ですから、誰が見ても、表面はあたり、前の百姓で、百姓の間まにその早足を利用して、尋常茶飯じんじょうさはんの如く、京鎌倉までも出かけてくる余裕が、近隣の百姓たちを羨うらやませておりました。その実、七兵衛の本心では、自分の能を羨うらやましく思う百姓たちの不能を、羨うらやましく思うことばかり多く、あたり、前の水呑百姓で、コツと畑を打つて、女房子供を食わせていつて、一生を終ることができれば、これに越した幸福はあるまいと、今も草鞋わらじをつくりながら、つくづくとそれを考えているところでありす。

十八史略までは素読そどくを授かつた覚えのある七兵衛は、「我をし

て洛陽らくよう負郭ふかく二頃にぎようの田でんあらしめば、いづくんぞよく六国の相印しよういんを佩おびんや」という文句を聞いて、それはおれの家に二反の畑さえあれば、いまさら六国の相印を佩びて苦勞するにもあたらなかつたにと、嘆息したものだと解釈して、夜学ろうばいの先生を狼狽ろうばいさせたこともあるのです。

事実、七兵衛にとつては、世間の人のすべてが欲しがる金銀財宝は、無条件で手に入れることもできるし、また世間の人の羨ましがる名所ゆさんも、氣の向くままにやってのけられるのだが、自分としての幸福や愉快は、そこには得られないで、こうして、あたり前の百姓として藁わらを打っているところに、無上の平和と愉快のあることを思えば、世間の見るところと、求めるところと、本心のそれとは、みな逆さかにいつているものだとしか思われなないのであります。

こうして七兵衛は、自分の早足を載せる草鞋をつくっている。雨は小やみなく降っている。近隣はいと静かで、裏の娘が織る機はたの音さえ、かえって物わびしい風情を添えるばかりです。

その機の音を聞くと、七兵衛は、あの娘も年頃になったが、間違いのないうちに、早くよいところへ嫁かたづけてやりたいものだと思いました。

そうして七兵衛は、その昔、自分が青梅街道へ捨てた子供のことまで考え出して、いま、無事に育つていれば幾つになると、草鞋をつくる手を休めて、その指を折つてみたりなどしました。無事に育つて、日傭取ひようとりかせぎでもいいから、こくめいに働いてさえくれればよい、間違つても、おれのように足が早く生れついてくれるなど心配しました。

非常な生活には、非常な警戒心が要るから、人を恋しがると

うな余裕は薄らぐのに、きょうはあたりまえのところへ置かれて
いるから、あたりまえの人情が湧くと見えます。

「こんにちは……」

さいぜん、はたおと機音がやんだなと思つたら、いま、裏口に訪れた
のは、その若い娘の声にちがいないと思ひましたから、七兵衛
が、

「はいはい」

膝の上の藁をわら払つて立とうとすると、娘は早くも前の方へま
わつて来て、

「よく降りますね」

傘をさして、手には小笊をこざる提げております。

「よく降るこつてすね」

七兵衛も相槌をあいづち打ちますと、

「おじさん、お薯いもをふかしたから一つ持つて来ましたよ」

「それはそれは」

七兵衛はおおよろこびで、娘のさしだした小箆を受取ると、中にはおさつつのふかし、立てが十ばかり湯気を立てています。

「どうも御馳走さま」

「どうぞ致しまして」

「まあ、話しておいでなさいませよ」

「ありがとうございます」

娘は、ちよつと立ちまどどううていましたが、

「また参りましょう」

「そうですか、では、また話しにおいでなさいな」

「ええ」

七兵衛は、小箆の中へ付木つけぎを入れてかえすと、娘は、それを

持つて帰つて行きました。

再び膝を組み直した七兵衛は、ぼんやりと娘の帰つていったあとを見送つて、

「うむ、いい娘になつたなあ、少し見ないでいるうちに……」
ハチ切れそうな娘ざかりの肉づきが、この時ひどく七兵衛の目に残りました。

今まで、女というものの存在をわすれてでもいたかのように、七兵衛は、今の娘を帰してしまったことを、なんとなく残りおしくてたまらない心持になつて、無理にひきとめて、京大阪の話でも聞かせるのだつたのに……

そういえば、娘もなにか物欲しそうに来ていた様子……上手じょうずに言えば、いくらでも話し込んでいたにちがいない。

いつたい、おれは女には気を置き過ぎる……と七兵衛が自分

を齒痒はがゆく思つたのはその時で、腕を振えば、いくらでも振える機会を、ついその場になると、かわいそうになつたり、冷淡になつたりしてしまふ。

盜賊を商売にするものには、物を盗むのを二の次にして、女を自由にするのを得意にする奴がある。七兵衛は、そうなれない。物を盗とるのは償つぐないがつくが、女を辱はずかしめるのは罪だ……といふような氣に制せられるのを、自分ながら不思議に思う。

娘はかわいそうだ、主あるものは罪だ……その時、七兵衛の頭に、むらむらと湧いて来た面影おもかげは、神尾主膳のところにお絹という妖婦ようふのことでもあります。

あの女ならば、いくら弄もてあそんでも罪にはならない……おれはいたい、あの女とずっと以前から近づきになつていたのに、いらぬ遠慮をしていたものだ。あとから出た百蔵あたりが、かなり

甘つたるい言葉づかいをするのに、それをあざ笑つて高くとまつていたおれは、淡泊なのか、それとも意気地がないのか。

七兵衛としては妙な心に動かされました。

雨のやむのを待つて七兵衛は旅仕度をととのえて、わが家を立ち出でました。まず江戸をめざして行くのかと思うと、そうではなく、南の方へ向いて、ほどなく武州の高尾山へつきました。七兵衛は、高尾山の飯綱権現いづなごんげんを信仰して、時々おまいりをしては護摩ごまを焚いてくることがある。七兵衛の飯綱権現信仰の心持はわかりませんが、ここへおまいりをするのは、今に始まつたことではありません。

本道から、登りにかかると、ちょうど入口のところへ人夫が大勢入つて、しきりに大木を伐り散らしていますから、七兵衛

も思わず立ちどまつて、

「おやおや、たいそう材木をお伐りなさるが、どうなさるんですか」

と人夫にたずねてみますと、人夫が、

「ここへ道を開いて、車を仕掛けようというんです」

「え、ここへ道をつけて車をしかけるんですか、道はこつちにいい道があるじゃありませんか」

「そつちの道は、そつちの道として置いて、別にこつちへつけようというんだ」

「なるほど……」

七兵衛が仰いで見ますと、これからずつと山の上まで、さしもの大木を伐り倒して行こうという計画らしいから、心なき七兵衛も惜しいものだという気になって、

「惜しいじゃありませんか、この大木をドンドンお伐りになつては……」

「よけいなことをいいなさんな」

人夫頭が憎さげな眼で七兵衛を見ました。七兵衛は頓着せず、
「全く、これを伐つてしまうのは惜しうございますよ、なんとか工夫はないものですか。第一車を仕掛けて、どうなさろうというんで……」

「そんなことは知らねえよ、おれたちは伐れというから、伐つているだけなんだ」

「なるほど……」

七兵衛はなお立去らず、大木の森をながめていると、

「おいおい、邪魔になるから向うへ寄つていな」

人夫頭が叱ります。七兵衛は二足三足、わきへ寄つて、なお

物惜しそうにながめていると、人夫たちが、からかうように、「おい、お前さん、何かこの木を伐きつて文句があるなら、おれたちにいったつて仕方がねえから、お宮へでも、お寺へでも尻を持つて行きな。おれたちは、ここを伐れといえ、ここを伐れといえ、あすこを削れといえ、あすこを削る、おゆるし通りに仕事をしている分のことだぜ」

そこで七兵衛は沈黙してしまいました。

七兵衛のような心なき盗賊でさえも、これはあまり無茶なことだと思いました。この山は、お宮とお寺とで管理している山。

お宮は樹木が御神体のようなもの。昔の出家は木を植えて山をそうごん莊嚴にしたのに、何の必要あつてこうしてムザムザ木を伐つたり、山を崩したりするのだろう。車を仕掛けるのだといっているが、わからないことだ。もとよりこの連中は、いいつけられ

た通りにしているのです、この連中に向つて文句をいつても仕方がないが、上に立つものが、もう少し目が見えそうなものだと思いました。

話の模様では、ここの木を伐つてみていけなければ、またほかのところを、おゆるしが出ることになつていゝらしい。立派な山を疵物きずものにして、車を仕掛けなければならぬ理由が七兵衛には少しもわかりませんから、コイツ山師共が、何かの口実で、木を伐つて金儲けかねもちをするのだなと思ひ込んでしまいました。祖先以来莊嚴にして置いた名山を、食い物にしようとする人間の浅ましきはさて置き、管理するお宮とお寺とが、これではなさないと思ひます。

七兵衛は天成に近い盗賊だが、それでも、これだけの冥利みょうりは知つてゐるのです。

七兵衛はまた、時として、優れたる家相学者であることもあります。

その仕事の都合上、どうしてもまず家の形勢を見てかかることから、自然に会得えとくした家相の知識にも、相当に聞くべきものがあるのであります。

その説によると、主人がしつかりしていて、家中が気を揃そろえているところには、家相におのずから弾力があつて、忍び込めないうことになっている。よし忍び込むことができても、その獲物えものが僅少であつて、犠牲が多いことになっている。これに反して、主人が惰弱だじやくで、家風が衰えている家は、いかに構えがおごそかでも、家相というものが、隙だらけで、そこへ忍び込んで仕事をたやすするのは、極めて容易たやすなことになっている。

七兵衛にいわせると、これは、個々の家相のみではない。彼

が国々を出没してあるくうちに、おのずから、その領主の氣象や士氣が、風土の上に現われるのを見て取ることができる。

領主が賢明にして土風が振うところは、城内の樹木の色まで違う。国が盛んに、人氣の和やわらいでいるところでは、必ずその封内の神社仏閣を大切にし、樹木が鬱蒼うつそうとしている。貧弱な国ほど領内に樹木が乏しい。よい樹木があつてもそれを伐りたがる。

神主や坊さんたちも、人物が優れているほど、境内けいだいの風致の莊嚴そうげんを重んずるが、それが墮落すればするほど、境内を荒したり切売りしたりする。

国として靈山を伐きることをゆるしたり、神社や仏閣で、その境内きんに疵きずをつけたり、また個人としてその屋敷内を切売りするようになつてはおしまいです。

「亡んだ国に、山の青い国はない」という真理を、七兵衛は、それとなく知っているわけなのです。

そこで、坊へ着いた七兵衛は、案内に向つてこのことをたずねてみると、案内はかえつて自慢らしく、

「おかげさまで、ああして木を伐り払つて新しい道が開けますよ。あれが出来て車を仕掛けますと、女子供までのぼるのが楽になりますからな、そうなるとお山も繁昌致します、お寺も収入みいりが多くなるというわけで、トカク、近頃は金でございますね」

七兵衛は、それを聞いて呆氣あっけにとられました。そうすると案内は得意になつて、

「みやかた宮方のお役人も、よく話がわかるものですから、直ぐに許してくれます。一旦、木を伐つてずいぶん売つて儲けましたが、そこが都合が悪いので、今度は少し遠くなりますがこつちの方へ

廻しました。なあに、ここでいけなければ、また別なところを許してもらいますからね。おっつけ、あの切崩しが済みますと、じかに車がしかかりますから、あんた方の骨の折れるのも、もう一息のところでございますよ」

そこで、七兵衛はいよいよ驚かされました。このくらいの山道は自分のような足の達者な者でなくとも、骨が折れるとは思われない。

寺を繁昌させたいならば、山を傷物にしないで、お寺を市中へ卸したらよかろう。この連中にまかせておいては、しまいは山をどういうことにするかわからない。今のうち警告を与えておかなければならないと思いましたが、警告を与えたところで、どれだけ利きき目があるか、あやしいものだとも思いました。こんなことを考えながら、七兵衛は、その晩は高尾の

坊へとまることになりましたが、そこで四五人づれの奇異なるあいぎやく相客と落合いました。七兵衛が、その連中にたずねてみると、その連中はかみがた上方から下る神樂師だといっていましたから、そのつもりで話を合わせていると、七兵衛には、どうもこの連中が神樂師だとは受取れなくなりました。

いつたい、神樂師にも、いろいろの種類があるだろうから一概にはいえないはず。それでも禁裡きんりに由緒ある本格の神樂師ならば、こうして浮浪の大神樂だいかぐらみたように、軽々しくは通るまい。そうかといって、大神樂師にしては、この連中、品格があり過ぎる。家相山相を見ることに敏感な七兵衛は、また人相を見ることにも敏感なのは、商売柄ぜひもありません。

七兵衛はこの四五人連れの神楽師を、只者ではないと睨みま
した。

いずれも、黒い着物を着て、博多の帯をしめたところは、あ
たりまえの旅芸人のようにも見えますが、少し話をしてみれば
直ぐにわかることで、ことに七兵衛のように諸国を飛び歩いて
いる者には、国々のなまりが、争われない符帳ふちようです。

そうかといつて、めいめいの話を聞いていれば、やはり歌舞
音曲に関することが多いので、この点は七兵衛も、ちよつと測
り兼ねているところゆかそうじようです。

「当山には、湯加僧正ゆかそうじようという声明しやうみやうの上手がおられたげな
と一座の長老がいう。

「湯加僧正は、このほど、京都の智積院ちしゃくいんへ帰られたそうな
」

その次のがいう。

「それは惜しいことを致したわい、僧正がおられたら、お目通りをして声明秘伝しょうみやうひでんを伺いたいものと思つていました」

「残念なこつちや」

その話しぶりは、おのずから型に入つてゐるが、それはこの連中だけで特にこしらえた型らしい。そういう型をこしらえたのは、つまり、おのおのの生れ国のなまりなまりをゴマかすためだと、七兵衛が早くもかんづきました。

しかのみならず、この連中、よく見れば見るほど生え抜きの神楽師ではない。神楽師でないと思つて見直すと、町人にも、百姓にも、そのほかの遊芸人にも見えない。どうしてもさむらいである。さむらいだと思つて見ると、面めんずれもあれば、竹刀しなたいダコも見えるというわけで、七兵衛は、とうとうこの連中を、上

方から神楽師に仮装して、江戸へ乗込むものだと言定をしてしまいました。

そうしてみると、七兵衛のように、浪人たちの表裏をくぐつて来た人間には、何の目的で、西から来て東へ下るのだから、おおよその見当をつけるに骨は折れません。

そこで、ひとつ探りを入れてみる気になりました。

「あなた方は、お江戸は、ドチラまでおいでになりますか」

「はい、江戸は芝の三田四国町というところを、たずねてまいりますのじゃ」

「三田の四国町へおいでなさるのでございますか」

「四国町の薩摩さんのお屋敷へと、たずねてまいりたいと思ひましてな」

「え、四国町の薩摩様……」

といて、七兵衛が、それからあと、「こいつは大変な代物だ」と口の中でいいました。しろもの

その三田の四国町の薩摩屋敷は、今天下の風雲をねらうもの巢になつてゐる。これを七兵衛はよく知つてゐる。そこへ乗込もうという神楽師ならば、これは探りを入れるまでもない、きんぱくつ金箔付きの神楽師だと思ひました。

しかし、また、仮りにこうして姿をかえてまで江戸へ乗込もうという連中が、その行く先をアケスケに、薩摩屋敷だといつてしまつたのでは正直過ぎる。

これは多分、自分が見る影もない百姓だから、この位は打明けてもさしつかえないとタカをくくつたのかも知れない。

その晩、七兵衛がこれらの連中と枕を並べて寝た夜中に、ふと胸に浮んだことがあります。それはほかでもない、このごろ、

この武蔵と、相模と、甲州方面の境で、夜な夜なしきりに怪しい神楽太鼓の響きがする——賑やかな囃子はやしを追うて行つて見ると、その影を捉えることができない。七兵衛も、どうかするとそれにでつくわせたこともあるが、わざわざ尋ねてみようとも思わなかつたが、この時ふと胸に浮んだのは、その怪しげな囃子の音こそ、これらの連中の仕業しわざではあるまいか、どうもそのような気がしてならぬ。

無事にその夜が明けて、いざ立つという時に、七兵衛が、右の神楽師の連中に向つて、私も江戸へ参りますから御一緒に、とさあらぬ体ていにいい出すと、神楽師の長老がジロリと七兵衛をながめ、

「何卒御一緒に……して、お前さんの御商売は何ですか」

商売は、と聞かれて、七兵衛はギクリとしましたけれど、

「ええ、近在の百姓でございますけれど、百姓が嫌いなもんですから、つい……」

と言いました。つい、どうしたのだか、それは自分ながらわかりません。

事実、七兵衛は百姓が嫌いではないのです。どちらかといえど好きなのです。青空をいただいて、地上へ自分の労力の一切を尽し、実りを天の風雨に待って争わぬ仕事を、愉快なりとしています。それで自分もけっこう一人前の百姓をやるだけの腕は持っているのです。ですから、旅先で、二宮流の講義などを聞いていると、つい感心してしまつて、自分も、どこか、広々とした野原へ出て開墾をして、そこに自由な新天地を開いたら、どのくらい愉快だろうと空想することもあるくらいですから、百姓が嫌いといったのをクス、ぐつたく思います。

さて、右の四五人連れの神楽師の旅装を見ると、笠をかぶり、きやはん脚絆、こうがけ甲掛に両がけの荷物、ちよつとお鷹匠たかじょうといったようないで、たちですけれども、脇差を一本しか差してはおりません。

七兵衛は同行しながらも、この中のドレが親分だろうと鑑定を試みましたが、結局ドレが親分という様子もなく、ドレが子分だという関係もないようです。

七兵衛は、またこの親分子分という関係がだいきらいなので、親分子分というものは、きょうかく侠客とかバク、チ、打ちとかいう社会にはなくてはならぬものだろうが、世の中が進歩すればするほど、それがなくなるべきはずだと信じているのです。

親分と立てられたいために、ツマらないみえや犠牲を払い、子分はまた親分に養ってもらうために、無理をしてまで親分に箔はくをつけようとする。親分は無理をして子分をカバおうとする。

自分は無理をして親分を立てようとする。そういうのを美談のように考えているのは大間違いで、その道によつて長者と先輩は尊敬しなければならぬが、親分子分の関係を作るのは愚の至りだと信じているのです。ですから、上方かみがたへ行つて本願寺のお説教を立聞きした時も、ほかのところの有難味はよくわからなかつたが、「親鸞しんらんは弟子一人も持たず候」といった一句に、ヒドク共鳴して、いわゆる御開山様なるものはエライと感心して帰つたことでもあります。

ところで、この神楽師の一行は、親分子分の愚劣な関係を復習して、得意がつている連中ではなく、おのずから和して同ぜざるの見識があるように思われる。

こうして七兵衛は、江戸へ行くまでの十五里の行程を、この連中の観察と研究とを題目として行くつもりで出かけますと、

ほどなく例の木を伐り払って、山を崩しているところまで来ました。

ここへ来ると、一行がたちどまって、

「おお、木を伐っています」

「おお、山を崩しています」

といて眼を円くしてたちどまり、

「木を伐って何をするのだろうか」

「山を崩して何をするのだろうか」

いずれも合点がてんのゆかない体ていですから、七兵衛が、

「車を仕掛けるのだそうでございます」

「車を仕掛ける……車をしかけてどないにしないのじゃ」

「車を仕掛けて、上り下りの都合のよいように致すのだそうで

ございます」

「じゃというて、あたらしい美しい樹木を伐り倒し、整うた山を掘り崩し……」

「つまり、お金儲けかねもうのためでございます」

「お金儲けのためでなければ、こんなところへ車を仕掛ける理由わけがわかりません」

「けしからん」

一行のうちの、最も無口で、背が低くて、眉宇びうの精悍せいこんなのが、掘崩しの前のところまで進んで出ました。

「惜しいものです、大木を惜しげもなく伐り倒し、山の形を掘り崩し……」

七兵衛がいますと、右の男がまたしても一步進み出して、「けしからん」

七兵衛は一步しりぞいて、この男の挙動を見ました。この男

は本当に憤おこっているようですから、人間は本当に憤おこると、生地きじを隠おこすことができずだと言いったからです。

掘り崩した崖がけの上まで進み出た右の一人は、

「一体、その必要もなきところへ、金儲けのための無用の工事を加えるというのは、俗界にあつても許すべからざることであるのに、身、僧侶にありながら、多年、その山の恵みに生きながら、それを切り崩して金儲けをもくろむとは言語道断ごんごとうだん……一体、仏寺なるものが、その祖師の恩恵によつて過分の待遇を受け、広大な領分を持ち、諸方の勸化かんげを貪むさぼりながら、なおそれにあきたらず、開山以来、尊重したその山の樹木を伐り、山を崩して、金儲けをしようとは何事だ」

空谷くうこくの中に立つて、この男がこう叫びました。七兵衛は、よく聞いてくれた、もつと何かいって下さいという感じがしてい

ると、

「誰がこの樹木を伐ることを許したのだ、誰がこの山を切り崩すことを許したのだ。ナニ、宮方みやかたの役人が……宮方の役人とは寺社奉行のことか。ここは江戸を距さること僅かに十余里、お膝元も同様なところではないか、寺社奉行の威光がここまでも及ばないのか……ナニ、一旦、向うの方の材木を伐つて売り払い、そこがいけないから、今度はこちらを切りくずしにかかったのだと、山を何と心得ている」

この男の髪の毛が、上へ向いて来たのを認めます。その時、長老が出て肩をたたき、

「まあ、さのみ憤いきどおりたもうな、天下に憤るべきことは多いのに、僅かこの一小事……」

となだめにかかったのを、右の男はききませぬ。

「いや、世には大事に似たる小事もある、小事に似たる大事もある、斯かよう様なことは一小事ではござらぬ……利益のために己おのが山をこわす輩やからは、利益のためには己が国をも売る輩でござる。昔は天津橋上に杜鵑とけんの啼ないたのを以て、天下の変を知つたものがあるではないか。お膝元から僅か十五里のところ、無残にも靈山を食い物にしている、それを抑えることができない……」

ここに至ると、神楽師かぐらしの仮面は、遠慮なく剥落はくらくしてしまい、「モシ、われわれが天下を取つた暁には、廃仏毀釈はいぶつぎしやくを断行する」とさげびました。

この男は仏教そのものも多少は知つてゐるし、また仏教そのものが日本の文明に寄与した功績も多少心得てゐるらしいが、現在の仏寺と、僧侶の腐敗をもかねて、大いに憤慨してゐたものらしい。これよりいくらかもたたない後に現われた維新の政府

が、かなり無遠慮に廃仏毀釈を実行したのも、一部分の責めは坊主が負わなければなりません。七兵衛はその時、おだやかにこういいました。

「左様でございますね、モシ、山師共がお山を食い物にしようとかかりまして、宮方のお役人と、お山の坊さんとは、よくそれを教えさとして、思いとどまらせるようにしなければならぬはずのものだと私共も思います」

切り散らし、掘ほつくりかえしている事の体ていを見て、一同のものが白け渡りました。

その時、高尾山の麓ふもとの茶屋では、半ぺん坊主が一杯飲みながら、

「占しめ占め、こう来なくつちやならねえ」

といって、さも嬉しそうに、山を掘り崩しているところをなが

めては、半ぺんを肴さかなに、頻しきりに盃を傾けておりました。

半ぺん坊主は、京都あたりから来た風来坊主で、高尾の寺に籍があるわけでもなんでもないが、この近所へ草庵ようのものを構えて、ぶらぶらと暮らしている。

半ぺんが大好きで、半ぺんを肴に、酒を飲ませさえすれば上機嫌で、何でも喋しゃべり出す。そこで半ぺん坊主で通つて、誰も本名を知るものがありません。

「さあ、いよいよ望みがかなつて、近いうちにこの上まで車が、カラカラッと勢いよく舞い上るから見ていてごらんなさい、景気よく、カラカラッと上るところをごろうじろ……」

といって、ブクブク肥つた身体からだを一つゆすり、

「カラカラカラッと景気よく……」

半ぺん坊主は山をくずずして、近いうちに車がしかかるのが嬉

しくてたまらないらしい。

「この間はまた、伐り倒した大木を、きかいのこ機械鋸にかけてキリキリキリツと音を立てさせていたが、あの音がまた甚だ結構……ああいうのを聞いて飲むと、酒がひとしお旨うまく飲める……」
といて、うまそうに一杯飲む。

この坊主の理窟によると、昔の名僧智識が、わざわざ寺を山の上へ持つていったのは昔のこと、今の宗教は、なるべく民衆と接近しなければいけない、それをするには、どんな靈域でもカラカラカラと車を仕掛けるに限る、という持論から、今度などもずいぶん運動に骨を折りました。

そこへ二三人の人夫が、立札を荷になつてくる。

「御苦勞、御苦勞」

半ぺん坊主が、こちらからねぎらうと、人夫はちよつと笑つ

ただけで、土を掘つて立札を立てにかかる。

その立札には、「杉苗何百本、何千本、何の誰」と一枚一枚に書いてある。

「は、は、は、は」

半ぺん坊主は、思い出したように高らかに笑い出し、

「高尾では、あの杉苗をいつたいドコへ植えるんだと、この間、まじめに聞かれたんで、わしも弱つたよ」

杉苗寄進の立札が、半ぺん坊主には、なんだか急におかしくなつたものと思われる。

この山では、何町の間、隙間もなく、杉苗寄進の札を立ててはあるが、ドコへその杉苗を植えるのだから一向わかつていない。

「お愛嬌あいぎょうですよ。あれをお前さん、正直に受取つた日には、一年に関東八州が三ツあつたつて足りやしませんよ……植える方

はどうでもいいが、切る方はせいぜい切らしていただいて……」
半ぺん坊主は、額を丁と叩きました。

「切る方はせいぜい切らしていただいて、カラカラカラッと景気よく……ナニ、一木一草をも愛護して下さいだつて、木を傷つける人があつたら止めて下さいだつて……笑いごとじゃありませんよ、木を伐らないで車が仕掛りますか」

半ぺん坊主はこの時、腰衣こしころもの上へ酒をこぼしたので、あわててそれを拭い、

「もつとも、これについては、かれこれと、やかましくいう奴もあるにはあつたが、わしが行つてお役人を口説くどいて来ると、ああ、いいともいいとも、こつちを伐つていけなければあつちをお伐り、それでいけなければこつちをお伐り、いいとも、いいとも……で話が忽たちまちに出来上つてしまったのさ」

半ぺん坊主が得意になつているところへ、例の神楽師の一行と七兵衛とが通りかかったので、坊主は酔眼をみはつて、その一行をながめ、

「公儀お鷹匠たかじょうのような奴が通らあ、いやにギスギスしてやがらあ」

といつて半ぺん坊主は、半ぺんの残りを、さも旨うまそうに食べました。

二十五

高尾山ではこうして、山を崩したり、木を伐つたりして嬉しがつている一方、武州の御岳山の下では、水車番の与八がしきりに木を植えておりました。

与八は、「木を植えるのは徳を植えるなり」という理窟を知らない。ただ土地が明あいていては勿体もったいないから植えておこうという心がけで、木を植えて山を青くするそのことが楽しみなので。また何本植えて、何年たつて、いくらに売れるということも知らない。植える傍から植えたことを忘れてしまつて、育てることだけは忘れない。

木を育てることの好きな与八は、また人の子供を育てることが大好きです。郁いくたろう太郎を育ててみると、その苦しみのうちに、いうにいわれぬ楽しみがあつて、子供というものはほんとうに可愛いものだと身に沁しみています。与八が、ほんとうに子供を可愛がるものですから、子供たちもまた、与八に懐なつくことは大変なもので、いつも、与八の仕事をする周囲には、五人十人の子供が集まつていないということはありません。

郁太郎も、今では乳ちばなれもしたし、人に預けなくても、遊びに来る子供が守もりをしてくれるから、自分の仕事もよく手が廻ります。仕事の合間、与八は海蔵寺の東妙和尚について、和讃わさんだの、経文きょうもんの初歩だのというものを教わります。それと共に、東妙和尚の手ずさみ、をみよう見真似みまねで彫刻をはじめました。そこで、与八は学問の初歩と、美術の初歩というものによろやく興味を覚えてきました。

この興味は、与八をして教育の世界に、一つの驚異を見出させたようです。自ら教ゆる間のみが人を教ゆることができる。与八のこのごろは、熱心なる学問好きになつてるところから、自分の周囲に群がる子供たちを見ると、どうもこのままでは置けないという気になつて仕方ありません。見るところ、これらの子供たちは、自分の過去と同じように、なんらの教育を受

けることも、受けさせる設備も出来てはいないようだ、どうかしてこの子供たちのために、寺小屋様のものを設けて、自分も共に学びたいものだ」と痛切に思いつきました。

そうかといつて、自分には今それをする余裕もなければ、質問の力もない。そういう時に与八が、いつも思い出すのはお松のことです。

「お松さんが来てくれればいいな」

と与八は、いつもそれを思い出すのですけれども、それはトテモ出来ない相談だと思いかえすのが常でありました。

ところが先日、相生町の老女の屋敷に久しぶりでお松をたずねてみたところが、お松もまた、思いがけない一人の子持ちとなっていて、おたがいに力を合わせて子供を育ててゆきたいというような話をしたことから、与八はその話を進めて、お松を

ここに呼び迎えてみたいと気が進みました。

ある日、与八は水車小屋から程遠からぬ主人の屋敷へ出向いて、ふと、物置同様になつている剣術の道場の前に立ちました。

机の家の屋敷は、定まる当主とでもありませんから、すべてにおいて、与八が監理人のようなものであります。親類の人が時々来ては見て行きはしますけれども、小さな城廓じょうかくほどもある屋敷を、ともかく、これだけに手入れをしているのは、与八の働きといわねばなりません。

そこで与八が、剣術の道場の前に立って考えたのは、ひとしきり、この道場から、甲源一刀流の、音無しの構えなるものが起つて、幾多の剣士を戦慄せんりつさせたという思い出でもありません。また、この道場から宇津木文之丞との争いが起つて、それから黒い風が吹き、白い雨が降り出した今日までの一切の経過でも

ありません。その時代はもう過ぎてしまつて、今、与八がこの道場の前に立つた時、ふと思いついたのは、これを利用して、お松さんと共に、多くの子供をここへ集めて育ててみたいなという希望であります。

与八が道場の庭を掃いていると、そこへ突然姿を現わした旅のさむらい。

「少々、物をたずねたいが、机竜之助の道場はこれか」

「左様でございます」

与八は、ほうき箒をとどめて、さむらいの問いに答えました。

「主人は留守か」

「はい」

「代稽古はいないか」

「おりませんでございます」

そこで、旅のさむらいは残り惜しげに道場のまわりをうろついでいるから、

「まあ、お休みなさいまし、ただいまは誰もおりませんけれど、道場を御覧になるならば、あけてお見せ申しましょう」

と与八がいますと、さむらいはよろこばしげに、

「それは有難い、せつかくのことに道場の中を一見させてもらいたい」

与八が裏の戸口から入って、道場をあけてやると、さむらいは草鞋わらじをとって、道場の内部へ入って来ました。

「ははあ、なかなか結構なものだ」

と道場の内部の整っていることを見て、旅のさむらいは感嘆し、

「誰も代つてこの道場を預かるというものはないのか」

「どなたもございません」

「誰か、あの男の生立ちおいたを知っているものはないか」

「生立ちと申しますのは……」

「あの男の子供時代のことだ、いや、それよりも親の時代のことから……」

「左様でございます、みんなもう亡くなりましたね」

「あれの親がエラ物ぶつであつたというではないか。そうして酒を飲んだか」

与八は、変な物のたずね方をするさむらいだと思ひました。横柄おうへいなのは仕方がないが、エラ物であつたというではないか、そうして酒を飲んだか、という尋ね方は、おかしいと思ひました。このさむらいの尋ね方では、エラ物はキット酒を飲むもののようにきめてゐるらしい。

「大先生おおせんせいもお若いうちは、少しは召上りになつたようでござい

ますが……」

と申しわけのようにいうと、さむらいは、

「少しではあるまい、うんと飲んだらう、飲む時は七升ぐらい飲んだらう……」

「え……」

与八が、また返答に苦しみました。七升と相場をきめたのがおかしいことです。六升飲んだか、七升飲んだか、そんなことは誰も知っているはずはない。知っているなら尋ねなくてもいいはずだ。

「それで竜之助はどうだ、これはあまりいけまい」

「え、若先生の方も少しばかり……」

「そうだろう、七升は飲めまい」

妙に七升を振りまわすさむらいだと思いました。また事実、

飲めようと飲めまいと大きなお世話です。米友ならば食つてかかるのだろうが、与八は、おとなしくそれを聞き流していると、^{くだん}件のさむらいはいつこう無遠慮に、

「どうだ、この道場へはお化けが出るという話だが本当か」

「そんな噂うわさがありますか」

「あるとも、武州、沢井の机の道場には夜な夜なお化けが出る、それで誰も道場を預かり手が無い——という噂を聞いて、わざわざたずねて来たのだ」

「へえ、この近所に住んでいるものは、そんなことあ言やしません」

「ともかく、今晚はここへ泊めてもらいたいものだ」

件くだんのさむらいは、道場の板の間の真中へすわりこんでしまいました。

「おとまりなさいまし、お化けなんぞは出や致しません」
与八はおとなしく、この無遠慮なさむらいの言い分を受入れ
ました。

こういう無遠慮なさむらいですけれども、与八は逆らわず、
望み通り、この道場に泊めてやることにして、もてなしました
から、さむらいは大喜びであります。

机の道場にはお化けが出る……与八は初めて聞く噂だが、な
るほどありそうな噂だと思いました。自分の耳に入らないだけ
で、専らもっぱらそういう噂が響いているのではないかと思いました。

そうして与八は、さむらいのために夕食を運んで、自分は水
車小屋へ帰ってしまったあと、件くだんのさむらいは、やはり道場の
真中に藁むしろを布しいて坐り込み、その前には与八の運んだお膳と、
それから、いつのまに、どうして持ち込んだか一升徳利を押据

えて、まず一杯を試みて舌鼓を打ちました。

ほどなく一升の酒を平げ、飯を食い——終ると、膳を押片づけて、行燈あんどんを掻かき立て、謡うたいをうなりはじめます。

謡い終ると、立ち上つて、道場の壁にかけた木刀を取つて、型をつかい、つぎに、槍、棒、薙刀なぎなた、千鳥鎌の類に至るまで、いちいち手に取つて、その型をつかい、それが終ると、肱ひじを枕にして横になりました。

このさむらいは何のために来たか。多分、ここの剣術の名を以前に聞いていて、ちかごろは無住で、お化けが出るというよな噂に興が乗り、半ば好奇心が手つだつて、道を枉まげてたずねてみたものと思われる。

しかし、夜が更ふけて行くと、多摩川の流れの音が、冴さえて聞えるだけで、別段、お化けも出なければ、幽霊も現われず、あ

たら英雄も髀肉ひにくの嘆たんに堪えない有様です。

暫くするとコトリと、道場の隅に物音。屹きつとそちらを振向くと、食い残した食膳に一匹の鼠がはいかかっている。なんだ、泰山たいざんめいどう鳴動もせずに鼠一匹。

さむらいは、手裏剣を抜いて、その鼠めを仕留めてやろうと、狙ねらいを定めたが、この手裏剣が惜しい。鼠一匹の代価に、この手裏剣を再び研とがせるのは愚だ。しかし、つれづれのおりから、よい相手だ。一番仕留めてやろうかな……鼠を打うつに器うつわを忌いむとはこれ。

「叱しッ」

叱りつけると、鼠は膳を飛び下りて道場の隅を走る。暫くあつて、また、こそこそと舞い戻ってくる。

「叱しッ」

追えば、追われた当座だけ逃げて、また戻つて来る。

美濃の大垣の正木段之進は、こうして鼠をにらみ、すくめて動けなくしたということが東遊記に書いてある。このさむらいは、鼠一匹を相手に、追いつ追われつ興がつているが、やはり、器うつつわを忌むいの心で手裏剣は切つて放さない。思い直したと見えて、それを脇差には、さんでしまい、体を斜めにして、傍かたえの木剣を引寄せて、今度来たならば一撃の下もとにと身構えしているとは知らず、三度目にこそこそと板の間の隅を走る鼠。

途中まで来て、踏みとどまつてこちらを見ました。その瞬間、さむらいが、初めてゾツとして、構えた木刀を思わず取落そうとしたのは、踏みとどまつてこちらを見た鼠ねずみの面かおが、その時、ずんと伸びて、ほとんど人面と同じほどの大きさに見え、じつと眼を据えて、こちらを睨にらみ返したからです。

「何を……」

再び、その木剣を取り直した時は、もう鼠の姿は見えず、ただなんとなく、寒気が全身を襲うて来るのみです。

そこで、さむらいはなんだかばかしくもあり、いやな気にもなつて、木剣を抛り出し、そのまま頭をかかえて横になるとまもなく、軽いびきで寝入つてしまいました。が、ずんと大きく、人間と同じほどに伸びた鼠の面だけが、夢の中に残つて、夜もすがらおびえた、そうです。

二十六

その夜は、それだけで無事に明け、翌日、右のさむらいは、御岳山へのぼるといつて立去りました。

与八が、急に江戸へ出かけたくなつたのもその時で、それは今になって、お松の先日いった言葉をつくづく思い出したからです。お松さんのいうのには、あのお屋敷では御老女様に大へん可愛がられているが、本来、あの屋敷というのが、国々の壮士浪人の集まりで、いつ解散されるのだからわからない。もしや御老女様が遠方の国許くにもとへでもお帰りになつてしまつたあとは……と、それとなく身の行末に多少の不安を述べたのを、与八は耳にハサんでは来ましたが、もともと鈍感な男のことですから、今頃になつて漸くそれを痛切に思い出し、わけを話して、こつちへ来て下さいといえ、来てくれない限りはあるまい……そう思い立つと、正直な心から、一刻も早く江戸へ出かけて、お松に念を押ししてみたくなつたのです。

お松の方でも、与八の推察通り、今、自分の身の上について、

多少の不安を感じているところです。

駒井甚三郎は、ムク犬の通知によつて直ちに出向いてくれました。そうして、初めて持ったわが子というものに、母として、親としての一切の仕事を、お松に頼んだのであります。お松としては、頼まれなくてもこの子をてばなす気にはなれません。駒井甚三郎は、それがためにかなりおおくの費用をお松の手に渡して行きました。お松は、それを辞退しましたけれども、辞退すべき性質のものでないと論さされて、いさぎよく預かつておきました。

乳母うばを一人雇うて、念入りにそだてて、朝夕その子をだきかかえて楽しみにしていましたけれど、不安というのは、この屋敷で、どうもおだやかでない人たちの出入りがはげしく、自然、その筋でもめざされていゝし、いつきりこみがあるかわからな

い、というものもあるし、早晚、焼討ちになるだろう、と沙汰さたをするものもあるくらいですから、お松はそれが気にかかつてなりません。御老女様はしつかりしておいでなさるし、集まるほどの人も血気の人には相違ないが、そう悪いことをする人たちではありませんから、危ないことはなかりうと思ふけれど、万一、このお子さんに怪我があつては、という心配が絶えたことではないのです。

そこで或る日、お松は自分の部屋で赤ん坊を抱き、

「登様、あなたは田舎いなかへいらつしやいますか、田舎はおいやですか」

と話しかけました。

話しかけたって返事のできるわけはありませんが、つい口に出で、

「おいやでなければ、田舎へお連れ申しませうか。田舎といつても、そんなに遠いところではありませんよ、与八さんのいるところ」

坊やは、じつとお松の顔を見て、笑いもしないでいるものですから、

「御存じでしょう、与八さんを。あの肥った、親切な人……」

その時、坊やは両手をおどらせて、うれしそうに笑いました。

「登様、もし、あなたがおいやでなければ、わたし、これから手紙を書いて、与八さんのところへ使を頼みますわ。与八さんはよろこんで承知をして下さるでしょう。ですけれども、もし、あなたがおいやですと……田舎に住んでは出世のために悪いようですとつまり、ませんから、いつまでもこつちにいましやうね。どちらに致します」

といつて、お松は登の顔にはお、ずり、をしました。どちらに致すも致さないもありはしない、生れてまだ幾月もたたない子。思案に余ったことがあるものですから、お松はしきりに、このおさ、な、児に話しかけているのです。

「それは御老女様はえらいお方だし、このお屋敷は結構なお屋敷ですけれども、なんだか世間が騒がしいものですから、あなたや、わたしは暫くあつちへ行つていた方がいいかも知れない」
お松の心を、ドチラにかきめてしまわねばならぬ時節がまもなく来ました。

それはいよいよこの本所の相生町の老女の屋敷を引払わねばならぬ時が来たからです。噂うわさによると、土佐の乾退助いぬいたいすけという人が来て、ここに集まる浪士にすすめて、四国町の薩摩屋敷へ併合せしめたということです。

そうして、お松が主としてつかえた老女は、本国へ帰る途中、ひとまず京都に滞留するのだということでした。

老女はどこまでもお気に入りのお松を手放したくはありませんでしたけれど、お松としては、すべての事情が、それを辞退して、別な生活に入らねばならぬ時と考えました。

とりあえず、乳母と、登と、自分と三人で、しかるべき家を借りて一世帯を持つことがいちばん賢明で、それで女手の生活に不安があるならば、与八のところを頼もうというのが、第二の考えでありました。

しかし、第一の考えからお松を急に、第二の考えに飛ばせてしまった事情は、立退き以前にこの屋敷を押囲んで焼打ちがあるという噂と、ちようどこの際、与八がわざわざたずねて来てくれたことであります。

お松は、京都でも、江戸でも、この時代の不安な空気の中に住み慣れてはいましたが、自分ひとりの身ならばともかく、偶然ながら子持ちの身になってみると、今日は暗殺、明日は焼討ち、といったような空気が、そら恐ろしくなつて、この屋敷に住んでいる以上は、自分たちもめざされはしないかという取越苦勞なども起つていたところへ、与八がやつて来て相談をかけたものですから、それに従うのが、いちばん安心だと、その場で心をきめてしまいました。

心がきまれば話は早い方がよいと、お松はそのつもりで御老女に暇乞いいとまごをすると、御老女も惜しみながらゆるしてくれました。そこで、与八のいるうちに出立の用意をととのえて、馬や駕籠かごも頼み、当分の間、乳母ばあやも附いて行つてくれるとのことだから、なお安心して、すべては非常に調子よく捗はかどつてしまいま

した。

そこで、この連中は、打揃つて、程遠からぬえこういん回向院の境内けいだいに、お君の墓参りをして行こうと、花と香とを携えて、門を出ようとする時に、どこからともなくムク犬が現われました。

「ムクや」

それ以来、ムク犬は使命を果して、房州から帰つたには帰つたが、人に姿を見せることが極めて稀れで、必要に応じてはどこから出るともなく出て来て、必要に応じてどこに隠れているともなく、隠れていて出て来ない。

今、この人たちがうちつれて旧主の墓参りに出かけようとする時に、ヒョッコリ姿を現わしたので、一同の者がこの犬の出現を、いたくよろこび迎えました。

しかし、当の犬は、喜べる色もなく、勇める風もなく、一行

の中にまじつて、その行くところへ共に行き、その止まるところへ共に止まろうとする、柔順な態度に見ゆる。

ムク犬のこのごろは、我と我が生存の意義を見出そうとして、いるげに見ゆる。わが使命は、死んだ主人を守ることだけで尽きたのか。そうだとすれば、自分は当然殉死じゅんしすべき運命のもので、今の生存は惰力に過ぎないのか。それとも、まだまだ生きとし生けるものの一生には、生かされてある間に、その使命が尽くるということのないものとすれば、第一の使命終つて第二の使命は何。この犬は極めて謙遜、且つ従順の態度を以て、それを聞こうとしているようにも見える。自然、この犬には、主人の墓側で食を断つて死ぬという古えいにしへの忠犬に超出した高尚のふうが見える。

とまれ、この一行、お松は香と花を携えて先に立ち、乳母ぼあやは登

を抱き、与八は郁太郎を背負い、ムク犬はその間を縫うて、例の回向院の墓地の中に進んで行きました。

二十七

この一行が回向院の墓地へお墓参りに来た日、その境内の西洋奇術大一座がちょうど千秋楽の日でありました。

この興行は、大入り満員の売切れつづきで、すばらしい人気を博したのみならず、その人気に該当する実質を、見る人に与えたようです。たしかに、今までに見ないものを見せ、見た者を堪能させるだけの内容をそなえていたに違いない。

しかし、太夫元のお角は、興行が成功したほどに嬉しそうな面を見せないで、どうかすると癩癩を起して当り散らすことも

あるようです。と行って、そのくらいはどうも仕方がない。最初の期待では、まかりまちがえば骨になるくらいの度胸をきめていたのが、せつかく彫り上げた骸骨に牡丹の刺青ほりものが役に立たず、諸肌もろはだ押しぬいでタンカを切る物凄い場面も見せないで済んだのが、何よりというものです。

お松、与八、ムク犬の一行が、回向院の墓地についた時分は、ちようど、千秋楽の追出しの時刻で、今しも、場内にのまれていた幾千の観客が、潮うしおのように吐き出される時でした。

「オレのだい、オレのだい、オレの下駄げだだよウツ」

下足場の人ごみの中で、おそろしく下卑げびた太い声でわめき出したのが、キツカケで、そこから大混乱が起ったところですよ。

なんでも下駄を間違えたやつを、一人がなぐり飛ばしたのが原因もとで、芋を揉もむような下足場が、忽たちまち修羅しゆらの巷ちまたとなつてしま

いました。

そこで、取組み合い、なぐり合い、引搔き合いが見ているうちに起り出し、女子供は泣きさげんで救いを求めるの有様です。高いところで見ていたお角は、直ぐにその目の下の混乱によって、また始めやがったなという苦々しい表情です。

「オレのだい、オレのだい、オレの下駄だつてえばよう」
下卑た声が甚だしい耳ざわりで、混乱の中から起るのを聞いていると、たしかにこの混乱の原因は、下駄の擁護から起つてゐるらしい。人より三分間ばかり下駄を後に穿くか、先に穿くかという問題から、なぐり合い、つかみ合い、引搔き合い、取組み合いが起つたものらしい。どうもそのほかには、お角にも原因らしいものが見当りません。

幸いに、お角は少しばかり高いところにいたものですから、

この混乱の現状を、活動写真を見るよりも鮮やかに見て取るこ
とができました。しかし、お角は、この騒ぎは、甲府の一蓮寺
の時のように、おおごと大事にはならないと見て取りました。混乱する
だけ混乱させ、取疲れるまで取組ませておけば、おのずから静
まる性質のものだと、タカタカをくくつていたのです。

「オレのだい、オレの下駄だと、さつき先刻からいつてるじゃねえか
よう」

こういう場合のか噛み合いの特長は、きまつた相手というもの
がなく、最も手近なところにあるありあわせの頭がその相手で
あります。喧嘩の上手というのは、最も僅少の時間に、最も多
くの頭をなぐり、素早く身をひく人間のことで、その最も拙劣
なのは、最も多くなぐられながら、その一人の相手をもつかま
えることのできない人間であります。

しかし、下手も上手も、共に一時いつときで、お角の見込み通り大事に至らずして、やがて、この活劇もおしまいになり、千秋楽のお景物として、一つの愛嬌を添えたもののように消滅してしまつたのは、いよいよ市いちが栄えたと申すものです。

それをお角はひややかに笑い捨てて、ざつと場内をめぐり歩かうち、ふと、例のところへ来て、場外を見ると、以前にながめた通り、そこは回向院境内の墓地であります。

お角のながめることがもう少し早かつたならば、そこに以前の一行がおまいりに来ていて、ことにその中には、お角の熟知しているムク犬も加わっていたことだから、お角とてもだまつてはおれなかつたらうが、この時はもう一行は去つて、誰もおらず、ただ香のけむりが断々きれぎれとしてのぼっていることによつて、お角はまたあのお墓へ誰かおまいりに来たなと思つただけでし

た。

あのお墓へは、駒井甚三郎もお参りに来たし、今日もまた誰かお参りに来たようだが、いったい誰の墓なんだろうと軽くお角の頭にのぼっただけで、それ以上には想像を逞たくましくすることはありませんでした。

もう少し深く突きとめて、これが、嘗かつては自分の下に使ったことのある、お君という薄命な娘の、地上における存在の記念であると知ったならば、お角とても、そのままにはしていなかつたろうに――

今のお角には、お君という女の死生ししようも知らず、まためまぐるしいこのごろの生活では、ホンの少しばかり念頭に上つて来ることさえ極めて稀れであつたのです。

それで、あつさり、それだけが頭脳にうつただけで、や

がて階きざはしを下つて、土間から楽屋の方へと進んで行くと、楽屋の入口でやかましい人の声。

その声を聞きつけて、お角は忽たちまち気取けどつてしまいました。

寄生虫がやって来たな。

興行界を渡りあるくゴロがやって来たな、今まで来なかつたのが不思議だが、果してやって来た、千秋楽を見込んでやって来たからには、ただは動くまいと、お角は度胸をきめてその方に出向くと、

「親方！」

ゴロが早くも認めて呼びかけました。その背後には四五人の同勢がいる。

「何です」

「おめでとう、大当りでおめでとう。だが親方、いいことの裏

には悪いことがある、あんまり当り過ぎると罰ばちが当るから、用心しなくちゃいけねえぜ」

「大きに有難う、それがどうしたというの」

「勝つて兜かぶとの緒を締めろとはここなんだぜ、親方」

「何だかわからないよ」

「高い木は風に揉まれるというやつさ……親方が大当てに当たもんだから、世間から目ざされるようになったんだ。世間から目ざされるようになるにあぶない」

「何があぶないんだエ、なにもわたしは、世間様から目ざしてもらおうともなんとも思つちやいなんだよ、名前を売りたいとか、親分になりたいとか、そんな了見りようけんでやつてるんじゃないやありませんからね、商売でやつてるんだから、当ることもありや、外はずれることもありまさあね」

「まあ、そう、ポンポンおいしいなざるな、親方のためと思えばこそ、こうしてやって来たんだから」

「大きに御苦労さま……何か、わたしを暗討ちにでもしようという噂があるんですか」

「そういうわけじゃねえがね、つまり、人気をしめた時は、財布をあけるというたとえがあるでございましょう、そこですよ、世間の口がうるさくつていけねえ、ばかばかしいようなもんだけれど、そこがそれお愛嬌で、如才なく立廻らないと損ですからねえ。早い話がわつしたち四五人が、これから盛り場を廻つて、女軽業の親方はこれこれだと触れ廻つてごらんなさい。白いものでも忽ちたちま黒くなり、黒いものでも忽ち白いものになりますからね」

お角もこの道の苦労人ではあり、馬鹿ではありませんから、

この連中を相手に争つては損だということぐらいは知っています。事実、この連中が気を揃えようと、場合によつては、せつかくの名興行師を塗りつぶすこともできるし、また一夜作りの千両役者を仕立てて、世間をオドカすることもできるのだから、お角の氣象としてはこの場合、がいしゆういつしよくてき鎧袖一触的にやってみたいのだが、鎧袖一触も用いようによつては大笑いの種ですから、あまり力りきまないのがよいと思ひました。そこで、

「御尤ごもつともでございます、なにぶん行届かない我儘者わがままものでございますから、この後ともによろしく。どうかまあ、こちらへお上りくださいましな」といつて、丁寧ていねいに上へ招じたのは、お角としては気味の悪いほどの如才じゆさいなきです。

いつの世、いかなる社会にも、寄生虫というものは絶えたこ

とはないが、真正の批評家は極めて稀れである。

寄生虫は、瓦礫がれきを鍍金めっきして、群衆に示し、共謀して、それになるべく高価に売りつけようとする。そうして、蔭で舌を吐いていう、

「こんな代物しろものでも、おれたちの手にかかれば、これだけの高値たかねに売れる」

寄生虫のいいたいことは、これだけである。為し得ることもまたそれだけである。

けれども、独特の生活力を有していない生物は、どうかするとこの寄生虫に食われてしまうことがある。

招かざるにきた来るバラサイト。

わが親愛なるお角さんを、こういうもののために苦心させたくない。

自分を、タカ、の知れた女軽業の親方以上には評価していないお角さんは、自分の仕事の性質を、ジョン・ラスキン氏のところへ聞きに行くわけにもゆかず、タンカは切ってみるものの、そこは女の身、ガラリと折れて寄生虫の四五人を上座に招じ、厚くもてなした上に、おみやげまでも調べて、帰る時は先へ廻つて下駄まで揃えて帰したお角さんは、憎むべき人でもなんでもなくて、ほんとうに可愛い人ではありませんか。

こうして西洋大奇術は千秋楽となり、その翌日、与八とお松の一行は、沢井へ向つて出立すると、まもなく、御老女はまた多くの供をつれて、かみがた上方へ出かける。それがすむと、集まるほどの浪士たちが、ずいぶん仰々しい勢いで、この屋敷を引払いました。

浪士たちの行くところは、無論、芝の三田の四国町の薩摩の

屋敷でありました。

浪士たちが、半ば示威運動みたような勢いで、花々しくこの屋敷を引払うと、その晩のことに、火が起つて、この屋敷を焼き払つてしまいました。

その火の起りについては、浪士たちが自分でつけて去つたのだという説もあれば、市中取締が焼き払つたのだという説もあつて、どちらがどうだか、よくわかりません。

しかし、この屋敷一軒だけで食いとめたのはまだ幸いでありました。附近の人は、むしろこの立退きと、焼払いをよろこんだようです。これで相生町の名物が、一つなくなつたわけですが、危険区域が移転したような心持で、近所の人々が枕を高くしたのも、無理のないところがあります。けれども、原則からいって、一方に消滅したものは、必ず一方に増加するわけですから、次

には芝の三田の四国町の薩摩屋敷に、また一層の危険分子が加わって、江戸市中の脅威になるといふ結果になるかも知れない。

実際、薩摩屋敷に集まるものの目的と行為は、江戸の市中を脅威したり、愚弄したりするため存在しているような形でありましたが、そうかといつて、これを一概に、暴民暴徒の巢のようにいつてしまうのは誤りです。また、こういうものを存在せしめた策士の横暴を、無条件に憤るのも当らないことでもあります。

薩摩屋敷へ浪士を集めたのは、西郷隆盛と後の板垣退助も関係していたということですが、徳川幕府を倒さねばならぬという志士浪人の頭に、同時にひらめくのは、いつも徳川と薩摩との仲をよくさせてはならないということでありました。

徳川家と薩摩とは、姻戚いんせきの関係もあつたりして、どうかする

と默契が成立しそうになる。もしも薩摩が徳川をたすけることになる、せっかく倒れかかった徳川の家には、有力な根つきが出来た結果になつて、そうなつては天下の改革の時がおくれる。徳川と薩摩とを握手させてはならない。江戸の市民をして、薩摩を憎ましめるように、薩摩をして、幕府を脅威せしめるようにしかなければ、大事をあやまるの形勢となることを、志士浪人の間には深く考えていたものがあるのです。

後の鳥羽伏見の戦いも、一は、この四国町の薩摩屋敷の焼討ちが、のつびき退引させぬことにしたので、志士浪人の計画は、思うように的中し、明治の改革には、これがまた有力な動因とはなつているが、表面上、その形勢を見れば、暴悪の徒を蓄えて、江戸の上下を脅威愚弄した傍若無人ぶりに、腹の立つのも無理のない次第でした。

何事もみな、歴史の大きな潮流の現われに過ぎません。少なくとも関ヶ原の戦いまで遡らねば、事の是非善悪は、たやすくは説明のできないことでもあります。

さても、相生町の老女の屋敷は、構えが相当に大きかっただけに、天明までも燃えつづいておりましたので、見物は山のように群がりました。なかには、これを痛快がつて、このついでに三田の四国町まで押しかけて、薩摩屋敷を焼き払えというものもありましたが、また一方には反対に、江戸の市中を焼き払われないうようにと、心中におそれを抱くものもありました。

高尾の山で、七兵衛と泊り合わせた神楽師の一行が、ちようどここへ来合わせたのは、まだ余燼よじんが盛んに燃えている早朝のことで、この有様に意外な感じをしたが、さあらぬ体ていで、これも三田の方面へ踵すねをめぐらしたから、誰もあやしむものはあり

ません。

二十八

ここはどこだか知らない。机竜之助は何里つづくとも知れない大竹藪おおたけやぶの中をひとりであるおいている。

この時は夜です。身に白衣びやくえを着て、手には金剛杖こんごうづえをついている。この大竹藪の夜は、幸いにして見通す限り両側に燈籠とうろうがついている。

この時は、眼が見えるのです——それに程よい間隔まかくを置いて、両側に立てられた四角な燈籠の光が、朦朧もうろうとして行手を照らしている。その光は青くして白い色がある。

けれども、いくら歩いても同じ大竹藪で、いくつ燈籠を数え

でも、みな同じ形で、同じ光で、同じ色に過ぎない。これでは、歩いてても、歩かなくても、同じようなものだ。

ただ、足がなんともいえず軽快である。同じような藪の中と、同じような燈籠をいくつ数えて歩いてても、疲れるということを知らない。そこで、おなじような道を歩む。

「もし」

ふと、その燈籠の一つの下で人影を見出したから、歩みをとどめて竜之助が問いかけました。

「これは真直ぐに行つてよいのですか」

問われたのは女の子です。髪をかむろに切りまわし、秋草をおぼろ染めにしたような単ひしえの振袖を着て、燈籠の下に小さく立っていました。が、竜之助にたずねられて、ニッコリときびしく笑い、

「どこへおいでになりますか」

「白骨の温泉へ……」

「白骨……そんな温泉はこの近所にはございませんよ」

「ない？」

「ええ、ハツコツなんて名前の温泉は、この近所にはございません」

「ないはずはないのだが……」

「それでは字に書いて見せて下さいな」

「請こわれて竜之助は、金剛杖を取り直して、地上に、「白骨」の文字を認したためました。その白骨の文字が、なんとあざやという鮮かな青味を持つていることでしょう、さながら、翡翠ひすいの光を集めたようにかがやきましたので、竜之助もその文字に見入りますと女の子は、

「それはハツコツとお読みになつては違います、シラホネと読むのでございます」

「どちらでもいいではないか」

「いいえ、シラホネとお読みにならなければ違います」

「それでも、白馬しろうまたヶ岳けをハクバと読むように……」

「白骨しらほねの温泉は、昔白船しらふねの温泉といいました、それを後の人がシラホネと読むようになりました。それをまたハツコツとお読みになつたのでは人が迷います」

「では、そのシラホネへ行く道は？」

竜之助が、素直すなおに問い返しますと、路上に記された「白骨」の文字を、またたきもせずに見ていた女の子が、

「そうですね……やっぱり、ハツコツの方がようございますか知ら。シラホネと読むのも、ハツコツと読むのも、同じような

ものですけれど……」

竜之助の問いには答えないで、女の子はしきりに文字の末に拘泥こうでいしていますから、

「読み方はドチラでもよろしい、わしは、ただそこへ行く道を知りたいのだ」

といいますと、女の子は、

「それを教えて上げましょうけれど、あなたは白骨の温泉へ何しにおいでなさるの」

「身体からだを丈夫にするために……」

「身体を丈夫にして、何をなさるの？」

「それは……」

「身体を丈夫にして……」

「……」

ふと少女の立っていた燈籠とうろうの火が消えました。一つ消えると、すべての火がことごとく消えてしまいました。

竜之助は、こま、しゃく、くれた女の子だと思いました。

しかし、燈籠が消えては一步も進むことができない。

「お待ちなさい、今、燈火あかりを持って来てあげますから」

まもなく、螢火ほどの線香を掲かかげて、以前の燈籠に火を入れると、その燈籠の形が髑髏どくろになりました。竜之助は、瞬きもせず、その髑髏を見つめると、

「あなた、その人を御存じ？」

と女の子がいいました。

「知らない」

「では、この人は？……」

女の子は前に進んで、次の燈籠へ火を入れると、おなじよう

な髑髏の形となりました。竜之助はそれに眼をうつし、

「やはり、知らない人だ」

「そうですか、それでは、この人は？……」

と、女の子はまた三步進んで、次の燈籠に火を入れると、同じくそれも髑髏の形。

「知らない」

「御存じのはずなのに……」

女の子は小首を傾かしげて前へと進みながら、線香の火を大事にして、

「これなら、キットおわかりでしょう」

その線香を燈籠の下に入れる。と、そこに現われたのは髑髏ではありません、まさしく女の生首なまくびでありました。

「……………」

竜之助は、近く摺寄すりよつて、その生首をつくづくとながめます。

「ちえッ」

と彼の額に白い光がひらめきました。

金剛杖を取り直して、それを打ち倒して、首を地上へ打ち落とすと、女の子は、

「そんなことをしたつて駄目ですよ、あなたはこの燈火あかりがなければ、一足も歩けないくせに——」

と言つて、その螢火ほどの線香を、竜之助の前にかざして見せましたが、やがて、竜之助には頓着なしに、先へ進んで、つぎからつぎへとその燈籠をつけて歩きます。燈籠という燈籠は、ここごとく髑髏にあらざれば人の首です。

竜之助は、うんざりしました。何里あるか知れないこの道を歩くには、いちいちあの首を見て歩かなければならないのか。

ふりかえつて見ると、いつのまにか、後ろの方もおなじ髑髏の燈籠。

はて、ここはいつたどこだろう。昨日塩尻峠を越えたばかりなのに——桔梗ヶ原きぎょうはらか、五千石通りか……

それを考えた時は、うつつ心の出でた時で、まもなく鶏の聲が耳に入るのを覚えました。塩尻しじりの宿やどの、夜明けの肌寒いのを覚えると、傍かたえにすやすやおだやかなお雪の寢息。ああ、夢であつたかと覚さとるのは常の人のことで、この男には、夢と現実との区別がありません。否、現実はことごとく暗黒の虚無で、夢みている間だけに、物の真実が現われてくるようです。

後註

一 「言」は底本では「行」

大菩薩峠 白骨の巻

底本：「大菩薩峠 7」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行
2003（平成 15）年 4 月 20 日第 2 刷発行
「大菩薩峠 8」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 五」筑摩書房
1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

※疑問点の確認にあたっては、「中里介山全集第五巻」筑摩書房、1970（昭和 45）年 12 月 22 日発行を参照しました。

入力：大野晋、門田裕志、tatsuki

校正：原田頌子

2004 年 1 月 8 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。